

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第1集

原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡

幡ヶ谷川流域総合整備計画（圃場整備事業）
に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書II

1997

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第1集

原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡

幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）
に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書II



原の辻遺跡（大川地区）出土越州窯系青磁（外）

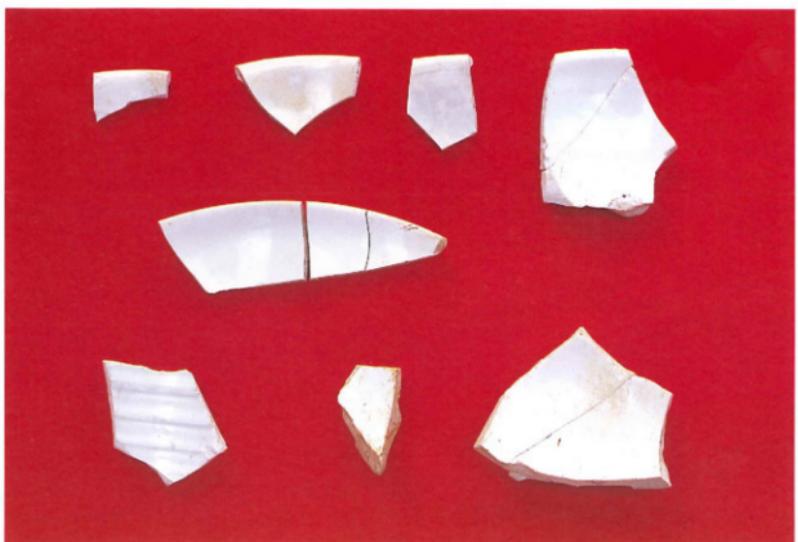


同

(内)



原の辻遺跡（大川地区）出土白磁 I 類（外）



同

(内)



原の辻遺跡（大川地区）出土白磁（産地不明）（外）



同

(内)



原の辻遺跡（大川地区）出土長沙窯系水注



安国寺前 A 遺跡出土 （上）鉄帶 越州窯計青磁
（下）綠釉陶器 越州窯系青磁

序

壱岐は、玄界灘に浮かぶ面積約138km²の島で、古くから日本と大陸とを結ぶ海上交通の要衝として重要視されてきました。そのため現在でも数多くの文化遺産を保ち、遺跡の宝庫として貴重な地域でもあります。一方、島には県内でも有数の穀倉地である深江田原と呼ばれる平野があり、近年、農業基盤の整備が進められております。

こういったなかで、長崎県教育委員会及び地元の芦辺町・石田町教育委員会では、地元の方々の御理解と御協力をいただきながら平成5年度から農業基盤整備にかかる埋蔵文化財について発掘調査を実施してまいりました。今回報告いたします原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡の調査も、圃場整備事業に伴い平成6年度から平成7年度にかけて実施したものです。

原の辻遺跡につきましては、平成5年度の調査により大規模な環濠集落であることが明らかになり、また中国の歴史書『三国志』「魏志倭人伝」に記載されている「一支国」の中心集落であることが特定され、学術上極めて貴重な遺跡であると考えております。

遺跡の重要性を踏まえ、昨年12月には文化庁に国史跡指定の申請書を提出いたしました。この春にも国史跡に指定されるものと期待しているところでございます。

このように弥生時代の遺跡として有名な原の辻遺跡ではありますが、今回の調査では奈良時代から平安時代にかけての貴重な遺構や遺物も発見されました。特に古代の道路跡や中国産陶器類などの出土は、原の辻遺跡が古代においても重要な地であったことを証明してくれるものと確信いたしております。

最後になりましたが、今回の調査ならびに本書の刊行にご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げ発刊のあいさつといたします。

平成9年3月31日

長崎県教育委員会教育長 中川忠

例　　言

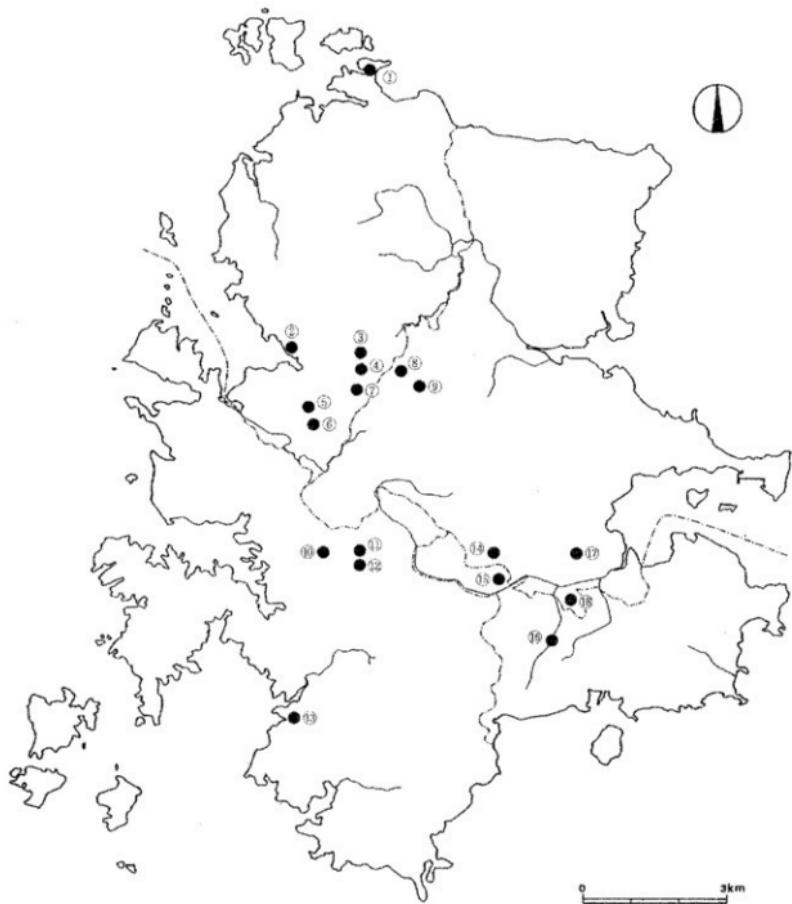
1. 本書は、長崎県岩岐郡芦辺町および石田町に所在する原の辻（はるのつじ）遺跡・芦辺町深江采触に所在する安国寺前（あんこくじまえ）A遺跡と安國寺前（あんこくじまえ）B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、幡鉢川流域総合整備計画に伴って長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会・石田町教育委員会が主体となって、平成6年度から7年度にかけて実施したものである。
3. 本書の執筆は以下のとおりである。

I・II	山下英明（原の辻遺跡調査事務所）
III-1	川口洋平（　　　同　　　）
III-2	山下
III-3	松永泰彦（芦辺町教育委員会）
III-4	宮崎貴夫（原の辻遺跡調査事務所）
III-5	宮崎
III-6	宮崎
IV	川口

4. 本書で使用した遺物の実測および遺物と遺構の製図は、原の辻遺跡調査事務所がおこなった。遺物の分類・整理については横山順氏の協力を得た。
5. 本書に関係する遺物・図面・写真は、原の辻遺跡調査事務所で保管している。
6. 本書の編集は山下・川口による。

目 次

I. 遺跡の立地と環境.....	1
1. 地理的環境.....	1
2. 歴史的環境.....	1
II. 調査経過.....	5
1. 調査に至る経緯.....	5
2. 調査の組織と関係者.....	5
III. 調査.....	7
1. 原の辻遺跡（平成6年度大川地区）の調査.....	7
2. 原の辻遺跡（平成6年度川原畠地区）の調査.....	27
3. 原の辻遺跡（平成6年度芦辺高原地区）の調査.....	79
4. 原の辻遺跡（平成7年度芦辺高原地区）の調査.....	95
5. 安国寺前A遺跡の調査	119
6. 安国寺前B遺跡の調査	149
IV. まとめ	161



地名	化石種名	時代	地名	化石種名	時代
1. 佐久島	ヒトヘビ	新・古	2. 伊戸	白鶴	新・古
3. 佐久島	アラシ	新・古	4. 伊戸	白鶴	新・古
5. 佐久島	アラシ	新・古	6. 伊戸	白鶴	新・古
7. 佐久島	アラシ	新・古	8. 伊戸	白鶴	新・古
9. 佐久島	アラシ	新・古	10. 伊戸	白鶴	新・古
11. 佐久島	アラシ	新・古	12. 伊戸	白鶴	新・古
13. 佐久島	アラシ	新・古	14. 伊戸	白鶴	新・古
15. 佐久島	アラシ	新・古	16. 伊戸	白鶴	新・古
17. 佐久島	アラシ	新・古	18. 伊戸	白鶴	新・古
19. 佐久島	アラシ	新・古	20. 伊戸	白鶴	新・古
21. 佐久島	アラシ	新・古	22. 伊戸	白鶴	新・古
23. 佐久島	アラシ	新・古	24. 伊戸	白鶴	新・古
25. 佐久島	アラシ	新・古	26. 伊戸	白鶴	新・古
27. 佐久島	アラシ	新・古	28. 伊戸	白鶴	新・古
29. 佐久島	アラシ	新・古	30. 伊戸	白鶴	新・古
31. 佐久島	アラシ	新・古	32. 伊戸	白鶴	新・古
33. 佐久島	アラシ	新・古	34. 伊戸	白鶴	新・古
35. 佐久島	アラシ	新・古	36. 伊戸	白鶴	新・古
37. 佐久島	アラシ	新・古	38. 伊戸	白鶴	新・古
39. 佐久島	アラシ	新・古	40. 伊戸	白鶴	新・古
41. 佐久島	アラシ	新・古	42. 伊戸	白鶴	新・古
43. 佐久島	アラシ	新・古	44. 伊戸	白鶴	新・古
45. 佐久島	アラシ	新・古	46. 伊戸	白鶴	新・古
47. 佐久島	アラシ	新・古	48. 伊戸	白鶴	新・古
49. 佐久島	アラシ	新・古	50. 伊戸	白鶴	新・古
51. 佐久島	アラシ	新・古	52. 伊戸	白鶴	新・古
53. 佐久島	アラシ	新・古	54. 伊戸	白鶴	新・古
55. 佐久島	アラシ	新・古	56. 伊戸	白鶴	新・古
57. 佐久島	アラシ	新・古	58. 伊戸	白鶴	新・古
59. 佐久島	アラシ	新・古	60. 伊戸	白鶴	新・古
61. 佐久島	アラシ	新・古	62. 伊戸	白鶴	新・古
63. 佐久島	アラシ	新・古	64. 伊戸	白鶴	新・古
65. 佐久島	アラシ	新・古	66. 伊戸	白鶴	新・古
67. 佐久島	アラシ	新・古	68. 伊戸	白鶴	新・古
69. 佐久島	アラシ	新・古	70. 伊戸	白鶴	新・古
71. 佐久島	アラシ	新・古	72. 伊戸	白鶴	新・古
73. 佐久島	アラシ	新・古	74. 伊戸	白鶴	新・古
75. 佐久島	アラシ	新・古	76. 伊戸	白鶴	新・古
77. 佐久島	アラシ	新・古	78. 伊戸	白鶴	新・古
79. 佐久島	アラシ	新・古	80. 伊戸	白鶴	新・古
81. 佐久島	アラシ	新・古	82. 伊戸	白鶴	新・古
83. 佐久島	アラシ	新・古	84. 伊戸	白鶴	新・古
85. 佐久島	アラシ	新・古	86. 伊戸	白鶴	新・古
87. 佐久島	アラシ	新・古	88. 伊戸	白鶴	新・古
89. 佐久島	アラシ	新・古	90. 伊戸	白鶴	新・古
91. 佐久島	アラシ	新・古	92. 伊戸	白鶴	新・古
93. 佐久島	アラシ	新・古	94. 伊戸	白鶴	新・古
95. 佐久島	アラシ	新・古	96. 伊戸	白鶴	新・古
97. 佐久島	アラシ	新・古	98. 伊戸	白鶴	新・古
99. 佐久島	アラシ	新・古	100. 伊戸	白鶴	新・古

壱岐島主要遺跡分布図 (1/100,000)

I. 遺跡の立地と歴史的環境

1. 地理的環境

遺跡の所在する壱岐島は、玄界灘に浮かび、佐賀県呼子の北26km、福岡県博多の北西67km、対馬の南東67kmに位置する。島の面積は附属島を含め139km²で、南北17km、東西15kmの小規模な島である。島の基盤をなすのは第三紀の堆積岩で、その上を玄武岩が覆う。標高100m超える山地が占める面積は極めて小さく、最高峰の岳の辻でも212.9mを測るにすぎない。

分水嶺は西に偏り、島内最長の櫛鉢川(8.953m)は島の南東を西から東へ流れ内海湾に注ぐ。櫛鉢川流域には、島内最大の平野が発達しており、通称「深江田原」と呼ばれ県内有数の穀倉地帯となっている。

原の辻遺跡は、この平野の東部に位置し、南から突き出した標高8～18mの舌状台地上及びその周辺の現水田面に立地する。安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡は、この舌状台地の北350mに位置し、標高7～8mの現水田面に立地する。

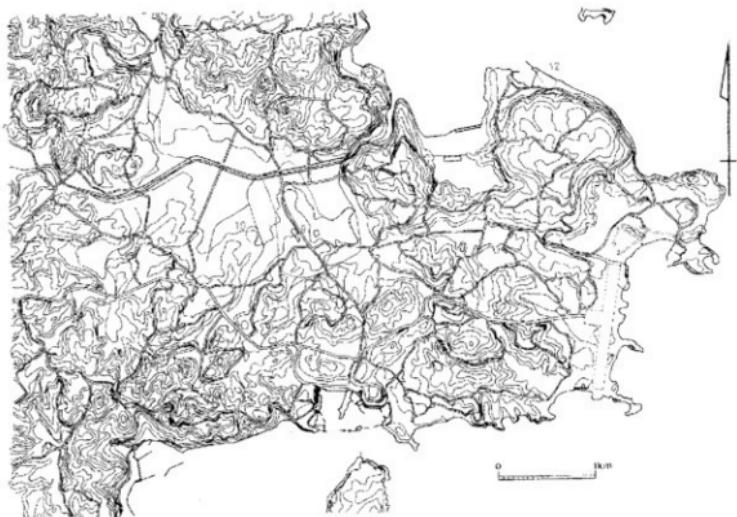
2. 歴史的環境

壱岐島における旧石器時代の遺跡は、現在7箇所が知られている。この中で原の辻遺跡は、最もまとまった遺物が出土している⁽¹⁾。なかでも台形様石器は「原の辻型台形石器」として標式的な石器となっている。その他原の辻遺跡の周辺では、興触遺跡⁽²⁾・興原遺跡⁽³⁾などでナイフ形石器などの遺物が採集されている。

縄文時代の遺跡は、島の西海岸沿いに多く名切遺跡⁽⁴⁾・鎌崎遺跡⁽⁵⁾・松崎遺跡⁽⁶⁾などが著名である。一方島の東側においては縄文遺跡の分布は希薄であり、内海湾南岸に立地する堂崎遺跡⁽⁷⁾から縄文晚期の土器群が採集されている程度である。

弥生時代になると、壱岐の遺跡の代名詞ともいえる原の辻遺跡・カラカミ遺跡などがあるが、いずれもその開始期は前期後半まで待たなければならない。前期前半の遺跡は、ほとんど調査例がなく不明な点が多いが、最近の調査で壱岐島最北端の勝本町串山ミルメ浦遺跡⁽⁸⁾から縄文晚期終末～弥生前期初頭の空袋文土器が出土している。原の辻遺跡⁽⁹⁾やカラカミ遺跡⁽¹⁰⁾における最古の資料は現在のところ前期末の板付II式土器であり、この頃から集落が営まれたことが考えられる。他に前期後半の遺跡としては、原の辻遺跡の北約150mにある閑線遺跡⁽¹¹⁾があり、ここでは壺棺墓、石棺墓群が確認されている。

中期以降になると、遺跡の数も増え現在約60箇所が知られている。しかし調査例が少なくその実態は不明なものが多い。こういった中で、原の辻遺跡とカラカミ遺跡は大正時代に周知されて以来、幾度か調査されてきた。特に平成5年度の調査では、原の辻遺跡が大規模な環濠集落であることが明らかになり、「雄志」倭人伝に記された「一支国」の中心集落であることが確定になった。一方、カラカ



第1図周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

番号	遺跡名	所在地	種別	立地	時代
1	觀城遺跡	芦辺町湯岳今坂触	遺物包含地	丘陵 弥・古・中	
2	興触遺跡	芦辺町湯岳興触	遺物包含地	丘陵 先・繩・弥・古	
3	興原遺跡	石田町湯岳興触字大川・興・古川	遺物包含地	丘陵 先・弥・古	
4	壹岐國安国寺跡	芦辺町深江榮触	寺跡	山 中世	
5	大塚山古墳	芦辺町深江榮触	古墳	丘陵 古墳	
6	安恒守前A遺跡	芦辺町深江鶴亀触字閑縁	遺物包含地	平地 弥・古・奈・平・中	
7	安国寺前B遺跡	芦辺町深江鶴亀触字閑縁	遺物包含地	平地 平安・中世	
8	閑縁遺跡	芦辺町深江鶴亀触字閑縁	墳墓	丘陵 弥生	
9	鶴田遺跡	石田町池田仲触字鶴田	墳墓・遺物包含地	台地 弥生	
10	原の辻遺跡	芦辺町深江鶴亀触・石田町石田西触ほか	集落跡・墳墓	台地 先・弥・古・奈・平・中	
11	椿遺跡	石田町池田東触字椿	遺物包含地	台地 古・奈・平	
12	堂崎遺跡	石田町山崎触字堂崎	遺物包含地	海岸 繩・弥・古	

表1 周辺主要遺跡地名表

ミ遺跡も、昭和57年以降の調査で環濠を持つ集落であることが判明し、貴重な青銅器や豊富な鉄器も出土している。集落の規模においては原の辻遺跡に劣るもの、やはり「一支国」における拠点的集落の一つであったと思われる。両遺跡ともその最盛期は中期後半から後期後葉にある。その後、後期終末から古墳時代初頭にかけての遺物は減少しており、この時期に集落も衰退していったものと考えられる。

壱岐島内で最古の古墳は、大塚山古墳⁽¹²⁾で5世紀後半の築造であるとみられている。円墳で竪穴系横口石室を持つこの古墳は、原の辻遺跡を見下ろす小高い山の上に築かれている。その他壱岐島内には270基の古墳があるが、ほとんどが6～7世紀の築造である。代表的なものでは県下最大の円墳である鬼の窟古墳⁽¹³⁾、同じく県下最大の前方後円墳である双六古墳⁽¹⁴⁾、金銅製の馬具が出土した符塚古墳⁽¹⁵⁾などがある。ところで、古墳時代の集落は原の辻遺跡で竪穴住居跡が数例検出されている⁽¹⁶⁾程度で判然としない。今後の調査による資料の増加を期待したい。

6～7世紀の遺跡としては、前述した串山ミルメ浦遺跡⁽¹⁷⁾がある。この遺跡は砂丘上に立地し、干鮑などを生産加工した遺跡であると考えられおり、亀トが出土していることでも有名である。

奈良時代以降は、壱岐島も律令体制の支配下に置かれ、国府、国分寺が設置され國の扱いを受けるようになる。国分寺については壱岐島分寺⁽¹⁸⁾の調査例があり、礎石や瓦などが検出されている。国府についてはその所在地について諸説あり、考古学的には実証されていない。しかし原の辻遺跡において出土した木簡⁽¹⁹⁾や今回報告する原の辻遺跡大川地区の調査結果から何らかの手掛かりが得られるものと期待している。

註

- (1) 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』(三)長崎県文化財調査報告書第37集 1978
- (2) 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』(II)長崎県文化財調査報告書第31集 1977
- (3) 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第26集 1976
- (4) 長崎県教育委員会『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書第71集 1985
- (5) 横山 順・田中 良之『壱岐・鎌崎海岸遺跡について』『九州考古学』九州考古学会 1979
- (6) 木村幾多朗『松崎遺跡試掘調査概要報告』勝本町教育委員会 1979
- (7) 長崎県教育委員会による分布調査及び芦辺町教育委員会松永泰彦氏による探査。
- (8) 1995年、勝本町教育委員会の調査により出土。
- (9) 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集 1995
- (10) 勝本町教育委員会『カラカミ遺跡』勝本町文化財調査報告書第3集 1985
- (11) 1954年、上地改良工事中に甃棺、石棺が発見され、その後東亜考古学会の川端真治氏らが調査を行い甃棺・石棺それぞれ10枚基づつを確認したことが当時の新聞記事に記されている。さらに、1995年の岡場整備工事中にも甃棺、石棺が発見され、長崎県教育委員会が其数確認の調査を行い石棺10基、甃棺6基などを検出した。
- (12) 壱岐国研究会『大塚山古墳』石室尖渦調査報告書 壱岐郡文化財調査委員会 1983
- (13) 芦辺町教育委員会『大塚山古墳』長崎県芦辺町文化財調査報告書第2集 1987
- (14) 芦辺町教育委員会『鬼の窟古墳』長崎県芦辺町文化財調査報告書第4集 1990

- (10) 長崎県教育委員会『県内古墳詳細分布調査報告書』長崎県文化財調査報告書第106集 1992
- (15) 同上
- (16) 芦辺町教育委員会『原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第9集 1995
- (17) 勝本町教育委員会『中山ミルメ浦遺跡』勝本町文化財調査報告書第4集 1985
勝本町教育委員会『串山ミルメ浦遺跡』勝本町文化財調査報告書第7集 1989
勝本町教育委員会『串山ミルメ浦遺跡』勝本町文化財調査報告書第8集 1990
- (18) 芦辺町教育委員会『壱岐島分寺Ⅰ』長崎県芦辺町文化財調査報告書第5集 1991
芦辺町教育委員会『壱岐島分寺Ⅱ』長崎県芦辺町文化財調査報告書第7集 1993
芦辺町教育委員会『壱岐島分寺Ⅲ』長崎県芦辺町文化財調査報告書第8集 1994
- (19) 平川 南「長崎県壱岐郡原の辻遺跡出土の木簡」 許9に同じ

参考文献

1. 横山 順『壱岐の古代と考古学』『玄界灘の島々』海と列島文化3 小学館 1990
2. 長崎県教育委員会『原始・古代の長崎県』資料編 I 1996

II. 調査経過

1. 調査に至る経緯

今回実施した原の辻遺跡、安国寺前A遺跡、安国寺前B遺跡の調査は、県営鈴鉢川流域総合整備計画の一環として行われる圓場整備事業に伴う緊急発掘調査である。この計画及び事業の策定から調査実施までの経緯については、長崎県教育委員会刊行「原の辻遺跡」鈴鉢川流域総合整備計画（圓場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ 長崎県文化財調査報告書第124集に詳しいので参照されたい。

本書では、平成6年度に本調査を実施した原の辻遺跡（大川地区）、原の辻遺跡（川原畑地区）、原の辻遺跡（芦辺高原地区）、平成7年度に本調査を実施した原の辻遺跡（芦辺高原地区）、安国寺前A遺跡、安国寺前B遺跡について報告を行う。大川地区を除いて、いずれも事前の範囲確認調査において遺構、遺物が検出されていた場所である。大川地区は範囲確認調査の結果、遺構や遺物は検出されていないが、当該地区的農道拡幅工事中に遺物が出土したため、農林部局と協議を行い急遽発掘調査を実施したものである。調査主体は大川地区が県教委・石田町教委、川原畑地区が県教委、平成6年度の芦辺高原地区が芦辺町教委、平成7年度の芦辺高原地区・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡が県教委・芦辺町教委で、それぞれ分担して調査を実施した。

2. 調査の組織と関係者

	平成6年度	平成7年度
長崎県教育庁文化課長	村田 善則	大路 正浩
〃 課長補佐（参考）	田川 環	田川 環
長崎県教育庁壱岐教育事務所長	木村 晃一	満川 純浩
* 〃 総務課長	脇坂 正孝	脇坂 正孝
長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所長	——	満川 純浩（兼務）
課長	——	脇坂 正孝（兼務）
長崎県芦辺町教育委員会教育長	今西 國善	今西 國善（前任）　末永 雅照
〃 教育次長	辻本 正	辻本 正
長崎県石田町教育委員会教育長	後藤 正敏	町田 忠治
〃 教育次長	山口 稔	松本 陽治

*原の辻遺跡調査事務所は長崎県教育庁の地方機関として平成7年4月1日に新設された。



第2図 遺跡全体図及び地区割図 (1/7,000)

III. 調査

1. 原の辻遺跡(平成6年度大川地区)の調査

1. 原の辻遺跡（平成6年度大川地区）の調査

（1）調査概要

① 調査経緯と方法

今回の調査は大川地区で圃場整備に関連した農道拡幅工事が行われた際に、古代を主体とした遺物が採集されたために実施したものである。調査区として工事区域に4.5m×5mを基本とするグリッドを1から30区まで設定し、14区付近の道路を挟んで31区を、また30区から北に約800m離れた場所に32区を設定した。各グリッドは工事予定に従い適時、拡張した。調査はグリッドの1～4区と31区を石田町教育委員会が主体となって行い、グリッド5～30区と32区を長崎県教育委員会が主体となって行った。調査面積は石田町教育委員会が154.3m²で、平成6年7月14日から7月18日にかけて調査を実施した。長崎県教育委員会は838.8m²で平成6年7月19日から8月4日にかけて実施した。

② 上層

調査区域は工事によって遺物が採集された暗茶褐色土層が露出している状況であった。工事の前、付近は水田であったことから水田表土と底土がはぎとられた状態であることがわかった。調査は台地の縁のそって行くことになったが、縁から2～3mは地山が露出しており、遺構や遺物は確認されなかつた。遺物包含層はやや離れて帯状に堆積しており、台地上面の削平あるいは台地の縁を削して後退させた際の流れ込みであることが推測された。台地の縁は段差が約1mで微高地といつてもよいが、縁の外周は道路として利用されている。この道路下の土層を観察すると、第1層から第3層までは客土あるいは擾乱層であることがわかった。第1層は道路面下の埋土、第2層は茶褐色土層で客土である。第3層は暗茶褐色土層で旧耕作土ではないかと考えられる。帯状に堆積した第4層の遺物包含層は暗茶褐色土でやや粘質である。この層は15～30区において確認された。第5層は青灰色の粘質土層、第6層は黄褐色の地山である。

台地上の31区は耕作土である第1層の下が岩盤であり、遺物包含層は確認されなかつた。32区では第1層の客土である茶褐色土の下に、15～30区までの第4層に対応すると思われる黒褐色粘質土層が確認された。同時代の遺物包含層である。第5層は谷状の地形を埋めた灰色の粘質土層、第6層は暗緑色の砂質層である。第7層の黄褐色地山は谷の縁で確認された。

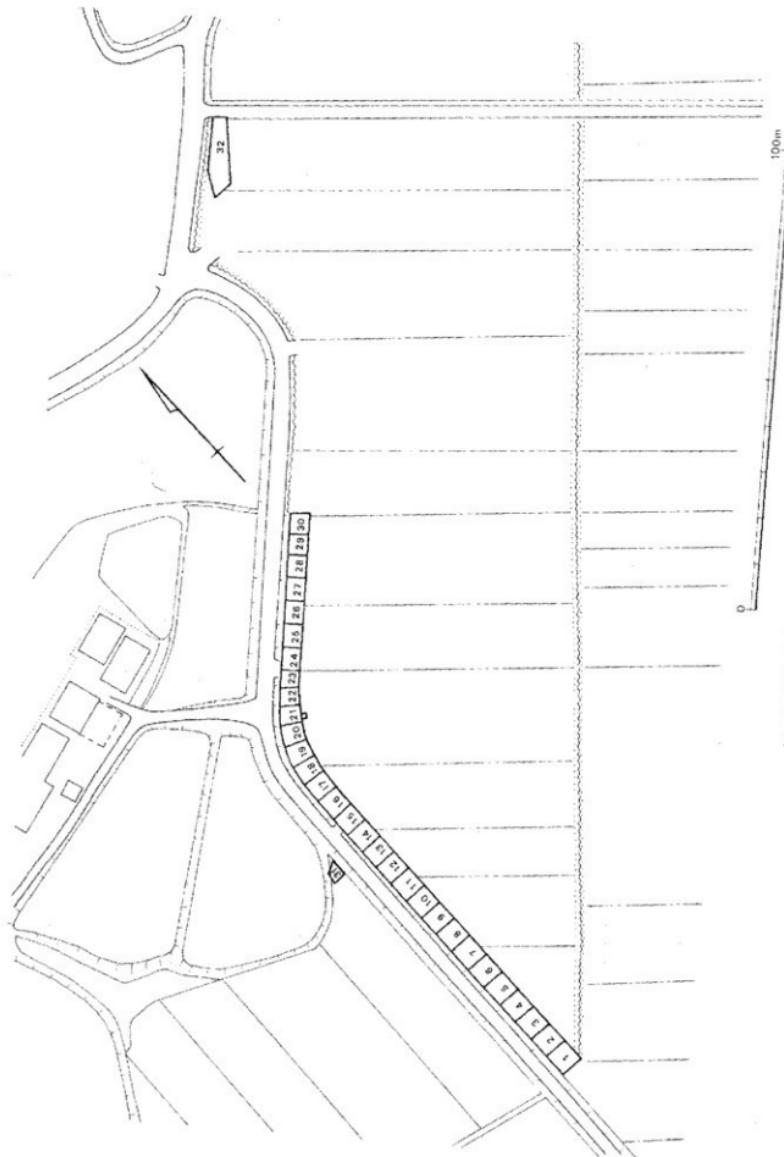
（2）遺構

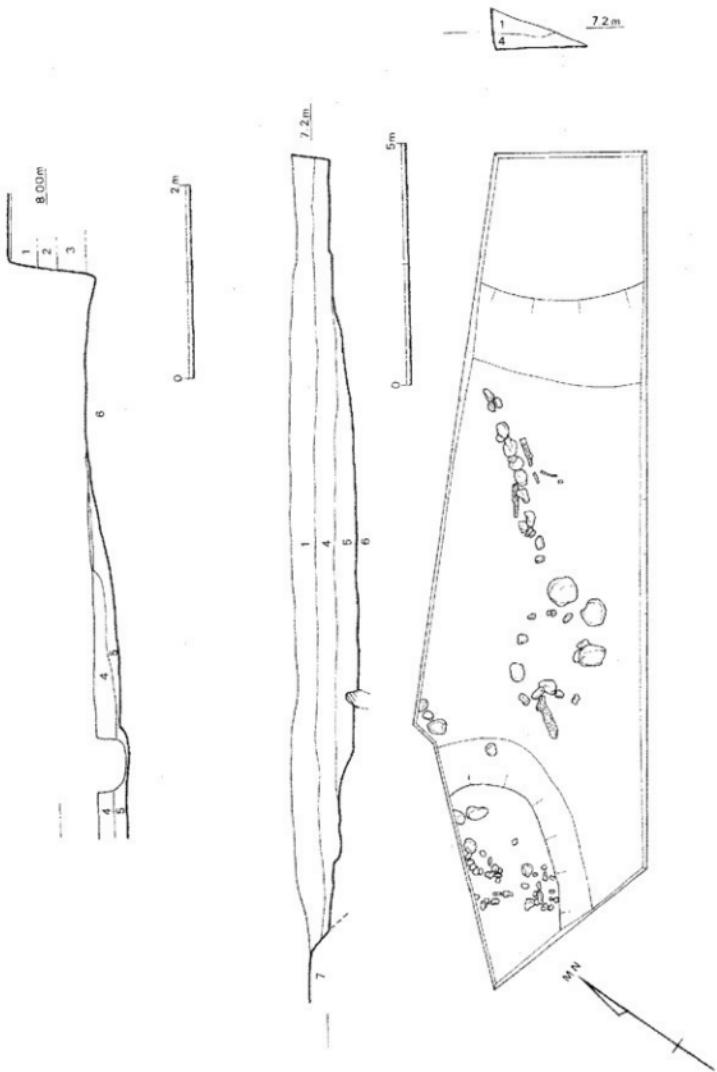
32区で人頭人の石を一列に並べた亂石状の遺構が確認された。付近は谷状の地形になっており、底付近では湧水が認められる。このことから水に関連した遺構であると考えられるが、その目的や用途は不明である。遺構の時期は遺物包含層と同じ古代とするのが妥当であろう。また、周囲には木片が散乱しており、一部に加工痕のあるものも認められたが遺構との関係は明らかでない。

なお、調査区の北側約15mの地点で石田町教育委員会が発掘調査を実施しており、やはり古代の遺物が出土している。これらの遺物もさらに北側の台地から流れ込んだものと報告されている⁽¹⁾。

註(1) 川口洋平『原の辻遺跡II』石田町文化財保護協会 1995

(大川第1区) 调查区域图 (S = 1 / 1,000)





(大川第2図) 23区の土層図・32区の平面および土層図 ($S = 1/50 \cdot 1/100$)

(3) 遺 物

① 遺物の出土状況

今回の調査で出土した遺物はコンテナにして8箱分の量であった。それらを大別すると陶磁器、須恵器、土師器、滑石製品となり時期的には8世紀末から10世紀中頃を主体とするものと考えられる。古墳時代や中世の遺物も若干含まれるが、これは遺物包含層である第4層が流れ込みによる擾乱を受けて堆積したためであろう。第4層は台地の縁にそって分布しており遺物は礫と共に包含されていた。

遺物は主体となる時期のものを中心に説明を加えるが、希少なものに関しては細片についても図化を試みた。

② 初期貿易陶磁器

初期貿易陶磁器は総計54点が出土した。その内訳は越州窯系青磁34点、白磁16点、長沙窯系水注4点である。これを割合でみると越州窯系青磁63%、白磁29.6%、長沙窯系水注7.4%になり越州窯系青磁の優位が際立っている。

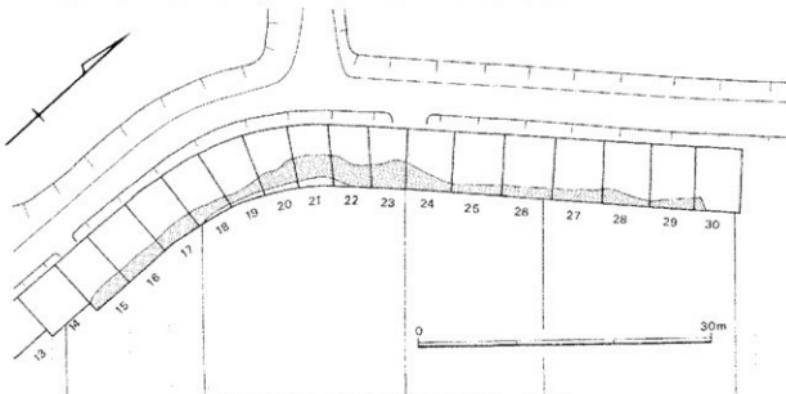
越州窯系青磁

出土した34点は精製品のI類33点と、粗製品のII類1点に大別される。これを器種別にみるとII類は碗のみであるのに対し、I類は碗30点、杯1点、合子2点となる。点数、器種ともにI類の優位が際立っていることがわかる。13点を図化し、土橋理子氏の分類にしたがう。

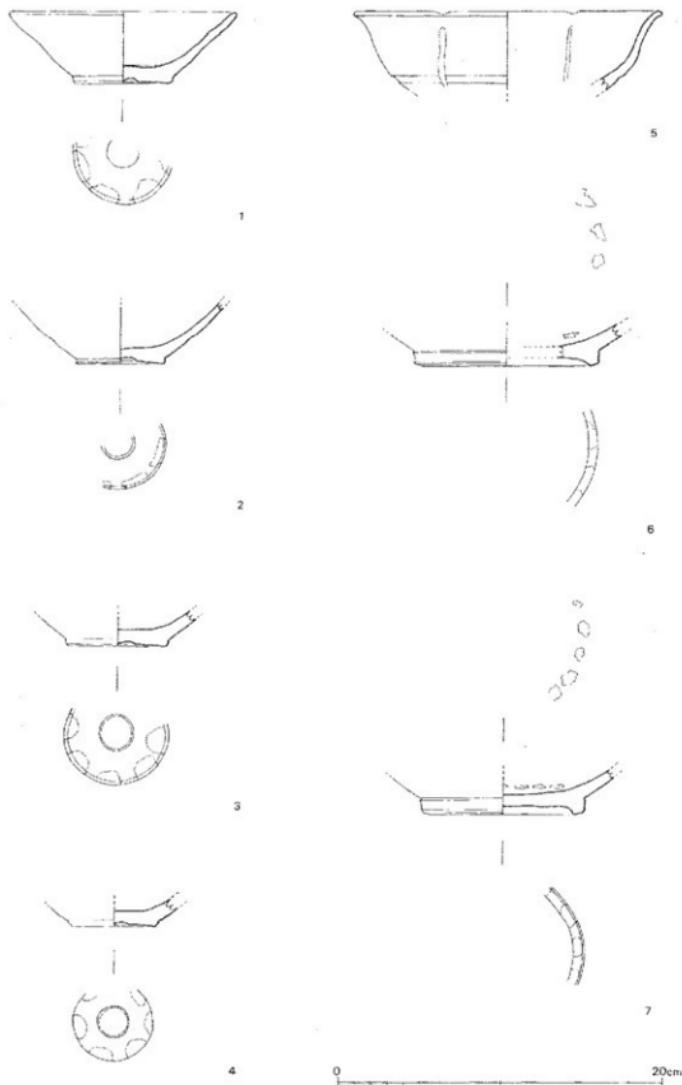
1～4は蛇の目高台を有する典型的な越州窯系青磁碗で、土橋氏のIA1類である。見込みに目跡ではなく、高台疊付けに目跡がある。2は21区、3は16区から出土した。1、4は地区不明である。

5～9は輪状高台を有する土橋氏のIB類である。5は口縁が輪花になっており、やや黄色がかって発色している。22区より出土した。6～8は見込みの目跡が不定形なIB3に、9は目跡が細く長いIB2に分類されよう。6は14区、7は15区、8は21区から出土した。9は地区不明である。

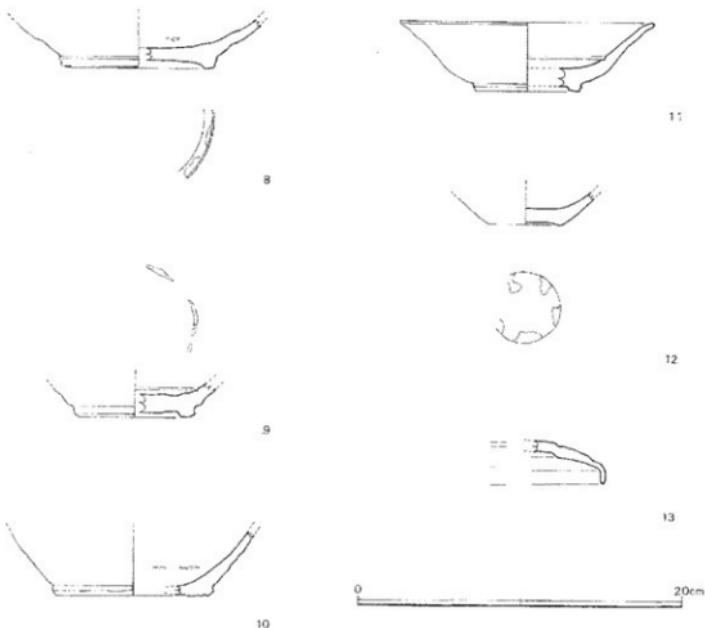
10は外面下半が露胎のII類の碗であるが、ヘラ削りした円盤状の高台であることからさらにIID1



(大川第3図) 遺物包含層分布状況 ($S = 1/500$)



(大川第4図) 遺物実測図 (1) ($S = 1/3$)



(大川第5図) 遺物実測図(2) (S=1/3)

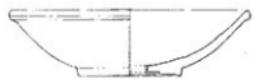
に分類される。胎土は粗く、黒色粒を含んでおり化粧掛けを施している。21区から出土した。

11は皿で体部はやや外反しながら立ち上がる。土橋氏のI-1に分類される。32区より出土した。12は杯で、出土した越州窯系青磁の中ではもっとも焼成が良くガラス質の釉がかかる。森田分類を援用した土橋分類ではI-1に相当するだろう。22区出土。13は合子の蓋と考えられる。天井部に段を有する。23区より出土した。

白磁

初期貿易陶磁に包括される白磁は16点が出土した。その中の8点は邢州、定窯系とされるI類に分類されるが、残りの8点はそれとは別系統の白磁であり、現時点では产地が特定されない。山本信夫氏によれば中国南部やその周辺地域の可能性もあるという。いずれにせよ国内では極めて稀な出土例と指摘される。ここでは山本氏が臨時に使用した白磁B類として紹介しておく。

14~18は白磁I類である。14はやや青味をおびたガラス質の釉がかかり、高台型付けは露胎である。23区から出土した。15は光沢のない乳白色がかかり、口縁部はやや内湾ぎみである。21~22区にかけて出土した。16は碗の口縁部で黄味をおびた乳白色釉がかかる。下縁はやや細長で、22区より出土。



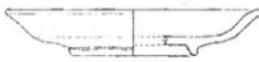
14



19



16



20



16



21



22



17



18



23



(大川第6図) 遺物実測図(3)



24



25



26



(大川第7図) 遺物実測図(4) (S = 1/3)

17は青味をおびた乳白色釉がかかり、玉縁は折り曲げで小さな孔が認められる。16区から出土した。18は壺ないし水注の副部で内外面に乳白色釉がかかる。1類の壺類の出土は珍しい。16区から出土。

19~23は白磁のB類である。19は碗で乳白色の釉が全面にかかるが高台盤付けは露胎である。器表には貫入が多く認められ、風化のためか汚れたような印象を受ける。胎土は白灰色でやや粗くザクザクとしており、釉との間に化粧掛けを施す。底部から体部の境には屈曲があるが、この部位はやや薄いつくりである。体部から口縁部にかけてはやや厚く、口縁端部はやや外反する。18区から出土した。

20は皿でやはり乳白色の釉がかかるが、貫入が多く汚れた感じである。高台盤付けから内側にかけては露胎である。胎土は黄白色でザクザクとしており化粧掛けを施す。底部と体部の境には屈曲があり、口縁部は外反ぎみに開く。22区から出土した。

21は皿の底部と考えられ17区から出土した。高台盤付けから内側が露胎であるなど特徴は22に似ている。22は皿の体部から口縁部で出土区は不明である。やはり外反ぎみに開く。23は碗の体部から口縁部で焼成が良好なためか、やや緑がかった乳白色のガラス質の釉がかかる。特徴は19に似るが、こちらは輪花になっている。あるいは19も輪花であった可能性も指摘されよう。

長沙窯系黄釉褐彩水注

長沙窯系の水注片は4点が出土したが、3点は同一個体である可能性がある。23は水注の肩付近と考えられ暗灰色の素地に褐釉がかかる。21区から出土した。24は副部で貫入の多い汚れた黄白色の素地に褐釉がかかる。16区から出土した。25は胴部であるが上半であろう。貼付けの葡萄文の一部が認められる。16区から出土したが胎土の特徴などから26と同一個体である可能性が高い。

③国産施釉陶器

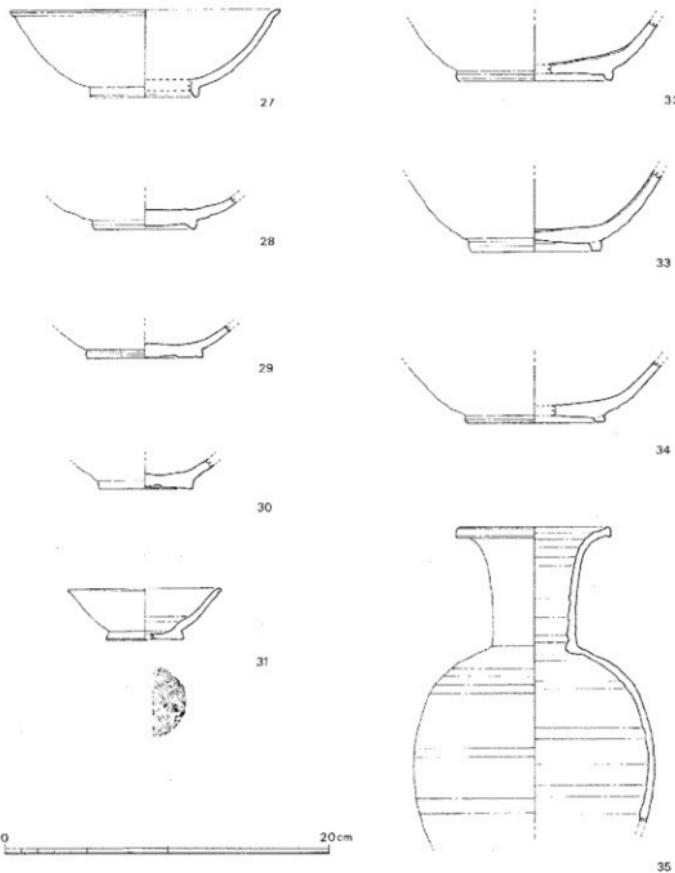
緑釉陶器19点、灰釉陶器27点の計46点が出土した。両者の比率はほぼ4:6の割合である。この比率は筆者には大変興味深いものであるが、それについて後項で述べたい。

綠釉陶器

19点の中で胎土が硬質のものは11点、軟質のものは8点である。5点を國化した。27は碗で釉は暗灰色に変色している。器内は瓦質に近い須恵質である。高台は風化が進んでいるが、削り高台と考えられる。高橋照彦氏より洛西系ではとの指摘を受けた。出土区は不明である。28は施釉されていない皿の底部である。胎土は硬質で精良、高台は削り出されている。やはり洛西系か。見込みに墨書きの痕跡があるが判読はできなかった。出土区は不明である。29は施釉されない碗の底部で、胎土は25に似る。高台は蛇の目状に削り出されている。洛西系であろう。20区から出土した。30は淡黄緑色の釉がかかる碗の底部で、胎土は硬質、精良である。高台は蛇の目状に削り出される。洛西系か。20区から出土した。31は淡緑色の釉がかかるが黄色の斑が認められる。胎土は軟質で黄褐色を呈し、底部は糸切の円盤状高台である。防長系の可能性もある。16区から出土した。

灰釉陶器

27点が出土した。いずれも東海・猿投窯系のものと考えられ、器種には碗、皿、壺がある。4点を國化した。32は碗でガラス質の緑灰色釉が内面にやや厚くかかる。体外面下半から底部にかけては露



(大川第8図) 遺物実測図 (5) ($S = 1/3$)

体である。胎土は白灰色でザクザクとした感じである。高台は丸みを帯び、貼り付けである。19区から出土した。33は楕で内面に緑灰色釉がかかり、体外面下半から底部は露胎である。胎土は29に似る。底部は余切り痕をヘラで消すが一部にのこる。高台は貼り付けで疊付けに板状圧痕がある。底部には墨書きが認められるが、判読はできなかった。出土区は不明である。34は楕で内面に緑灰色釉がかかり、体外面下半から底部にかけては露胎である。胎土は29・30に似る。高台は貼り付けで低い。30区から出土した。35は長頸壺で緑灰色釉が胴部から口縁部にかけてかかる。胎土は29~31に似る。全体的に



36



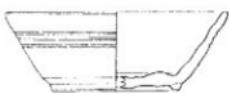
41



37



42



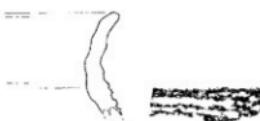
38



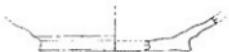
43



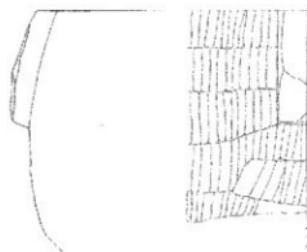
39



44



40



45

0

40cm

(大川第9図) 遺物実測図(6)(S=1/1)

薄いつくりで、平滑な仕上げである。29区から出土した。

④須恵器

須恵器は527点が出土したが、概観すると古墳時代後半のものと8世紀末から9世紀にかけてのものに分かれる。36は古墳時代の杯蓋で24区から出土した。小田富士雄氏のⅢA期か。37は杯身であるが高杯の可能性もある。23区から出土した。同氏のⅢB期に位置づけられよう。38は古代の杯身で体部に3条の沈線が施される。23区から出土した。39は体部に漆と思われる物質が付着していた。出土区は不明である。40は山本信夫・中島恒次郎氏より篠塙系の鉢であるとの教示を受けた。胎土は白灰色で硬質である。底部には糸切痕が認められる。41は横出賢次郎氏より円面研の脚部であるとの教示を受けた。外面には線刻が施され、側面には透し窓の一部が認められる。

⑤土師器

1645点が出土した。細片が多く復原が困難なものが多いが、山本信夫氏より8世紀末から12世紀前半に包括されるとの指摘を受けている。42は黒色土器B類で山本氏のX-XI期頃、43はVI期頃に相当するものであろう。

⑥製塩土器

点数的には土師器に包括したが、タタキを有するいわゆる玄海灘式製塩土器が若干出土している。細片が多く、44は同化できた数少ない資料である。29区から出土した。

⑦滑石製品

滑石片は6点が出土したが、容器と判別できたのは1点である。45は鍋で口縁部の内径は35.6cmである。口縁部には縱長の把手がつき、体部外面下半には煤の付着が認められる。23区から出土した。

(4) 小 結

①遺物の組成と考察

今回出土した遺物から中世以降のものを除いた数は2278点である。これには若干の古墳時代の須恵器が含まれるが、一応の基礎数とする。初期貿易陶磁54点は約2.4%、国産施釉陶器46点は約2.0%にあたり、両者を合計した数100点は基礎数の約4.4%にあたることになる。この割合は鴻臚館などの特殊な例を除くと北部九州の古代の遺跡としては比較的高いものではないかと考えられる。

次に初期貿易陶磁器と国産施釉陶器の比率をみると前者が54%、後者が46%でほぼ半々の比率である。これは輸入品としての問題を考える上で、様々な問題を提起しているように思われる。第一に国産施釉陶器の主体は洛西系の綠釉陶器と東海系の灰釉陶器であるが、これらがどうのような経路でもたらされたのであるかという問題がある。とくに東海地方は壱岐島にとって越州窯とほぼ同距離の遼隔地であり、入手はむしろ困難であったことが推測される。高橋照彦氏は全国的な施釉陶器のありかたを「灰釉陶器の圧倒する東国型、両者の均衡する畿内型、綠釉陶器の圧倒する西国型」と位置づけておられるが³⁰⁾、本遺跡の出土状況はむしろ東国型に近い。この事は遺跡の特殊な性格をある程度反映しているものと考えられる。

初期貿易陶磁器についても山本氏の指摘のとおり、やや特殊な性格がうかがえる。すなわち通常、

初期貿易陶磁の3点セットとよばれる越州窯系青磁、白磁I類、長沙窯系水注などに加えて、产地不明の白磁がI類と同じ割合で含まれていた。このことは当時の貿易形態の問題とも関連してくることがあり、その分布範囲の把握が期待される。現時点では海上拠点のひとつであった壱岐島が貿易陶磁の入手に関して有利な状況にあり、特殊な粗製品が確保できたのではないかという推測にとどめておきたい。

②遺跡の性格

このような状況からどの程度、遺跡の性格を推定することが可能であろうか。まず、初期貿易陶磁と因産施釉陶器のまとまった出土は、所持者の富裕さとある程度の権力を示しているといえるだろう。8世紀期末から10世紀中頃の壱岐島において、これらを所持した人物としてはやはり国司や都司といった島内における支配階級を考えるのが妥当であると考えられる。筆者はさらに施釉陶器における綠釉陶器と灰釉陶器の比率などから、より広範な人との交流を考えるために国司クラスの存在を予察しておきたい。しかし、かといって付近が国府ないし国司館であったとするのは早計であろう。明確な遺構が検出されなかった現時点では可能性を示唆しつつも今後の調査による成果を期待したい。

③石田郡をめぐる考察

視点をやや変えて文献を含めた歴史的な考察を加えてみることも必要であろう。『延喜式』によれば壱岐島は下国で壱岐郡と石田郡の二郡に分かれるとする。『和名抄』ではさらに壱岐郡七郷、石田郡四郷から成り、国府は石田郡にあるとする。石田郡には『延喜式』記載の優遇駅家と推定される小字「勇頭」があり、付近は本遺跡と隣接していることを指摘しておきたい。

9世紀代にはこの石田郡出身の人物が文献上にみえる。貞觀5年(863)『日本三代実録』卷7に「壱岐島石田郡の人、宮主外從五位下ト部是雄、神祇權少史正七位ト部業孝等、伊伎宿祢の姓を賜う」とある。また、貞觀14年(872)同卷19には「宮主外從五位下兼丹波權伊伎宿祢是雄卒。是雄はト数の道に尤もその要を究めたり」とある。すなわちこの石田郡の一族はト占をもって中央と結びついていたことがわかるのである。当然、当時の石田郡のいざれかにその本流があったはずであるが、資料では郡司層以下不明で把握することは難しい。しかし、石田郡に国司に匹敵する勢力があった可能性を示唆するものであるとはいえるであろう。このト部氏は山城松尾社の社家として大きな勢力をもっていたが、この洛西と壱岐との関わりも出土遺物からみる限り否定はできず興味深い。

④周辺の意義と課題

今回の調査は、弥生時代の「一支国」の中心集落として評価されている原の辻遺跡が古代においても有力層が活動した地域であることが濃厚になった点で注目される。原の辻遺跡とその周辺では散発的ではあるが古代の遺構や遺物が発見されており、いずれその性格が特定されることもあると思われる。今後の調査の課題としてはそれらの点と点がどのように関わるのかを考えつつ、島外の調査例と比較検討していくことが必要であろう。中でも遺物の「搬入」という問題は弥生時代以来の大きな問題であり、島外との比較なしには解明の方法がないといつてよい。これらを明らかにすることこそ当時の社会の一端を読むことに通じるものであるといえるだろう。

註(1) 高橋照彦「東国の施釉陶器」『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東3』古代の土器研究会1994

図 版



遺跡遠景



調査風景



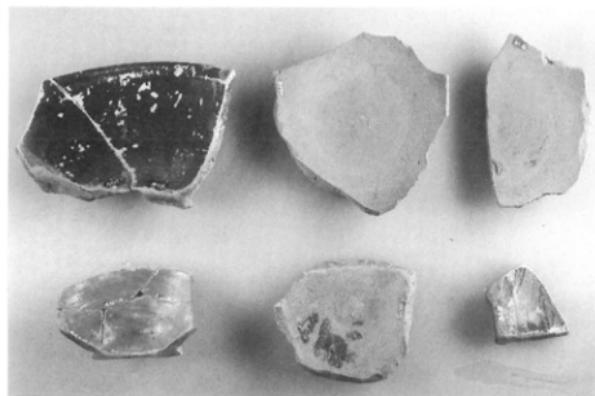
包含層の状況

図版 2





縁釉陶器（外）



同 (内)



灰釉陶器（表）



同 (裏)

2. 原の辻遺跡(平成6年度川原畠地区)の調査

2. 原の辻遺跡（平成6年度川原畠地区）の調査

（1） 調査概要

川原畠地区は平成4年度に範囲確認調査が実施され、弥生時代の土壙群・柱穴群・溝状遺構などが検出された。これに基づき平成6年12月24日から平成7年3月31日にかけて、農道建設予定地と排水路敷設予定地の1,810m²について県教育委員会が主体となり本調査を実施した。

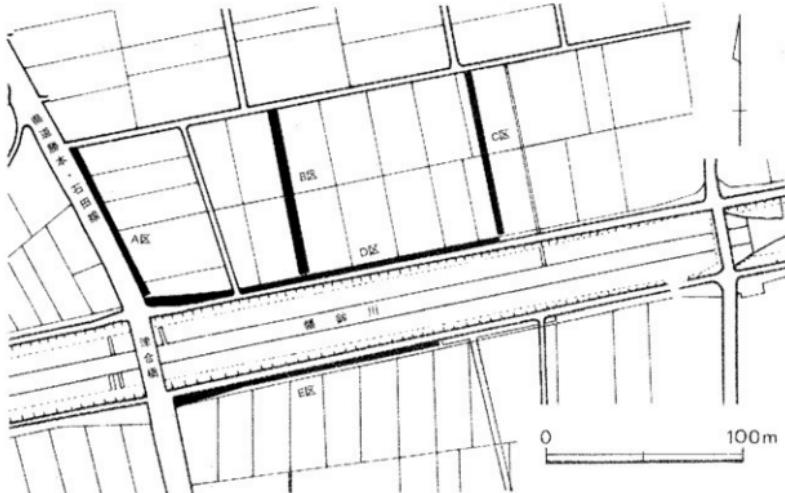
調査地区は原の辻遺跡の北端で、幡ヶ谷川の北側及び南側の標高5～6mほどの水田部に位置する。調査区は便宜上A～E区に大別している（川畠第1図）。それぞれの区は土壙確認のベルトを境に、更に区分けして調査を実施した（川畠第2図）。以下区ごとに概要を述べる。

① A区（1～8区）

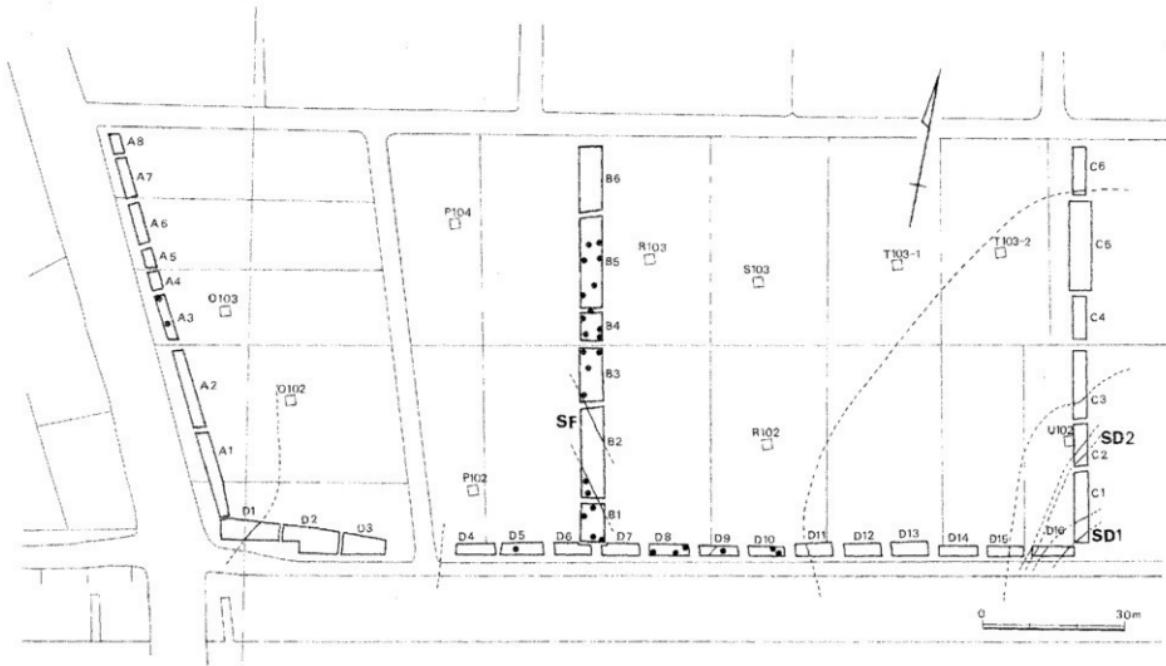
A区は県道東側の南北に長い調査区で、排水路敷設予定地である。ここではA 3～5区にかけて土壙2基、ピット11個を検出した。この付近は、県道の西側でも弥生時代のピット群が圃場整備の工事中に発見されており、A区の遺構もこれらと関連のあるものだと思われる。他の区は後世に削平を受けており遺構は確認されなかった。

② B区（1～6区）

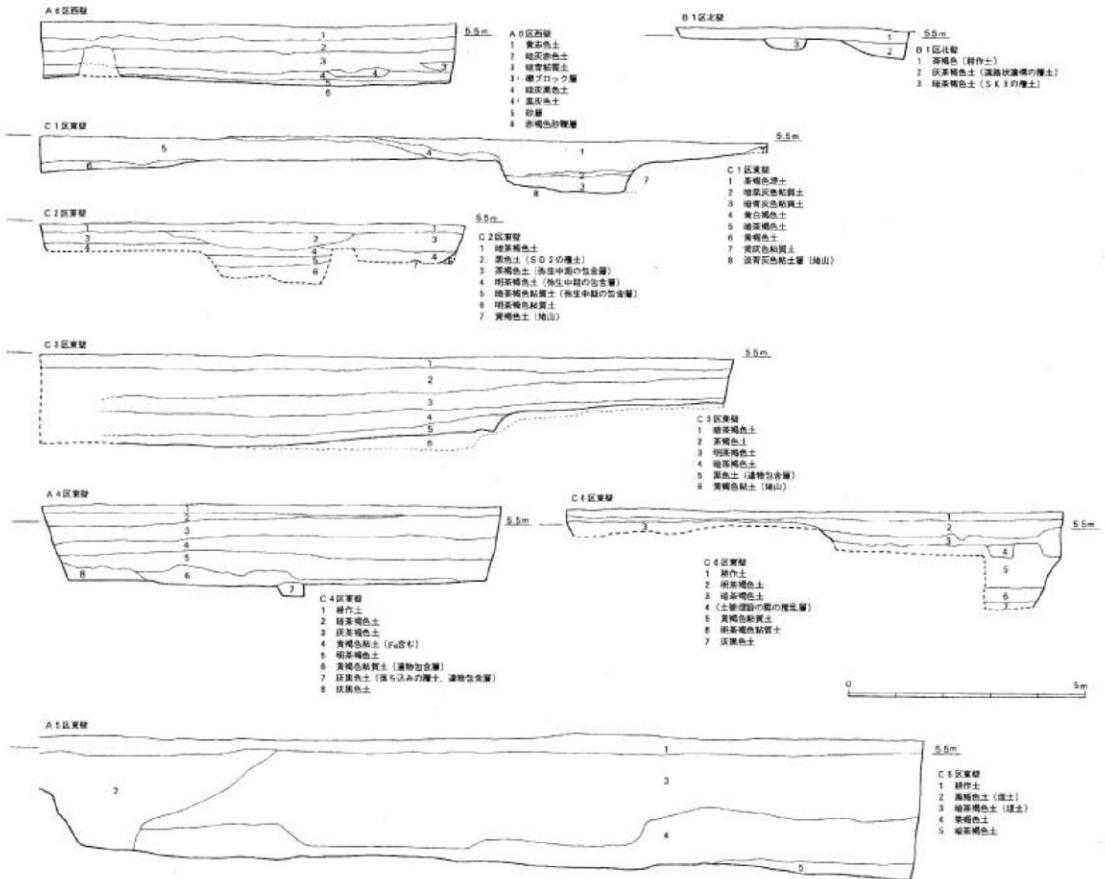
B区は川原畠地区中央の南北に長い調査区で、農道建設予定地である。ここではB 1～5区にかけて弥生時代の土壙21基、ピット197個、B 1～3区にかけて古代の道路状遺構1箇所を検出した。B 5区の北端及びB 6区は後世の削平を受けており遺構は確認されなかった。



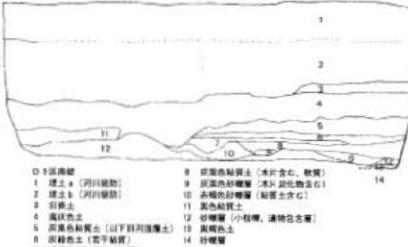
（川畠第1図）川原畠地区調査区配置図（1/2,500）



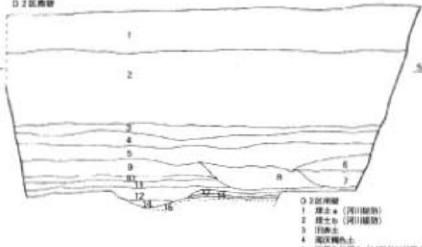
(川畠第2図) 調査区配置図 (1/1,000) (●は土壌)



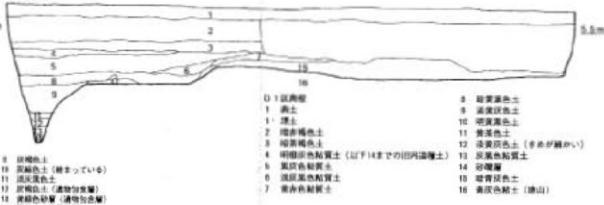
D 3 区画層



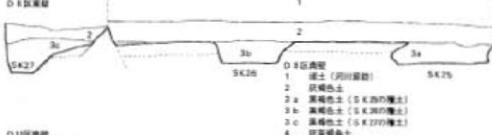
D 2 区画層



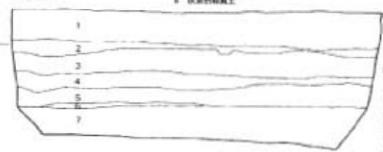
D 1 区画層



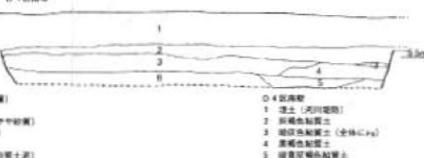
D 8 区画層



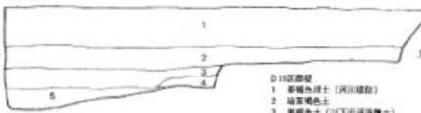
D 6 区画層



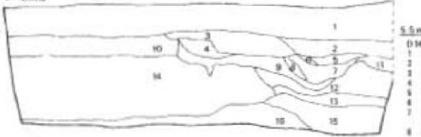
D 4 区画層



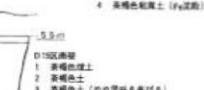
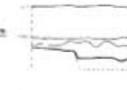
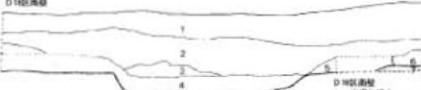
D 11 区画層



D 14 区画層



D 10 区画層



0 5 m

(川畠第4図) 土層実測図② (1/100)

③C区（1～6区）

C区は川原畠地区東寄りの南北に長い調査区で、排水路敷設予定地である。ここではC1区で溝状遺構1条、C2区で溝状遺構1条、C3～6区にかけて旧河道と思われる落ち込みを検出した。

④D区（1～16区）

D区は幡鉾川北側の東西に長い調査区で、農道兼用堤防の拡幅予定地である。ここではD1～3区にかけて旧河道と思われる落ち込み、D5区で土壌1基、不整形の落ち込み3箇所、ピット8個、D8～10区にかけて土壌6基、D9区で落ち込み1箇所、ピット5個、D11～15区にかけて旧河道と思われる落ち込み、D16区で溝状遺構2条を検出した。D5～10区で検出された遺構は、いずれも弥生時代のもので、B区の土壌群と併に一つの縦まりとして捉えることができる。D16区で検出された溝状遺構は、それぞれC1区及びC2区の溝状遺構と一連のものと考えられる。

⑤E区

E区は幡鉾川南側の東西に長い調査区で、農道兼用堤防の拡幅予定地である。この区は全体的に地盤が緩く、掘り下げ直後から激しく崩壊し堤防決壊の恐れがあった。そのためやむなく簡略な調査に切り替え、早急に埋め戻したという経緯がある。土層の状況は、中央付近に横灰色の地山層が見られるが、調査区の西半及び東半は軟弱土質で、ここを旧河道が流れていたことが想される。

（2）遺構

①溝状遺構

・SD1

C1区及びD16区東側で検出した。C1区の溝は、幅約3m、深さ約70cmを測る。復土は2・3層に分かれるが1層によって最終的に埋没している。遺物はほとんど出土しなかった。D16区の溝は、南壁で幅約4m、深さ約40cmを測る。復土は黄茶灰色粘質土である。遺物はほとんど出土しなかった。両溝の位置関係、断面形、規模などから同一の溝であると判断したが、遺物が出土しておらず時期は不明である。C1区の溝の埋没状況から新しい時期の溝であることが推測される。

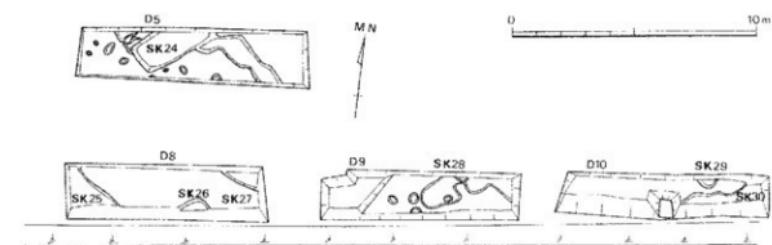
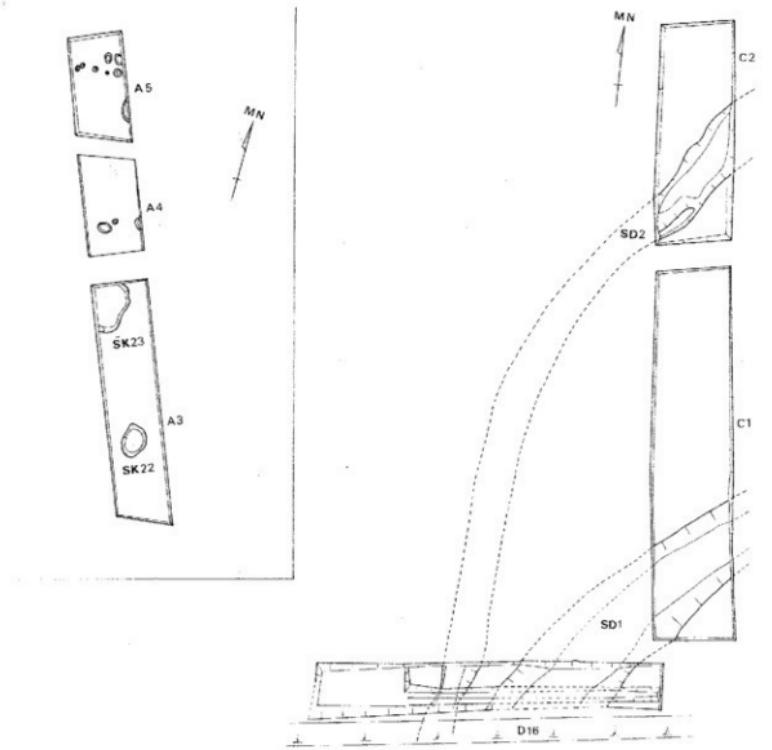
・SD2

C2区及びD16区西側で検出した。C2区の溝は、幅1.5m、深さ約35cmを測る。復土は2層黒色土で、この中から弥生後期後葉の上器が出土している。D16区の溝は、幅約1.3m、深さ約20cmである。復土は黒褐色土で土器片が僅かに出土しているが、時期を特定できるものはなかった。両溝の位置関係、復土の状況、溝の規模などから同一の溝であると判断した。

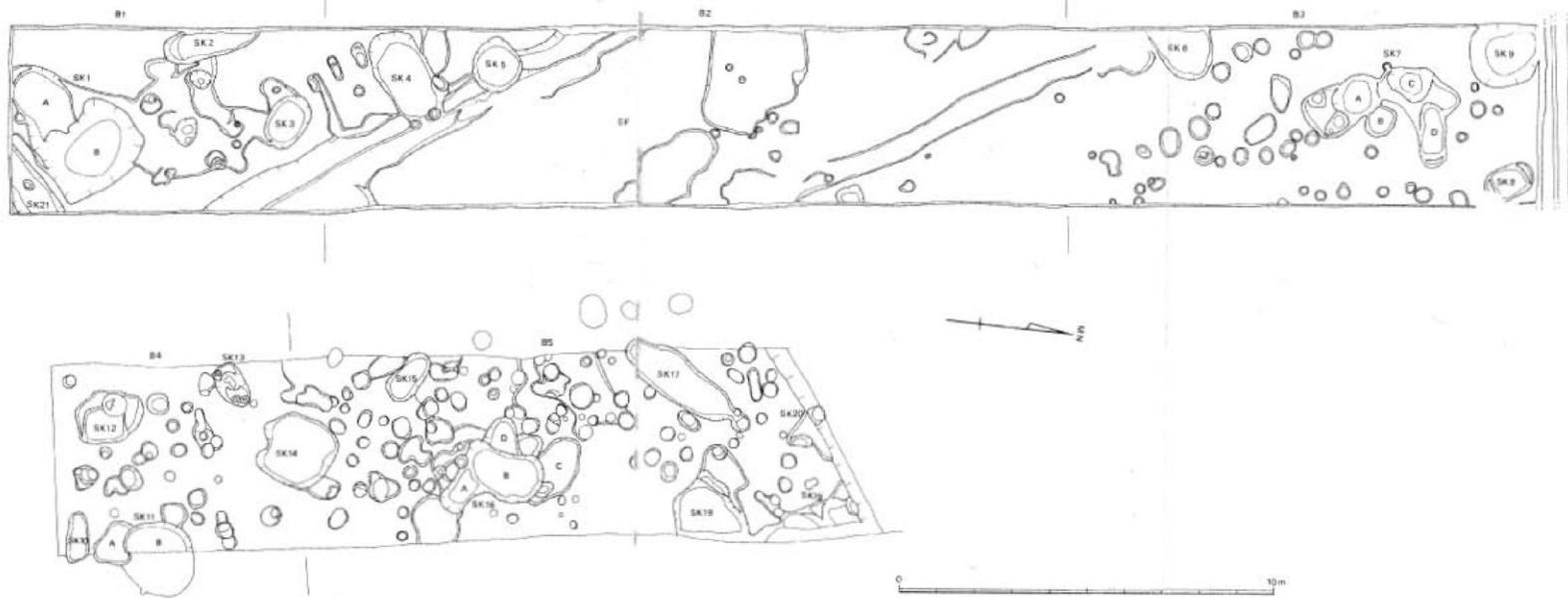
②旧河道

・C3～6区

C3区に南側の立ち上がり、C6区に北側の立ち上がりが認められ、この間に大きな落ち込みを検出した。落ち込みの幅は約45mである。C3区の5層黒色土及びC4区の6層黄褐色粘質土に弥生時代の遺物が集中する。C5～6区からは弥生の遺物はほとんど出土していない。したがってC3～4区付近には弥生時代の河川が残存しており、C5～6区は後世の河川によって削られた可能性が高い。



(川畠第5図) A・C・D区造構配置図 (1/20)



(川幅第B図) 日区油井配置図 (1/100)

そのため弥生時代の河川の最深部の標高は不明である。ちなみにC 6 区の遺物が出土した地点の標高は1.2mほどである。

・ D 1～3 区

D 3 区に西側の立ち上がりが認められ、これより東側は大きく落ち込む。D 4 区には落ち込みが認められないもので、D 3 区とD 4 区の間に東側立ち上がりがあるものと思われる。落ち込みの深さは、約2.2mである。範囲確認調査の際、O102区の試掘廻において旧河道が確認されており、D 1～3 区の造構は南北方向に伸びるものと考えられる。遺物は弥生時代の土器が多く、D 2 区からは勾玉、古墳時代の土師器、D 3 区からは鉄斧、奈良時代の土師器なども出土している。

・ D 11～15[×]

D 11 区に西側の立ち上がり、D 15 区に東側の立ち上がりが認められ、その間に大きな落ち込みを検出した。落ち込みの幅は約43mである。D 11 区の3層（黒褐色土）・4層（暗黒茶褐色土）・5層（黄褐色粘質度）に弥生時代の遺物が集中する。他区は遺物がほとんど出土していないが、埋没状況から後世の河道であると考えられる。弥生時代の遺物が出土した最深部の標高は4.4mほどである。

③ 土壙 (川畠第7～12図)

・ S K 1 A

B 1 区の南端で検出。東端はS K 1 B に切られるが、平面は長楕円形を呈していたものと思われる。残存長1.9m、幅1.1m、深さ36cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器が166点が出土した。

・ S K 1 B

B 1 区の南端で検出。西側はS K 1 A と交錯しているが、炭化物の堆積状況からS K 1 B が後出したものと考えられる。平面は不整楕円形を呈す。長さ2.78m、幅2.0m、深さ41cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器が861点、磨石・敲石・凹石などが4点、石斧1点が出土した。

・ S K 2

B 1 区西側で検出。平面は西側が調査区外に抜がり不明だが、本来隅丸長方形を呈していたものと思われる。残存長2.6m、幅85cm、深さ35cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器が322点出土した。覆土に炭化物を多く含む。

・ S K 3

B 1 区北側で検出。平面は楕円形を呈し、長さ1.44m、幅1.03m、深さ35cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器が475点、砥石2点、土製投弾1点が出土した。覆土に炭化物を多く含む。

・ S K 4

B 2 区の南西で検出。東側を古代の道路状造構により削平されている。平面は隅丸長方形を呈し、長さ2.63m、幅1.3m、深さ38cmを測る。土壤内外に5個のビットが見られ、造構はこのビットを切って造られている。遺物は弥生中期後半の土器256点、磨石2点が出土した。覆土に炭化物を含む。

・ S K 5

B 2 区の南西で検出。東側大半を古代の道路状造構により削平されている。平面は不整円形を呈し、

最大径1.47m、深さ54cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器354点が出土した。

・SK 6

B 3 区の南西で検出。西側は調査区外となるが、本来平面橢円形を呈するものと思われる。残存長1.7m、幅1.5m、深さ30cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器315点、磨石3点が出土した。

・SK 7 A

B 3 区の中央北寄りで検出。平面は不整橢円形を呈す。長さ1.2m、幅1.1m、深さ35cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器70点、砥石1点が出土した。

・SK 7 B

B 3 区の中央北寄りで検出。平面は不整橢円形を呈す。最大径90cm、深さ10cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器38点、砥石1点が出土した。

・SK 7 C

B 3 区の中央北寄りで検出。平面は不整橢円形を呈す。長さ1.21m、幅72cm、深さ38cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器168点、砥石1点が出土した。

・SK 7 D

B 3 区の中央北寄りで検出。平面は圓丸長方形を呈す。長さ1.75m、幅73cm、深さ31cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器101点、磨石1点、支脚形石製品1点が出土した。

・SK 8

B 3 区の北東隅で検出。平面は橢円形を呈す。長さ1.34m、幅88cm、深さ28cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器5点が出土した。

・SK 9

B 3 区の北西隅で検出。北側及び南側は調査区外に抜がるが、平面は円形を呈するものと思われる。最大径1.8m、深さ70cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器431点、石鏸1点、磨石・敲石など2点、砥石1点が出土した。

・SK 10

B 4 区の南東隅で検出。平面は長橢円形を呈し、長さ1.3m、幅62cm、深さ11cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器40点が出土した。

・SK 11A

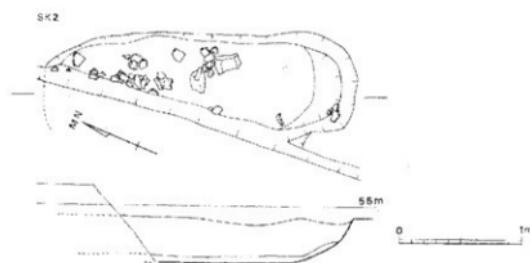
B 4 区の東側で検出。北側をSK 11Bに切られ、平面は不整橢円形を呈す。長さ1.23m、残存幅1.0m深さ11cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器7点が出土した。

・SK 11B

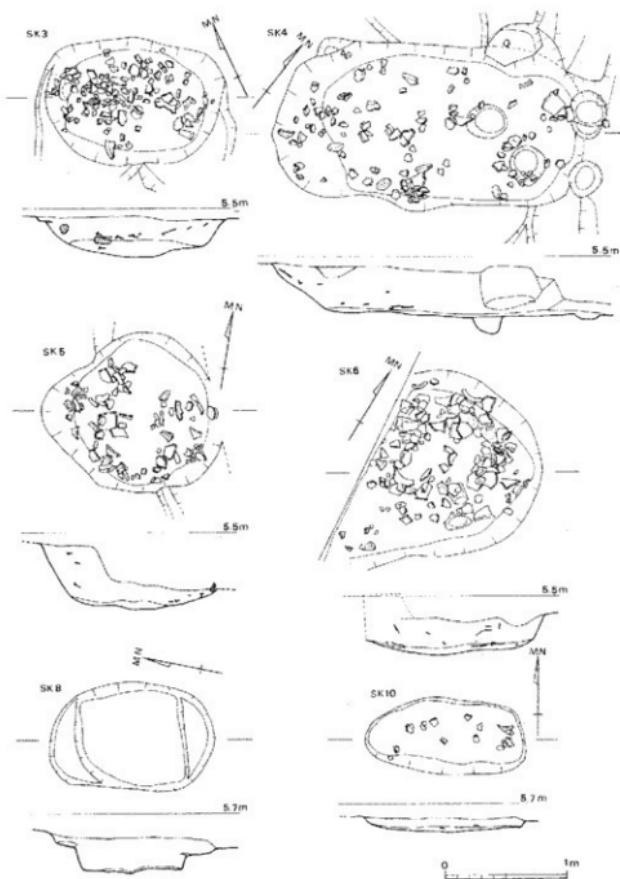
B 4 区の東側で検出。東半は調査区外に抜がり、平面は円形を呈す。最大径2.0m、深さ45cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器12点、大型磨石1点が出土した。

・SK 12

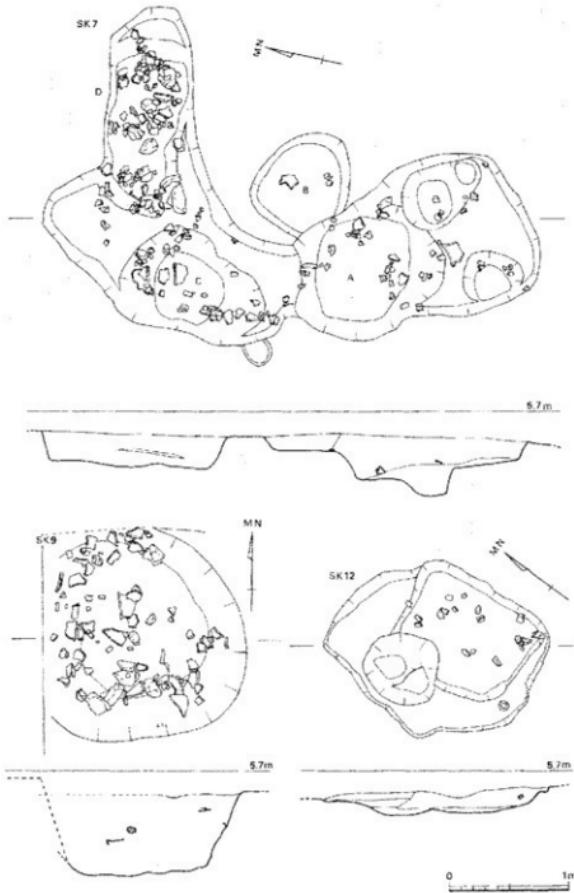
B 4 区の南西で検出。平面は不整橢円形を呈す。土壙内に方形の落ち込み及びピット2箇所を検出



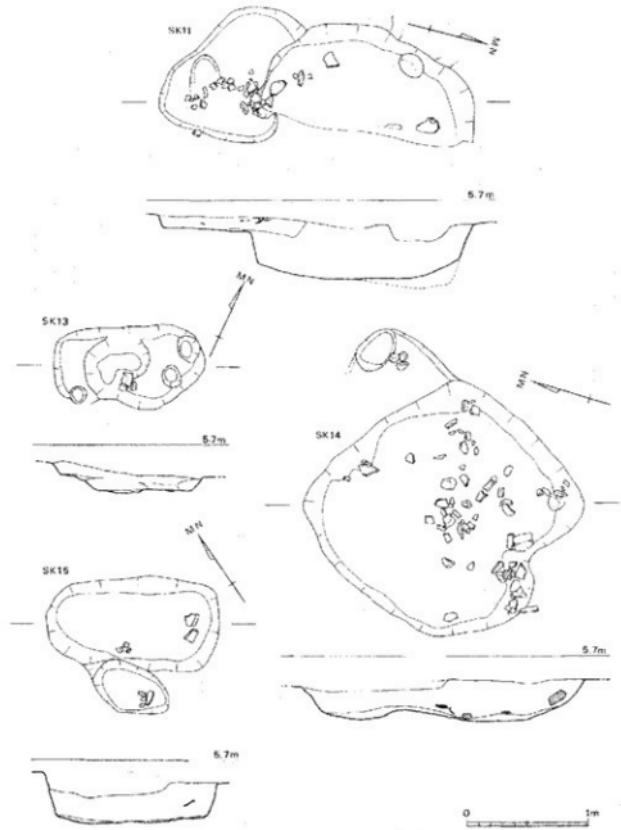
(川畠第7図) B区土壤実測図① (1/30)



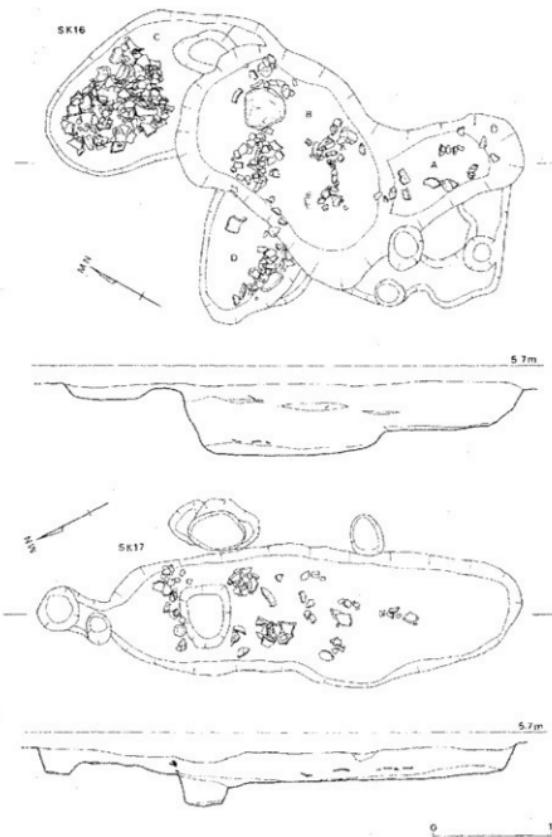
(川畠第8図) B区土壤実測図② (1/30)



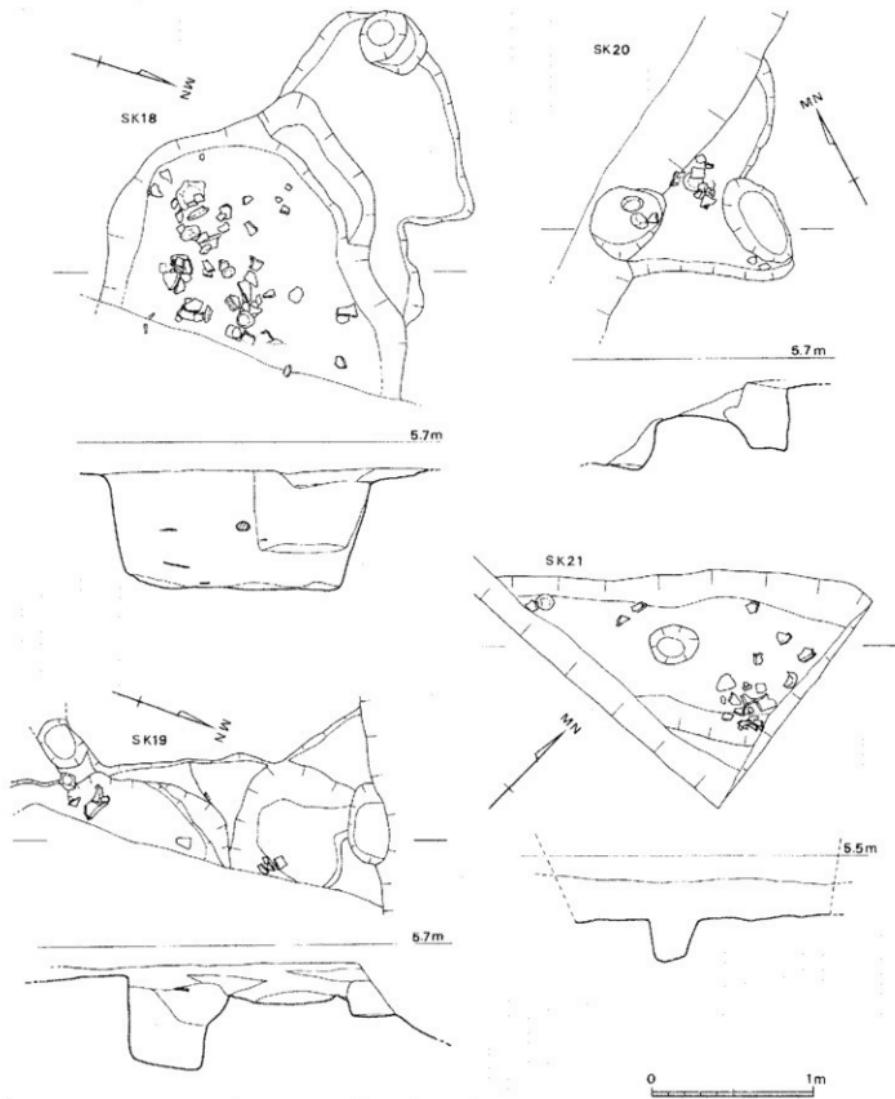
(川烟第9图) B区土壤实测图③ (1/30)



(川畠第10図) B区土壤実測図④ (1/30)



(川畠第11図) B区土壌実測図(5) (1/30)



(川損第12図) B区土壤実測図⑤ (1/30)

した。長さ1.85m、幅1.43m、深さ22cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器23点が出土した。

・S K13

B 4 区の北西で検出。平面は不整梢円形を呈す。土壌内に落ち込み及びピット 3箇所を検出した。長さ1.23m、幅69cm、深さ20cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器 2点、砥石 1点が出土した。

・S K14

B 4 区と B 5 区の境中央で検出。平面は一辺1.6mの正方形を呈し、深さ33cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器112点、磨石 1点、石斧未製品 1点が出土した。

・S K15

B 5 区の南西で検出。平面は梢円形を呈す。長さ1.42m、幅77cm、深さ33cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器12点、砥石 1点が出土した。

・S K16A

B 5 区の中央で検出。北側を S K16B に切られ、本来平面は梢円形を呈していたものと思われる。残存長1.1m、幅71cm、深さ42cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器196点、磨石 1点が出土した。

・S K16B

B 5 区の中央で検出。S K16A・C・D を切り、平面は梢円形を呈す。長さ2.2m、幅1.3m、深さ55cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器111点、石皿 1点が出土した。比較的円錐土器が多い。

・S K16C

B 5 区の中央で検出。南側を S K16B に切られ、本来平面は梢円形を呈していたものと思われる。長さ2.05m、幅1.07m、深さ23cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器302点が出土した。

・S K16D

B 5 区の中央で検出。東側を S K16B に切られ、本来平面は梢円形を呈していたものと思われる。残存長92cm、幅1.0m、深さ14cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器34点が出土した。

・S K17

B 5 区の中央西寄りで検出。平面は長梢円形を呈す。土壌内にピット 1箇所を確認した。長さ3.5m 幅1.05m、深さ23cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器152点が出土した。

・S K18

B 5 区の中央東寄りで検出。東半は調査区外に抜がり、本来平面は梢円形を呈すものと思われる。残存長1.64m、残存幅1.97m、深さ73cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器237点、磨石 1点が出土した。

・S K19・20

B 5 区北側で検出。床面一定せずピットが重なり合ってできたものか。弥生中期後半土器24点出土

・S K21

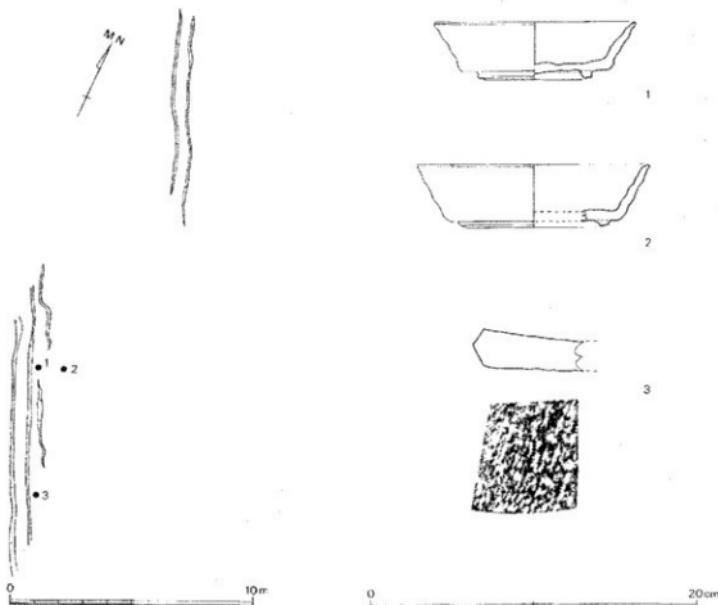
B 1 区西南隅で検出。東・南端は調査区外に抜がるが、本来平面は隅丸方形であろう。土壌内にピット 1箇所確認。幅1.05m、深さ23cmを測る。遺物は弥生中期後半の土器292点、磨石 1点が出土した。

④古代の道路状遺構（S F）

Q102区を北西から南東に横切る古代の道路状遺構が検出された。道路は弥生時代の土壙、ピットなどの生活跡を切ってつくられている。両側に幅約60cm、深さ約5cmの側溝があり、側溝間の心々幅は約6mである。方向は磁北に対し40°西に振れる。道路の西側は微高地になっており、切り通し状に削られたものと考えられる。道路面は茶褐色粘質土でやや硬化している。道路を埋めた灰茶褐色土からは須恵器3点と瓦1点が出土している。

1、2は須恵器の杯身で断面角型の高台がつくが、内側が接地面となる。底部と体部の境は明瞭で、まっすぐに立上り口縁部はやや外反する。8世紀中頃から後半のものと考えられる。3は瓦で桶巻作りの平瓦であると思われる。外面にはカキ目状のタタキがのこるが、内面の布目は風化により認められない。側面の処理は分割後に凸面側を面取りを行ったものと考えられる。胎土は緻密であるが、焼成はやや甘く、橙色を呈する。

以上の遺物から判断して、この道路状遺構は8世紀後半頃に埋没したことが推測される。施工年代については不明な点が多いが、律令下における倭紋国の成立前後、つまり8世紀初頭頃ではなかったかと推測される。腐絶の理由も明らかではないが、各地の例を参考にしつつ今後考えてみたい。なお、道路を直線に延長した想定線上に木簡と銅帯の出土地点があり、これらとの関係も今後の検討課題として指摘しておきたい。



(川畠第13図) S F平面図 (S = 1/200)

(川畠第14図) S F出土遺物 (S = 1/3)

(3) 遺物

①B区土壇出土土器 (川畠第15~22図)

土壇出土の壺形土器は鋤先形口縁が大多数であるが、福岡平野以東系の跳ね上げ口縁が若干みられる。ここでは口縁部のみのカウントによって跳ね上げ口縁の点数、割合を出している。

1~7はSK1A出土である。1~3は須玖II式の壺である。いずれも口縁直下に突帯を持つ。4は袋状口縁壺の底部であろう。5~7は壺底部である。5・7は跳ね上げ口縁をもつ壺の底部であろう。SK1Aからは壺口縁総数36点のうち、跳ね上げ口縁壺が1点出土している。

8~17はSK1B出土である。8は鋤先形口縁の壺である。口縁端に浅い刻目を施す。9・10は鋤先形口縁壺で、口縁から内面にかけ丹が残るが他は不明である。11・12はく字形に屈曲する口縁を持ち、内端部を上方につまみ上げたいわゆる跳ね上げ口縁壺である。12は口縁から外面にかけ丹を施す。13は内面に僅かに丹が残る鉢である。14・15は鋤先形口縁の高坏である。いずれも風化著しいが、15はわずかに丹が残る。16は壺底部、17は壺底部である。SK1Bの資料はいずれも中期後葉~末の時期であろう。壺口縁総数103点のうち、跳ね上げ口縁壺が15点(14.6%)出土している。

18~24はSK2出土である。18~21は壺口縁である。20・21は跳ね上げ口縁が風化したものと思われる。22は壺の胸部~底部である。外面は風化しているが縦方向のハケ目調整がみられる。23・24は高坏で、23が口縁下に突帯を持ち、24は内面に僅かに丹が残る。壺口縁総数42点のうち、跳ね上げ口縁が7点(16.7%)出土している。

25~28はSK3出土である。25は鋤先形口縁の壺で、口縁上面に径1.3cmほどのボタン状突起を貼り付けている。26~28は壺口縁である。いずれも中期後葉であろう。27は口縁下に突帯を持たない。壺口縁総数50点のうち、跳ね上げ口縁壺が2点出土している。

29~36はSK4出土である。29~33は壺口縁である。30はやや字ぎみに屈曲する。31はく字状に屈曲し、口径が狭い。32は跳ね上げ口縁である。33はく字状に屈曲し、口縁端部を僅かに凹ませ方形に納める。34・35は壺底部である。34は跳ね上げ口縁壺の底部であろう。36は身部の広がりから蓋のつまみ部分と判断したが、底部の可能性もある。壺口縁総数28点のうち、跳ね上げ口縁壺が6点(21.4%)出土している。SK4出土の資料は中期後葉の時期であろう。

37~41はSK5出土である。37は袋状口縁壺で、口縁内面と外面は丹塗を施す。38・39は壺口縁で39は突帯を持たない。いずれも内外ともに風化著しく、調整は不明。40は壺底部で一部を高台状に成形している。41は壺底部である。いずれも中期後葉の資料であろう。壺口縁総数54点のうち、跳ね上げ口縁壺が1点出土している。

42~52はSK6出土である。42は広口壺の口縁部である。肩部から頸部が直線的に立ち上がり、口縁部は大きく外湾する。内外とも風化が著しいが、外面に僅かに丹が残る。43は鋤先形口縁の壺である。口唇端部に幅5mmほどの刻目を施す。44~49は壺である。44は口縁がく字状に屈曲し口縁上面が湾曲する。45~47は須玖II式の壺口縁である。47は口径が縮まり、口縁内面から外面にかけ丹塗である。口縁直下に突帯状の盛上がりがあるが風化のため明瞭ではない。48は跳ね上げ口縁壺である。49は小形の壺である。本来全面丹塗と思われるが風化しほとんど残っていない。50は高坏の筒部である。風化著しい。51は器台である。くびれ部はやや上位にあり、外面は縦方向のハケ目調整である。52は

壺底部で、外から内へ焼成後の穿孔がある。出土土器総数315点のうち、丹塗土器62点(19.7%)高坏7点(2.2%)であり、祭祀的色彩の濃い上層である。壺口縁総数40点のうち、跳ね上げ口縁甕が5点(12.5%)出土している。

53~56はSK7A出土である。53は鋤先形口縁の壺で、頸部に暗文を施す。54は袋状口縁丹塗壺である。55はく字状口縁の壺口縁部、56は須玖II式の壺口縁部で内外面ともに風化するが、外面に横方向のハケ調整痕が残る。壺口縁総数14点のうち、跳ね上げ口縁甕が2点出土している。

57~61はSK7C出土である。57~59は壺で、59はく字状に屈曲する口縁部である。60は鉢の口縁部、61は壺底部である。壺口縁総数32点のうち、跳ね上げ口縁甕が2点出土している。時期的には中期後葉の資料であろう。

62~65はSK7D出土である。62は袋状口縁丹塗壺である。内外面とも丁寧なナデ仕上げである。63・64は須玖II式の壺口縁部である。64は外面がハケ目調整の後ナデ仕上げ、内面は丁寧なナデ仕上げである。65は蓋で、器部に焼成前の穿孔があり、外面丹塗である。無頸壺の蓋であろう。壺口縁総数12点のうち、跳ね上げ口縁甕が3点出土している。

66~71はSK9出土である。66は鋤先形口縁の壺で内外面とも丁寧な横ナデ仕上げである。67~70は甕である。67は外面縱方向のハケ目調整、内面ハケ後ナデ仕上げである。69は内外面ともに風化するが、シャープな突帯を口縁下に巡らす。口縁部には径4mmほどの穿孔が2箇所ある。穿孔の間隔は3cm程度である。いずれも須玖II式の資料である。70はく字状に屈曲する口縁部を持つ。外面は縱方向のハケ調整後ナデ仕上げである。71は壺底部で、内外面とも丁寧なナデ仕上げである。壺口縁総数79点のうち、跳ね上げ口縁甕が1点出土している。

72・73はSK10出土である。72は壺口縁、73は壺底部である。いずれも風化し調整は不明。跳ね上げ口縁甕は出土していない。時期的には中期後葉であろう。

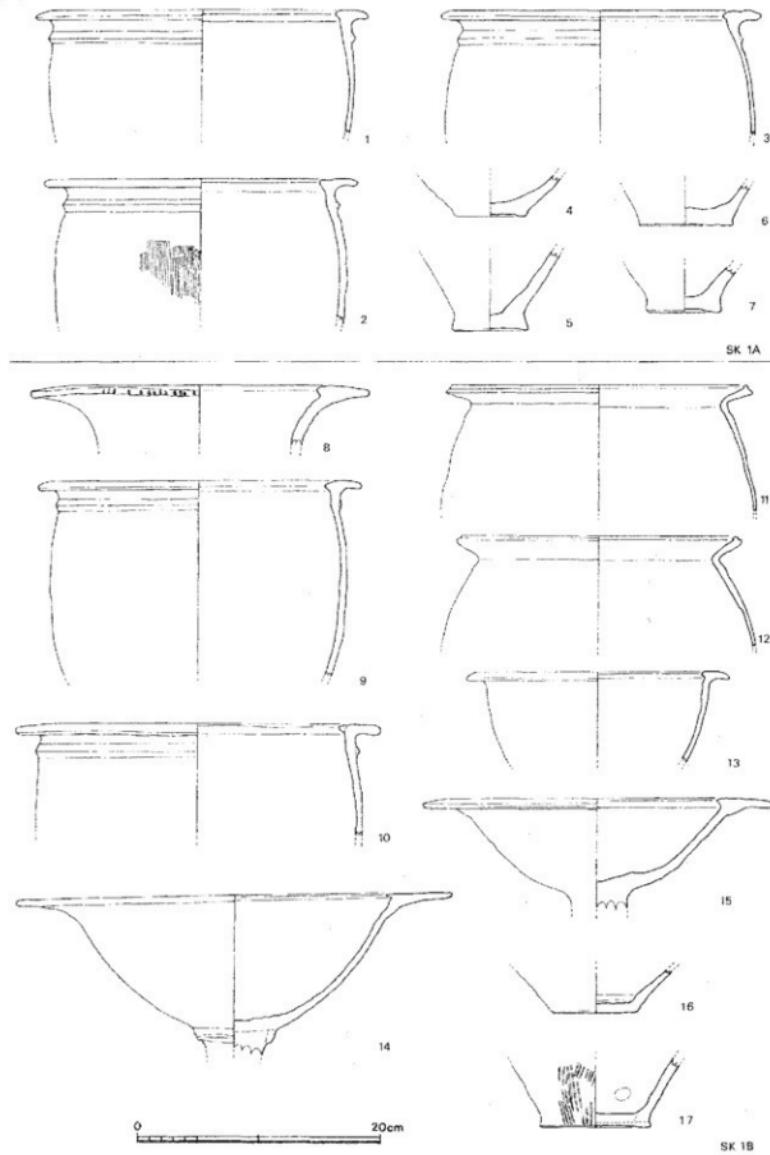
74・75はSK11A出土である。74は鋤先形口縁の壺で、内面風化し調整不明。外面はナデ仕上げである。75は甕の口縁部で内側がシャープに突出する。跳ね上げ口縁甕は出土していない。時期的には中期後葉であろう。

76はSK11B出土である。須玖II式の甕口縁部で突帯を持つ。跳ね上げ口縁甕は出土していない。

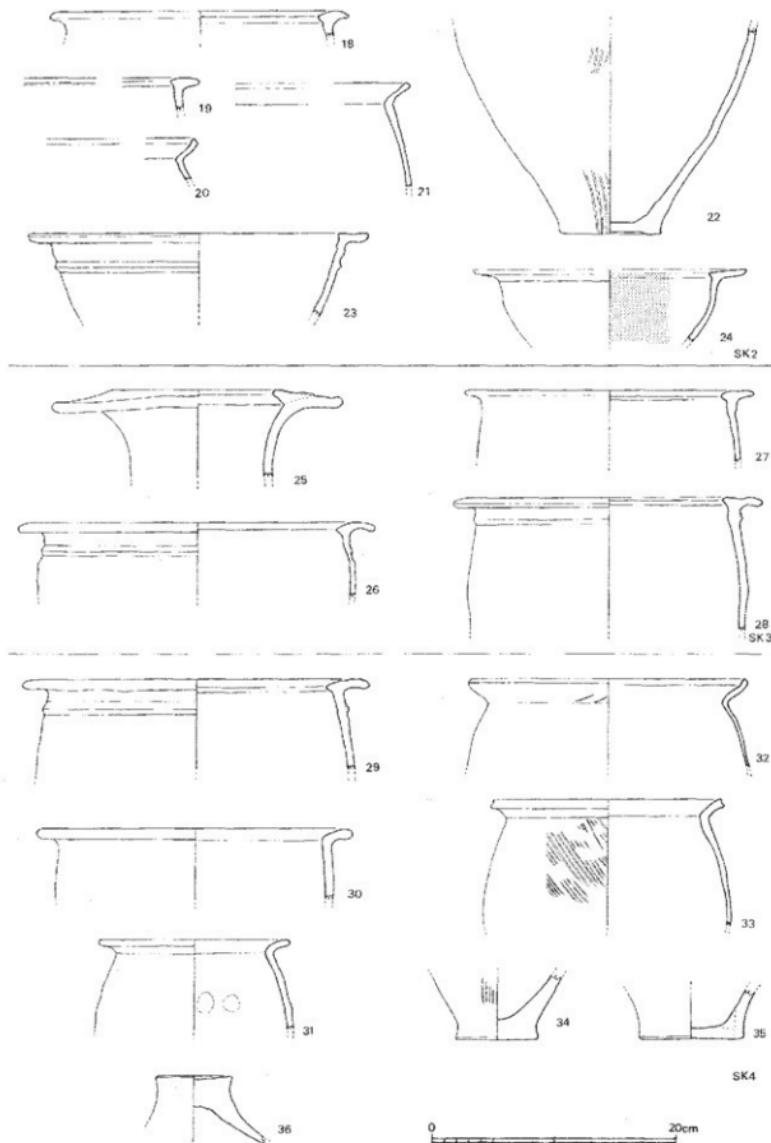
77~79はSK12出土である。77は壺の頸部で外面丹塗りである。袋状口縁をもつ壺であろう。78・79は須玖II式の甕口縁部である。いずれも内外面とも風化し、調整は不明。78の外面に僅かにハケ調整の痕跡がみられる。跳ね上げ口縁甕は出土していない。

80はSK13出土である。須玖II式の甕口縁部で、内面にハケ調整痕が僅かに認められるが、風化のため明確ではない。

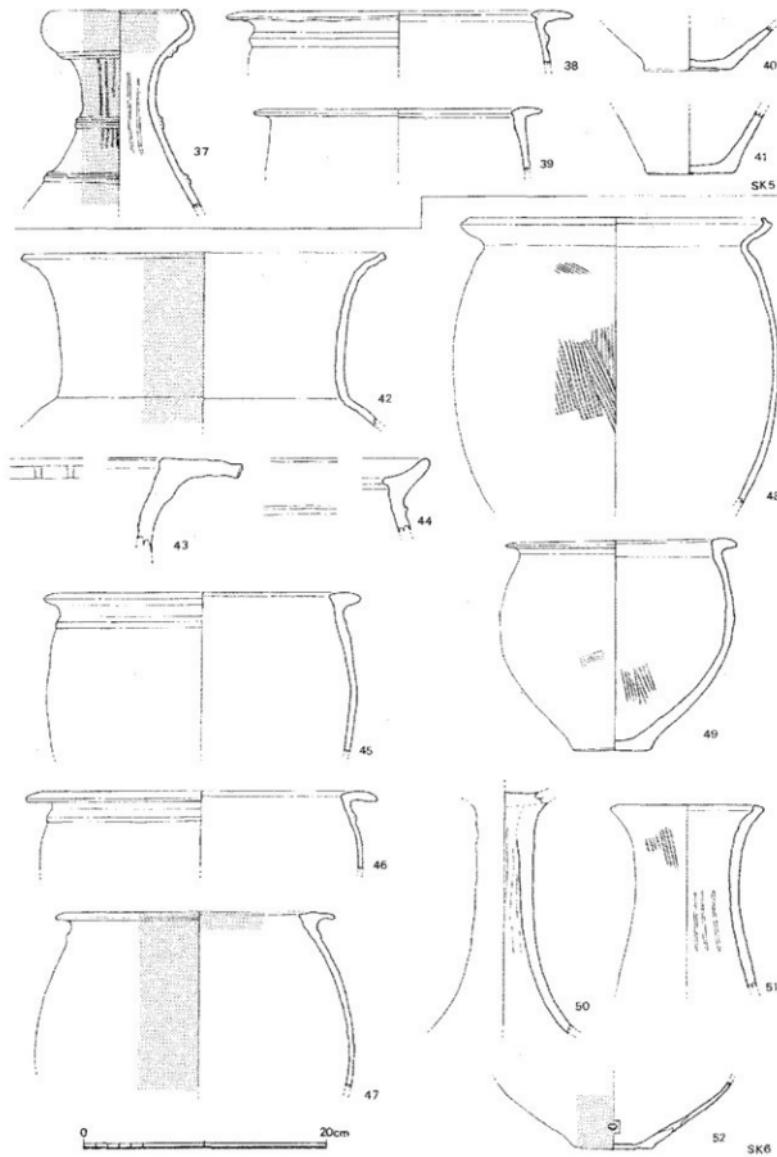
81~85はSK14出土である。81は鋤先形口縁の壺で、内面風化し調整不明。口縁内面に僅かに丹が残る。82~84は壺口縁である。82は須玖II式の甕で内外面風化し調整は不明。口縁上向と内面に僅かに丹が認められる。83はく字状に屈曲する口縁で、口唇部は肥厚し端部は丸く納める。内外面ともに風化し調整は不明。84は跳ね上げ口縁である。内外面ともに風化し調整は不明。85は丹塗の鉢である内外面ともに風化し調整は不明だが、外面も本来丹塗であろう。甕口縁総数30点のうち、跳ね上げ口縁甕が6点(20%)出土している。



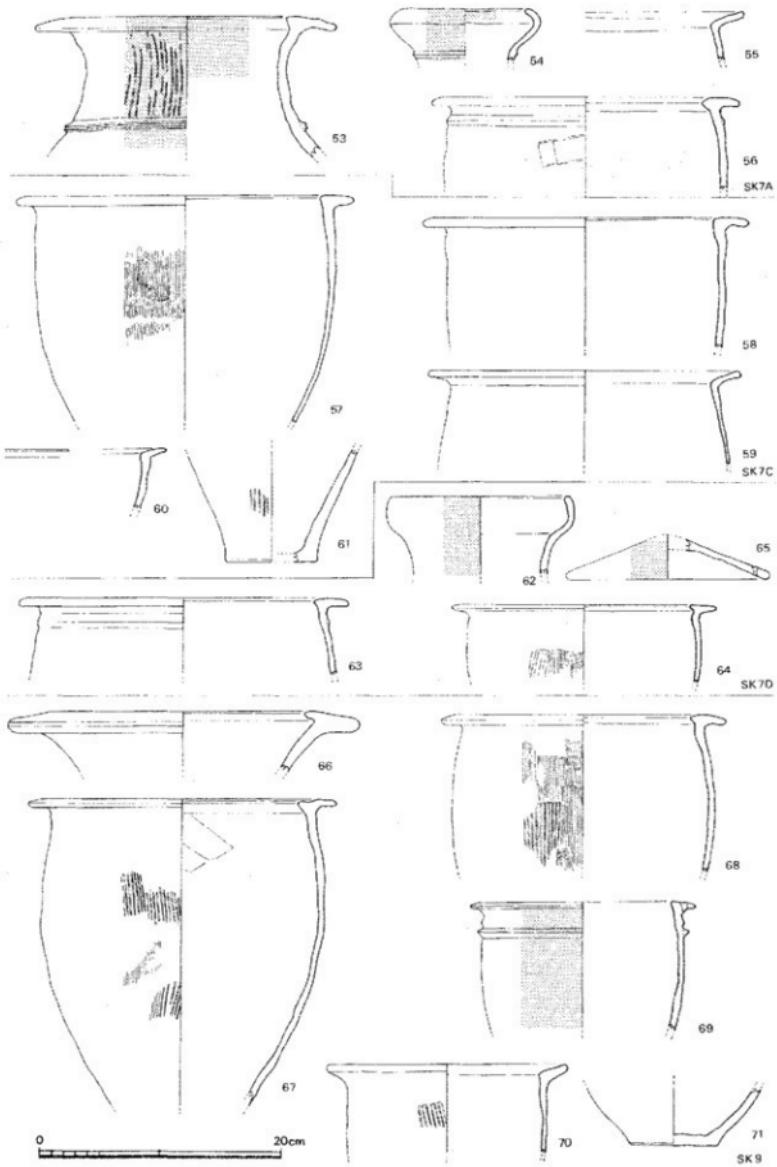
(川嶋第15図) SK I 出土土器 (1 / 4)



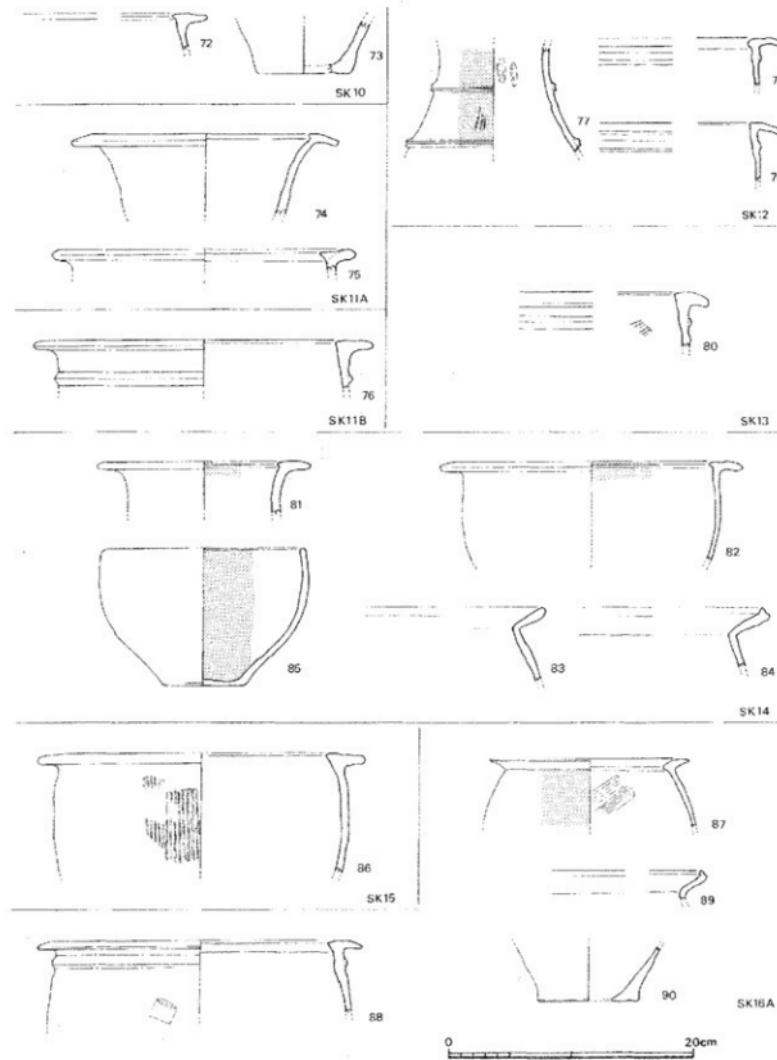
(川辺第16図) SK 2・3・4出土土器 (1/4)



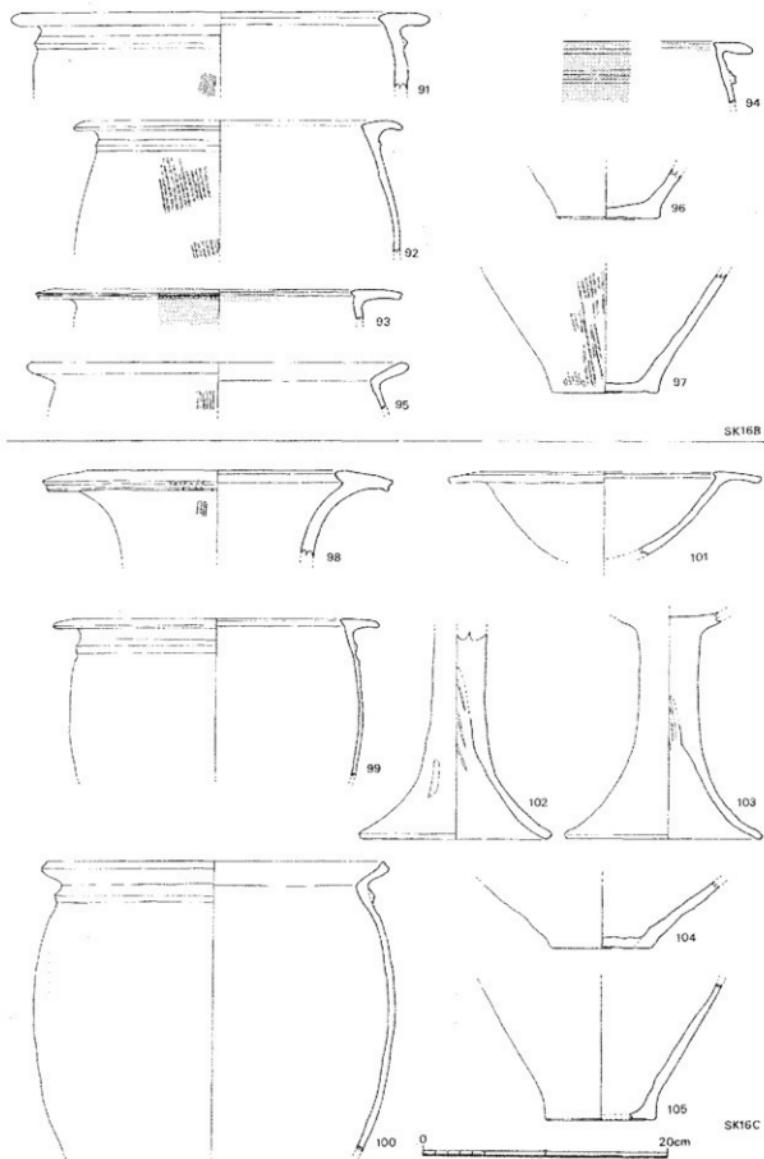
(川畠第17図) SK5・6出土土器 (1/4)



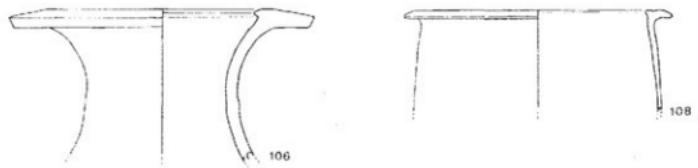
(川辺第18図) SK7・9出土土器 (1/4)



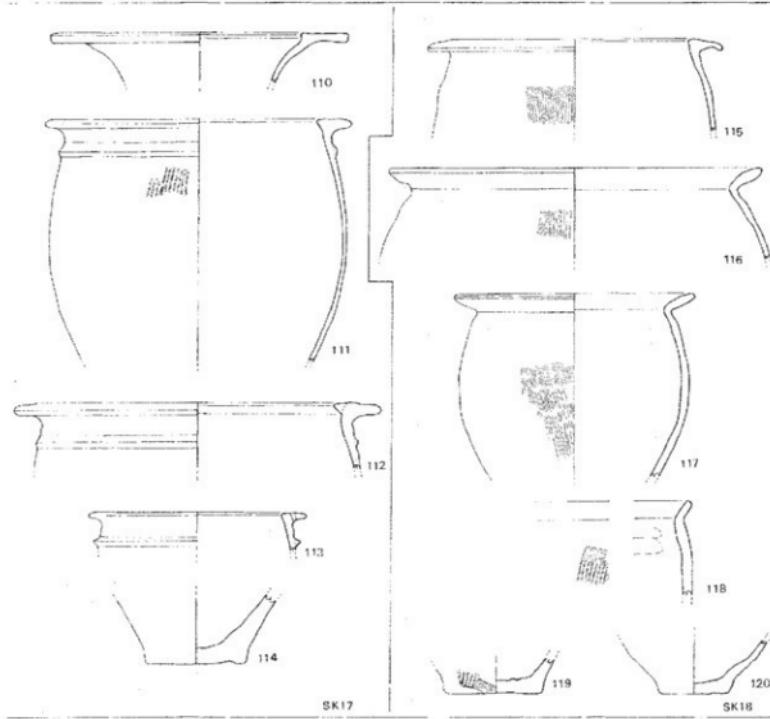
(川畠第19図) SK10~16出土土器 (1/4)



(川畠第20図) S K 16出土土器 (1 / 4)

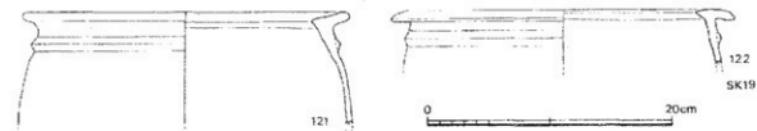


SK16D



SK17

SK18



0 20cm

(川越第21図) SK 16~19出土土器 (1 / 4)

86はSK15出土である。須玖II式の壺で、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ仕上げである。跳ね上げ口縁壺は出土していない。

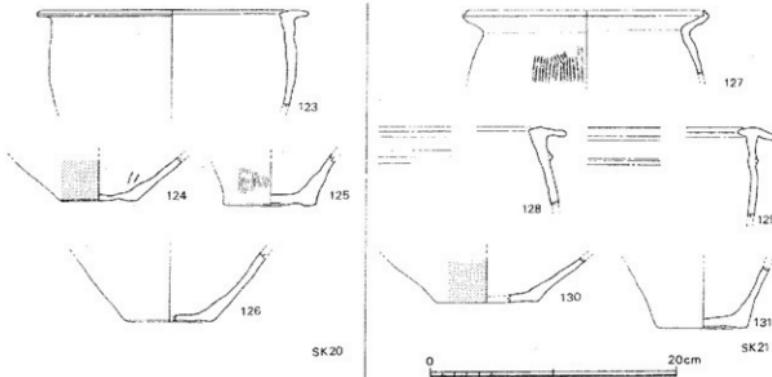
87~90はSK16A出土である。87は無頸壺である。外面は丹塗、内面はハケ調整の後ナデ仕上げである。88・89は甕口縁部である。88は須玖II式の甕で、内外面風化し、調整は不明だが外面に僅かにヘラあて痕が残る。89は跳ね上げ口縁の甕である。90は甕の底部である。内外面風化し調整不明。甕口縁総数19点のうち、跳ね上げ口縁壺が2点出土している。

91~97はSK16B出土である。91~94は須玖II式の甕口縁である。91・92は外面縦方向のハケ目調整、内面はナデ仕上げである。93は口縁端部に沈線を施し、刻目を持つ。94は口縁直下にM字形突帯を持つ。いずれも内外面風化し調整は不明だが、口縁部と外面に丹が僅かに残る。95はく字状に屈曲する甕口縁である。外面は縦方向のハケ目調整である。96・97は甕底部である。97は外面に縦方向のハケ目調整を行う。跳ね上げ口縁壺は出土していない。

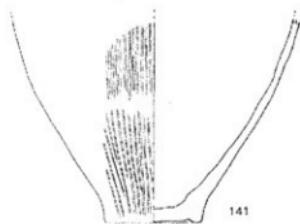
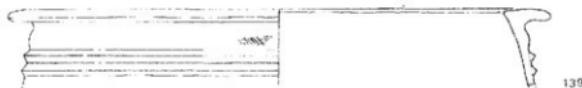
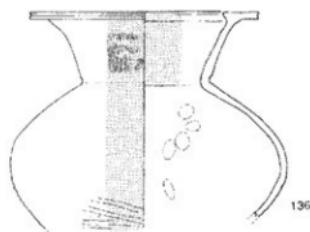
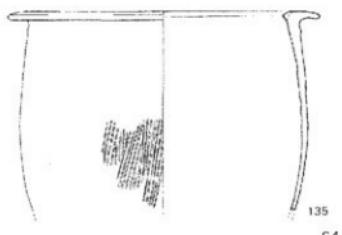
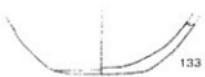
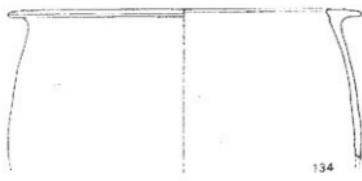
98~105はSK16C出土である。98は劔先形口縁の壺で、口縁端部が僅かに凹み刻目を施す。外面は縦方向のハケ目調整の後ナデ仕上げである。99は須玖II式の甕、100は跳ね上げ口縁の甕で、口縁直下に突帯を巡らす。いずれも風化し調整は不明。101~103は高坏で、101は劔先形口縁を持つ。102・103は脚柱部だが風化が著しい。104は甕底部で、外面はナデ仕上げである。105は甕底部である。須玖II式であろう。甕口縁総数5点のうち、跳ね上げ口縁壺が1点出土している。

106~109はSK16D出土である。106は劔先形口縁の壺で、外面は風化著しい。内面は丁寧なナデ仕上げである。107・108は須玖II式の甕である。内外風化し調整は不明。109は甕底部で、外面は風化著しい。内面は丁寧なナデ仕上げである。跳ね上げ口縁壺は出土していない。

110~114はSK17出土である。110は劔先形口縁の壺で、内外面ともナデ仕上げである。111~113は須玖II式の甕である。いずれも内外面ともに風化するが、111は外面に縦方向のハケ目調整の痕跡が僅かに残る。113は口縁部に径4mm程の穿孔を持つ。穿孔内に丹が認められ、本来丹塗の甕であろう。114は甕底部である。内外風化し調整は不明。跳ね上げ口縁壺は出土していない。



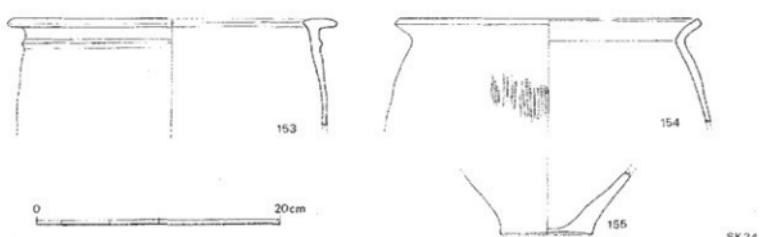
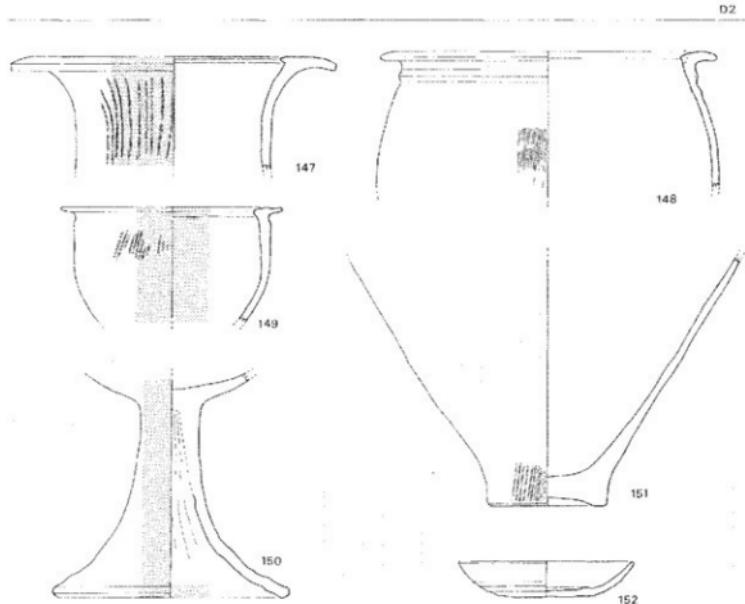
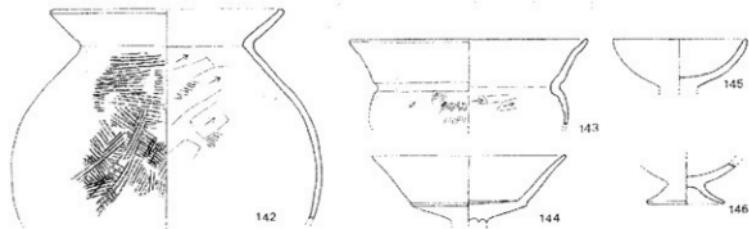
(川畠第22図) SK20・21出土土器 (1/4)



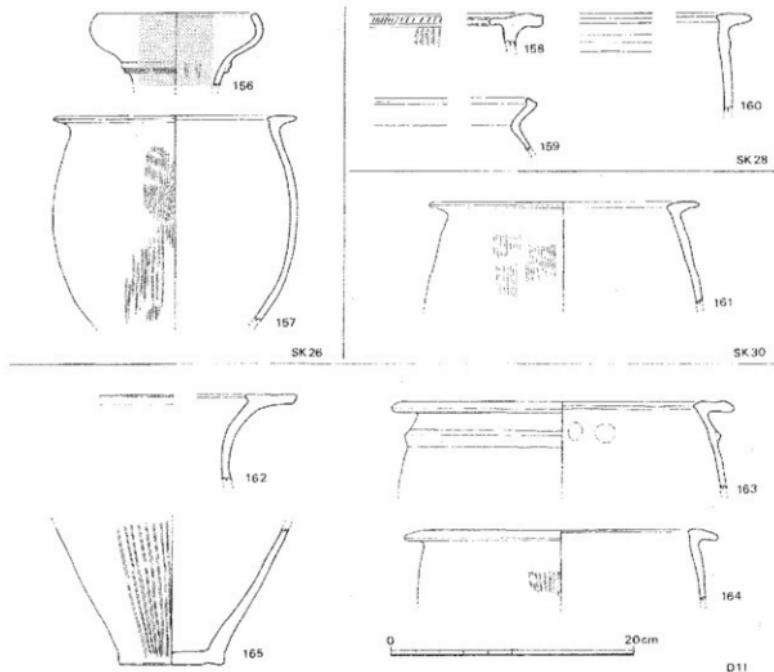
0 20cm

02

(川辺第23図) C・D区出土土器 (1/4)



(川畠第24図) D区出土土器① (1 / 4)



(川畠第25図) D区出土土器② (1/4)

115~120はSK18出土である。115は須玖II式の壺である。内面が横ナデ、外面が縦方向のハケ口調整である。116・117はく字状に屈曲する口縁を持つ。いずれも外面は縦方向のハケ口調整である。118はく字状に緩やかに屈曲する口縁である。外面縦方向のハケ口調整、内面はヘラナデの痕跡が認められる。119は壺底部で、内面ナデ仕上げ、外面縦方向のハケ口調整である。120は壺の底部で、内面はナデ仕上げ、外面は丁寧なナデ仕上げである。跳ね上げ口縁壺は出土していない。

121・122はSK19出土である。いずれも須玖II式の壺口縁である。121は内傾する口縁で、尖帯を巡らす。内面はナデ仕上げ、外面は縦方向のハケ口調整の後、ナデ仕上げであるが風化のため明瞭ではない。122は内外面風化し、調整は不明。跳ね上げ口縁壺は出土していない。

123~126はSK20出土である。123は須玖II式の壺である。内外面風化し調整は不明。123・126は壺底部である。いずれも内外面風化著しいが、124は外面に僅かに丹が残る。125は壺底部である外面は縦方向のハケ口調整痕が僅かに残る。内面はナデ仕上げである。跳ね上げ口縁壺は出土していない。

127~131はSK21出土である。127は跳ね上げ口縁の壺で、内面はナデ仕上げ、外面は縦方向のハケ

日調整である。128・129は須玖II式の壺である。内外面とも風化著しく調整は不明。130は壺底部である。外面に僅かに丹が残る。131は壺底部である。外面は風化著しく調整は不明。壺口縁総数26点のうち、跳ね上げ口縁壺が7点(26.9%)出土している。

②C区出土土器（川畠第23図）

132・133はS D 2出土である。132は壺口縁部で、締まった頸部から緩やかに外傾し、直線的に開く口縁を持つ。外面とも風化著しく調整は不明。133はいわゆる凸レンズ状の壺の底部である。時期的には、弥生後期後葉であろう。

134・135はC 4 区旧河道内出土である。いずれも須玖II式の壺である。135は外面ともに風化著しく調整は不明である。135は内面ナデ仕上げ、外面縦方向のハケ目調整の後ナデ仕上げである。

③D区出土土器（川畠第23・24・25図）

136～146はD 2 区旧河道内、12・13層より出土した。136は鋤先形口縁の壺である。口縁部内面及び外面に丹を施すが、残りはよくない。胴部内面には指痕压痕が認められる。外面は口縁部が縦方向のハケ目調整の後ナデ仕上げ、胴部上半はナデ仕上げ、下半はヘラ状工具による磨きが施されている。137～139は壺口縁である。137は須玖II式の壺で、外面には煤が厚く付着している。そのため外面の調整は不明瞭である。内面はナデ仕上げである。138はく字状に屈曲する口縁を持つ。内面はナデ仕上げ、外面は縦方向のハケ目調整である。外面全面に煤が付着している。139は須玖II式の大型の壺である。口縁下に2状の三角突帯を巡らす。内面はナデ仕上げ、外面は縦方向のハケ目調整の後ナデ仕上げである。140は素口縁の鉢である。内面丹塗で、外面は風化のため丹が認められないが、本来全面丹塗であろう。141は壺の底部で、内面ナデ仕上げ、外面は縦方向のハケ目調整である。142～147は土師器である。これらはD 2 区の旧河道内でも西側の限定された地点でのみ出土した。142は布留系の壺で、口縁が僅かに内湾する。胴部内面はハケ目調整の後ヘラケズリで仕上げてある。外面は胴部が横方向のハケ目調整で胴部外面は斜め方向のハケ目調整である。143は布留の鉢で、口縁は外傾し長くのびる。内面はヘラケズリ、肩部に刺突文を施す。144は高坏で坏部のみほぼ完形で遺る。内外面とも丁寧なナデ仕上げである。145も高坏で脚樹部は欠損している。内外面ともナデ仕上げである。146は山陰系の低脚付杯形土器である。杯部内外面とも丁寧なナデ仕上げている。

147～151はD 3 区旧河道内、12層より出土した。147は大型の鋤先形口縁をもつ壺で、口縁上面から外面は丹塗で、頸部は縦方向に暗文を施す。148は壺で内面はナデ仕上げ、外面は縦方向のハケ目調整である。149は底部を欠損する鉢である。内面は丹塗でナデ仕上げ、外面は風化著しいがわずかに丹が認められる。外面は口縁下に縦方向のハケ目調整がまとめられる。150は高坏で坏部の大半を欠くが坏内面および外面は丹塗である。151は壺底部で内外面とも風化著しく調整は不明である。内部底に炭化物の付着が認められる。152は土師器の杯である。時期的には奈良時代のもので旧河道内に混入したものと考えられる。

153～155はD 5 区 S K24出土である。153は壺口縁部である。内外面とも風化著しく調整は不明。154は跳ね上げ口縁の壺である。内面は風化著しいため調整は不明である。外面は縦方向のハケ目調整である。155は壺の底部であると思われる。内外面とも風化著しく調整は不明である。

156・157はD 8 区 S K26出土である。156は袋状口縁の壺で内外面とも丹塗である。157は壺で内面

ナデ仕上げ、外面は縦方向のハケ目調整である。

158～160はD 9区SK28出土である。158は壺口縁部で、内外面ともに風化するが丹がわずかに認められる。口唇部には刻目を施す。159は跳ね上げ口縁の壺である。内外面とも風化著しく調整は不明である。160は壺口縁である。内外面ともに風化著しく調整は不明である。

161はD区SK30出土である。壺の口縁部で外面は縦方向のハケ目調整である。

162～164はD11区の旧河道内、4層出土である。162は鉢先形口縁の壺口縁部である。内外面とも風化著しい。163は甌口縁部である。内外面とも風化著しく調整は不明であるが、内面口縁下に指頭圧痕が認められる。164は甌口縁である。内面ナデ仕上げで、外面は縦方向のハケ目調整である。165は甌の底部で、内面ナデ仕上げ、外面縦方向のハケ目調整である。D11区出土の上器はいずれも弥生中期後葉に位置づけられよう。

④石器（川畠第26・27図）

・石鎚（1）

1は黒曜石製で先端・基部を欠くが、凹基式石鎚である。B 1区付近の表採品である。

・石ノミ（2）

2は粘板岩製の石ノミで、かなり薄手である。D 6区2層より出土。

・石鎌（3～6）

3～6はすべて頁岩製の石鎌である。3は中程の部分、4～6は基部付近の破片である。6は表面がかなり滑らかであるため、後に砥石に転用されたものと思われる。3はD 3区12層、4はB区付近表採、5はC 2区3層、6はD 2区12層出土である。

・石斧（7）

7は撥形の石斧で刃部は両面研磨である。石質は玄武岩である。SK 1 Bより出土。

・砥石（8～12）

8は頁岩製の砥石である。小型で携帯用であると思われる。SK 7 Cより出土。9・11・12は砂岩製の砥石である。9は表裏とも使用するが、研ぎ減りは少ない。SK 15より出土。10は粘板岩製の砥石である。表面と両側面の使用痕がある。裏面には直径2cmほどの円形の凹みがある。B区付近表採品である。11は表全面、裏面も一部使用している。側面にすじ状の使用痕がある。SK 3より出土した。12は大型で3面を使用している。1面にはすじ状の使用痕がある。B 5区の2層より出土。

・磨石・凹石・敲石類（13～16）

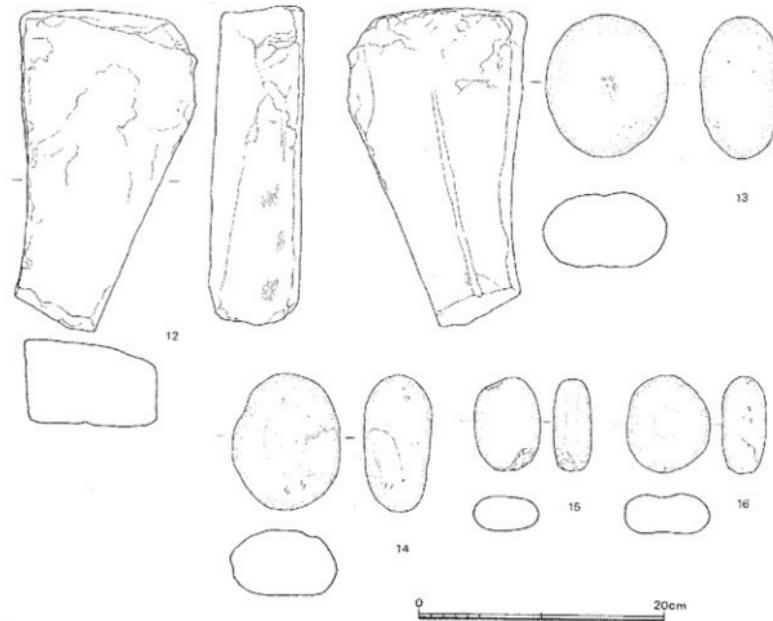
13～16はすべて玄武岩製である。13は肉面ともわずか凹む。SK 20出土。14は磨石で側面の片側に2カ所のわずかな凹みが認められる。SK 9出土。15は本来磨石であるが、両端には打ち欠いたような痕跡があり、石鎌に転用されたものであろうか。B 3区2層出土。16は凹石で両面に凹面が認められる。SK 1 B出土。

⑤金属器（川畠第28図 1・2）

1は袋状基部を持つ鍛造鉄斧である。基部の断面は長方形で、基部の幅より刃部の幅のほうがわずかに広い。D 3区12層出土。2は2点の鉄製品が密着している。一方は鎗と思われるが、他方は板状で刃部を持つ。鍛造鉄斧であろうか。鎗の表面には本質の痕跡が残っている。



(川烟第26图) 石器实测图① (1/2 + 1/4)



(川畠第27図) 石器実測図② (1/4)

⑥土製品 (川畠第28図 3・4)

3・4は投弾である。3は長さ4.7cm、最大径2.9cm、重さ33.6gを測る。4は長さ3.3cm、最大径2.1cm、重さ13.6gを測る。SK3出土である。

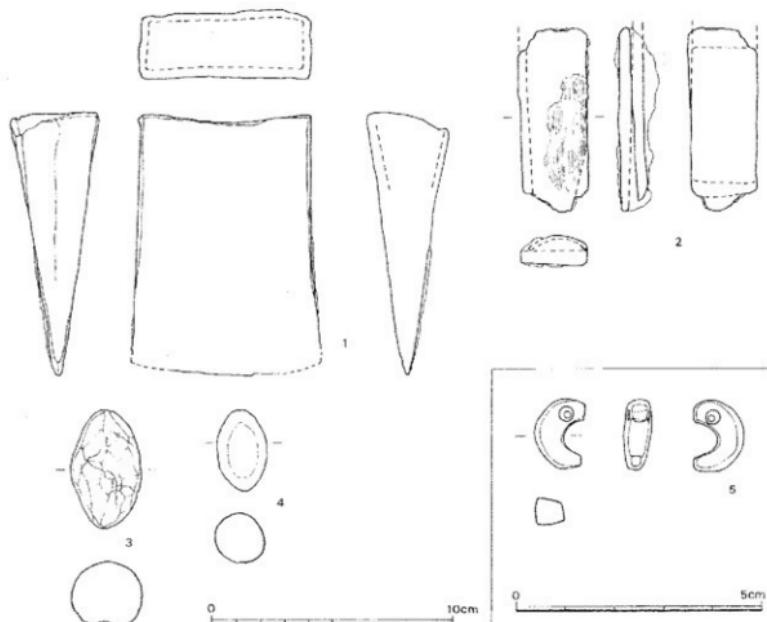
⑦装飾品 (川畠第28図 5)

5は翡翠製の勾玉である。色は淡緑白色を呈し、中央部断面は台形状を呈する。長さ1.44cm、最大厚0.52cmを測る。両側面からの穿孔である。

(4) 小結

今回の調査では、弥生中期後葉の上塙30基、ピット群、弥生後期後葉の溝状遺構1条、時期不明の溝状遺構1条、旧河道2条、古代の道路状遺構1条を検出した。

上塙及びピット群は、B区・D5~10区に集中している。住居跡は確認していないが、調査区外も含め東西の旧河道に挟まれたエリアに中期後葉の時期の小さく纏まった生活空間が想定される。この生活空間が南北にどの程度広がるのかは、南が現橋鉢川となっており、また北側は後世にかなり深い削平を受けているため、不明である。上塙の性格は生活遺物の廃棄土塙がほとんどであるが、SK6のように祭紀的色彩の濃いものも認められる。



(川畠第28図) 金属器・土製品・装饰品実測図 (1/1・1/2)

弥生後期後葉の遺物が出土した溝状遺構 (SD 2) は水田に関連する水路であろう。

旧河道からは弥生中期後葉の土器が多く出土しているが、遺物はD 2・3・11区、C 3・4区に限られる。この時期の河道の船は、後世の河道により削られているため不明だが、D 2・3区付近を南北に走る河道とD 11区からC 3・4区にかけての河道の2条が想定される。D 2・3区からは土器も出土しており、古墳時代・奈良時代にも形を変えながら河道が走っていたものと考えられる。

平成5年度に想定していた標示は今回発見されておらず、旧河道がその機能を代替していた可能性がある。

今回の調査で注目されるのは、土壤内の一括遺物で、これは原の辻遺跡の中期後葉の時期の土器組成を考察する上で良好な資料となろう。特に福岡平野以東系の跳ね上げ口縁甕と、本遺跡中期後葉の時期の土器で主体をなす須恵系土器との混在状況の割合を把握することができたことは今後の調査の参考になろう。跳ね上げ口縁甕は多いところで20%前後の出現率を示しており、この甕を産出する地域とどちらかの交渉が行われていたことを伺わせるものである。

図 版



B区



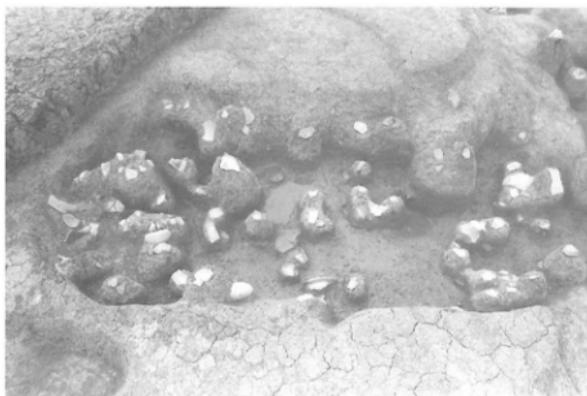
SK1



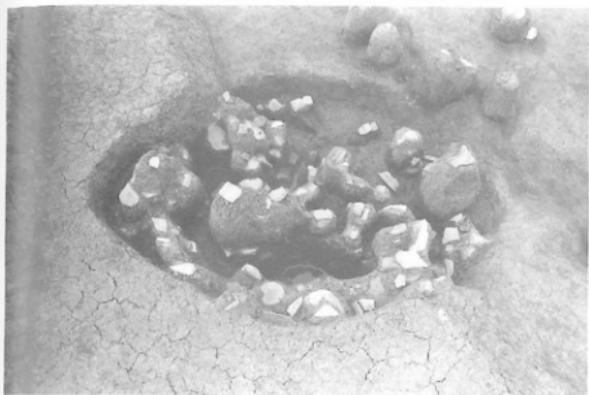
SK 2



SK 3



SK 4



S K 5



S K 6



S K 7



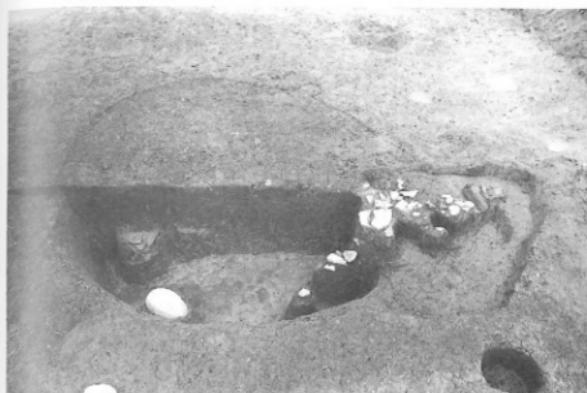
SK 8



SK 9



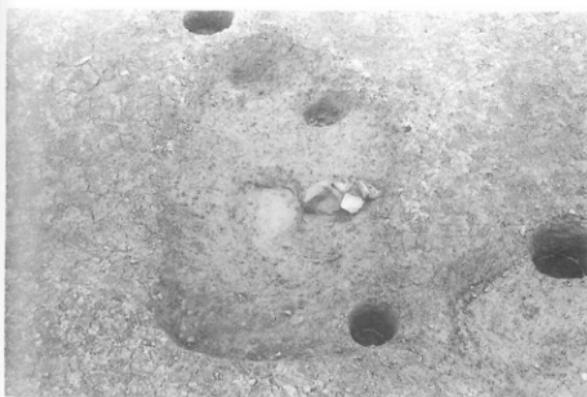
SK 10



S K11



S K12



S K13



SK 14



SK 15



SK 16

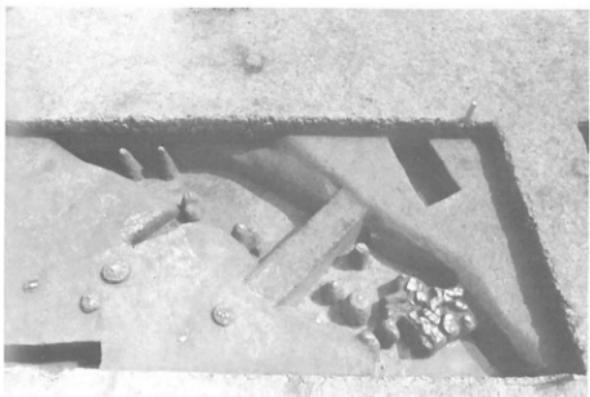
図版 7



S K 17



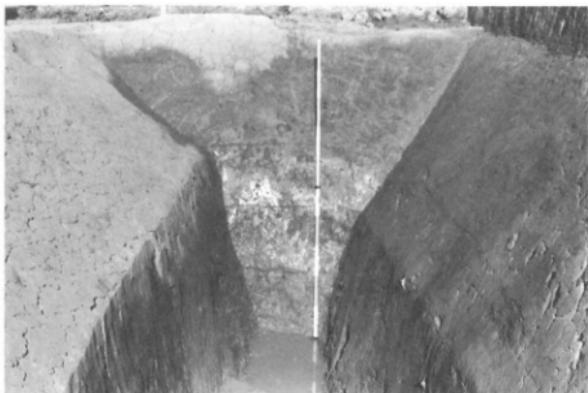
S K 18



C 2 • S D 2



C 5 • 旧河道



D 11 • 東壁



D 2 • 東壁



C区・南から



D8・SK28



B区
古代の道路状遺構



3. 原の辻遺跡(平成6年度芦辺高原地区)の調査

3. 原の辻遺跡（平成6年度芦辺高原地区）の調査

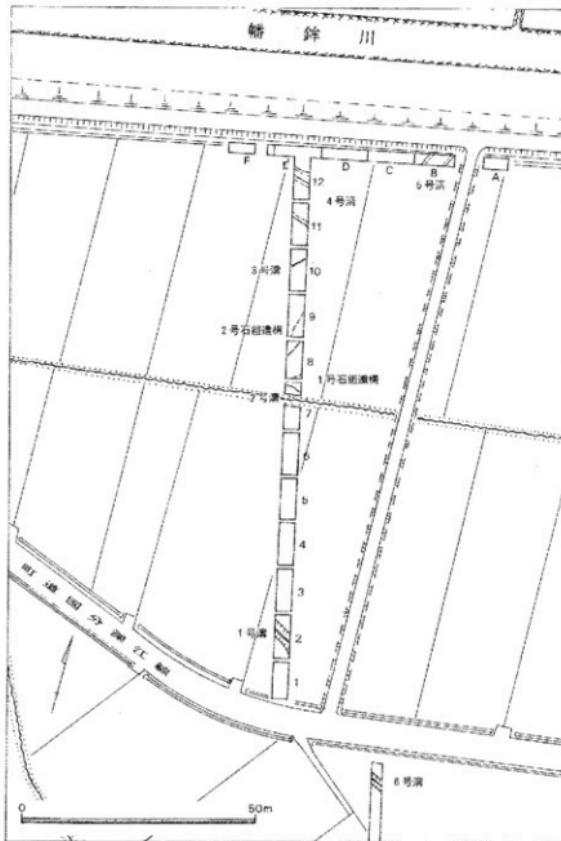
（1） 調査概要

幡鉢川流域総合整備事業（平成4年度～平成13年度）に係る、県営圃場整備事業に伴い、高原地区の遺跡範囲内で、平成7年度に排水路と農作業道路の施工計画があった。関係機関と協議の結果、記録保存で対処することになった。

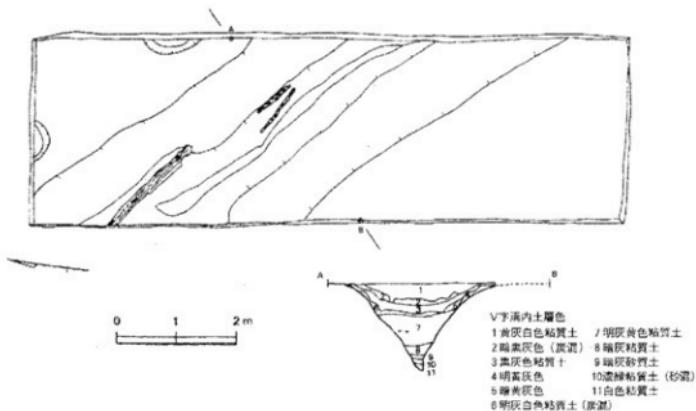
対象面積 2,240m²の20%（448m²）について、芦辺町が国庫補助を受け、町教育委員会が主体で緊急調査を実施した。

調査区は原の辻遺跡の主体をなす台地の北東側に位置する。町道国分深江線と幡鉢川とに挟まれた水田部分で、平成5年度に台地東側（石田町高原地区）の工事で敷設された排水路の延長部分に当たる。

調査は、排水路延長上の表土約20cmをバックホーではぎ取った後、南側町道の際から北側の河川に向かって幅3mのトレンチを10m毎に設定し、1～12までの番号を付した。また、計画道路は堤防の一部を利用した施工法であるため、梅雨期に堤防決壊が予期され、危険防止のため全面調査は行わず幅部分を幅2m、長さ50mの範囲を東より10m毎にA～Fを付し調査を実施した。



（芦高第1図）トレンチ位置図



(芦高第2図) 2区V字溝土層図

(2) 土層・造構

① 土層

1区～12区の土層は基本的には、表土、2層は暗茶褐色や明茶褐色や風化礫混じりの埋め土からなる。この地区は昭和14年頃に基盤整備が行われているので当時の工事で盛られた土層であろう。3層は暗緑茶色粘質土である。部分的にではあるが、3層上面に腐食した刈り株を確認した。3層が昭和14年頃の水田面であろう。4層は明茶灰色粘質土で、土器の小破片が出土したが時代、器種までは判断できない。6層は暗黒茶色粘質土で、トレンチの6区と7区で見られた。弥生時代の造構と思われるが、遺物の出土がなく決め手がない。7層は灰黄色粘質土の地山からなっているが、A区～F区の土層は、堤防の埋め土層が上位3～4層に見られ、B区では断面に溝状造構が見られ、4層目は暗茶褐色、5層は青緑茶色シルト質、7層は灰黄色粘質土の地山となっていた。

各トレンチの土層は、次ページ芦高第3図に図示した。

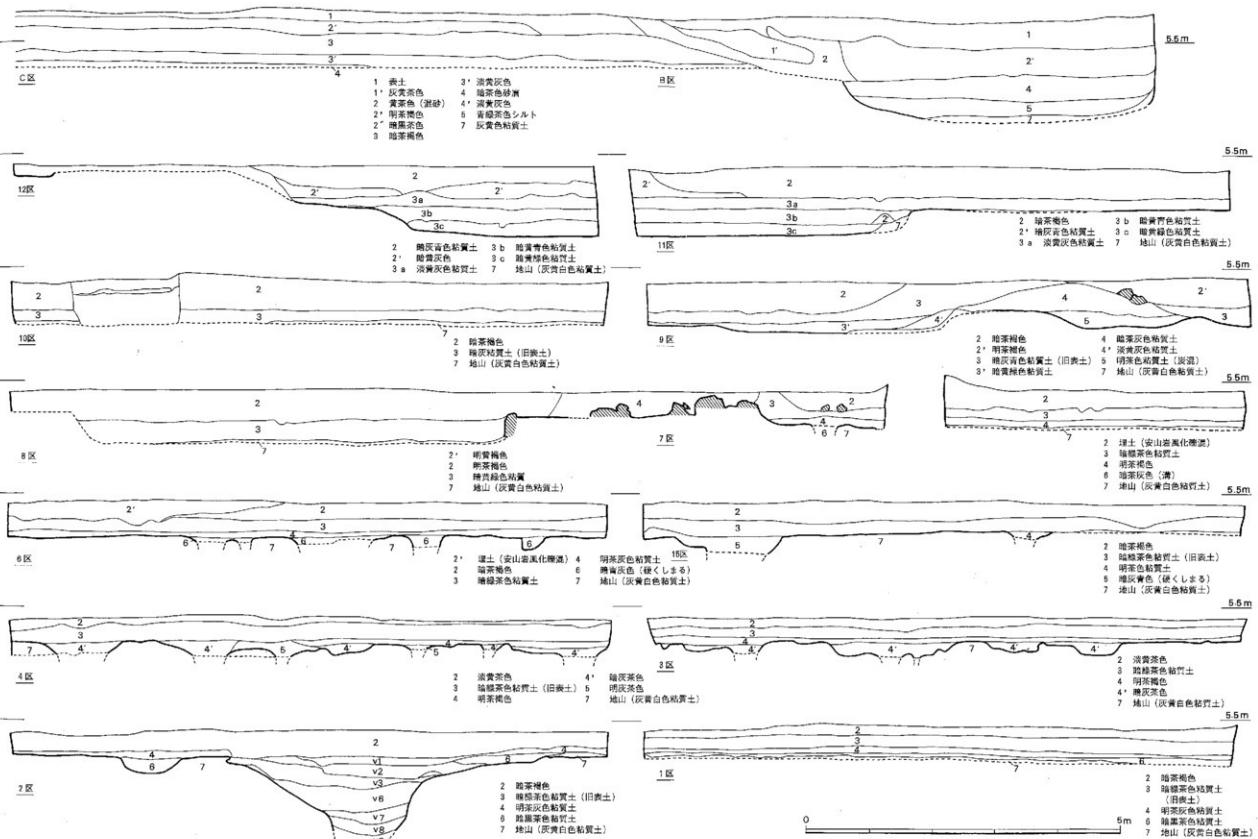
② 造構

・1号溝

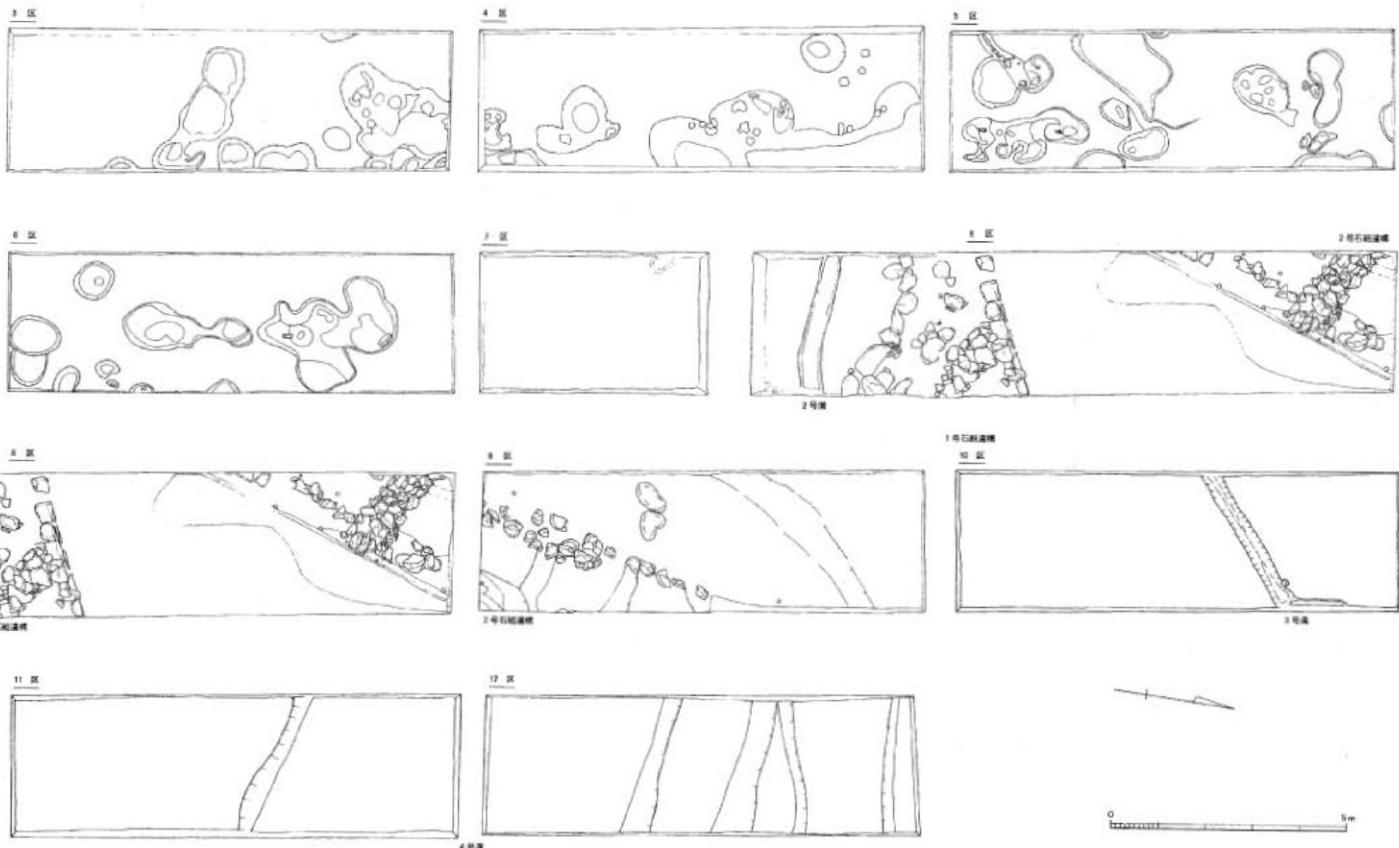
2区の中央部よりやや北に幅約2.5m、深さ約1.4m、長さ約4mの断面V字形を呈する溝で、概ね北西方向にトレンチを斜めに切る格好で検出した。遺物は上面から弥生土器片がわずかに出土したが、時代の決め手になるものではなかった。その他の遺物は、溝の中程やや下位（7層相当）に木材3点と炭化物が見られたが、材の腐朽が著しく加工痕などは検出できなかった。

V字溝の土層は、1層が黄灰白色粘質土、2層は暗黒灰色炭混り、3層は黒灰色粘質土、4層は明黄灰色、5層は暗黄灰色、6層は明灰白色粘質土炭混り、7層は明灰黄色粘質土、8層は暗灰粘質土、9層は暗灰砂質土、10層は濃緑粘質土砂混り、11層は白色粘質土となっていた。

各々の土層から試料採取して植物珪酸体分析、種子同定、花粉分析の各分析を古環境研究所に依頼



(芦高第3図) 1~12区土層図(東壁)



(芦高第4回) 造構平面図

した。誌面の都合で詳しくは触ないが、「自然科学分析結果報告書」より一部を紹介したい。

植物珪酸体分析は主にイネ科植物の珪酸体を対象にした。試料2と7から密度が比較的高い値が得られた。

層的に言うと、試料2は1層上面の溝覆土にあたり、試料7は7層最下部にあたる。

種子同定では、6層から試料1、7層上部から試料2、10層下部から試料3をそれぞれ採取して分析を行った。結果は試料1、2からは種実はほとんど検出されなかった。試料3ではオモダカ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科が多く、スゲ属、カヤツリグサ属、イヌコウジュ属、ナス科などが伴われ、樹木種実は検出されなかった。

次に花粉分析であるが、これも各土層から試料採取して分析した。溝の底部（V10層）では、樹木花粉ではトウヒ属、マツ属単維管束亞属、モミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亞属が優占し、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の出現率が高い。試料7～5（V7層～V6層）では樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、イネ属型を含むイネ科、ヨモギ属が優占する。樹木花粉ではクリーシイ属一マテバシイ属、コナラ属アカガシ亞属の出現率が高い。試料4、3（V3層、V2層）ではクリーシイ属一マテバシイ属が減少する。試料2（V1層）は花粉がほとんど検出されない。試料1（2層）ではイネ属型を含むイネ科アブラナ科が優占し、ソバ属なども伴う。樹木花粉ではスギ、マツ属複維管束亞属の出現率が高い。

・ 2号溝

7区の北側、1号石組遺構の側を東西に走る。幅0.4m、深さ0.07m、長さ3.2mを計る非常に浅い溝を検出した。遺物などは無く時代、性格は不明である。

・ 3号溝

10区の北側に位置し、北北東へ走る細い溝である。幅0.4m、深さ0.25m、長さ3.2mを計る。断面V字形を呈する。溝の東端は試掘壙に接觸した。平成3年度範囲確認調査時のT-1試掘壙に相当すると思われる。この溝も遺物の出土がなく時代、性格は不明である。

・ 4号溝

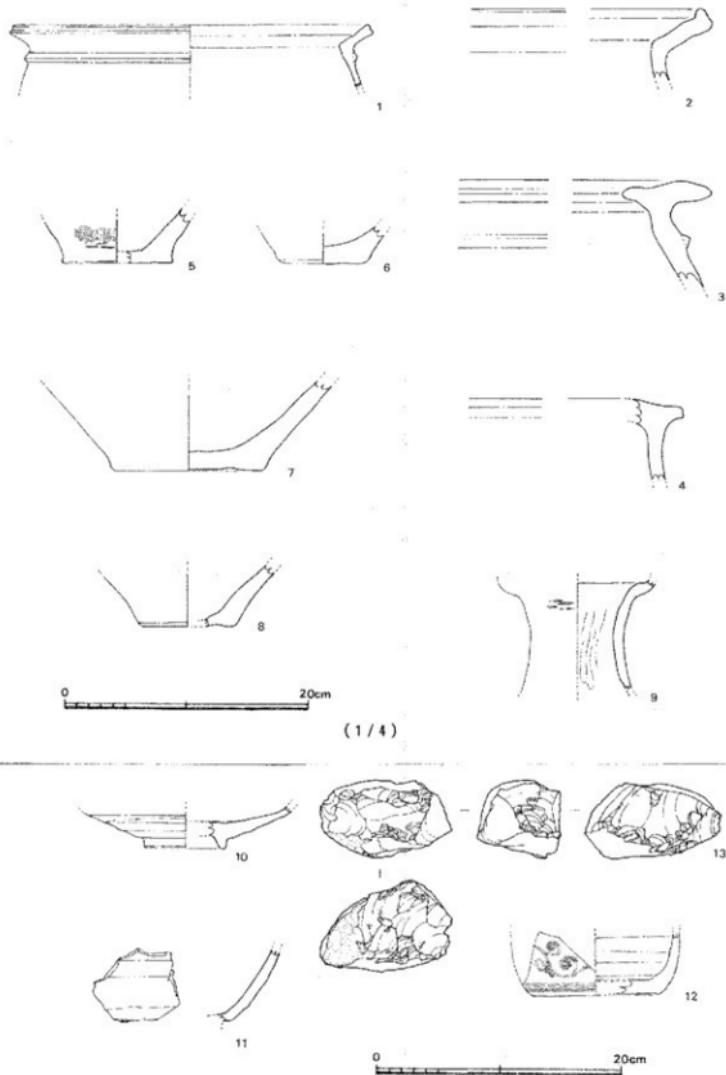
11区と12区で検出した溝で、北西方向に走る。幅8m、深さ約0.4mの断面U字形を呈する溝である。溝と言うより、旧幡鉢川に関連する河道のようなものと思われる。第2層から弥生土器の底部が1点出土したが、遺構には関連が無い。其盤整備よりは早い時期と思われるが、さほど古いものではなさそうである。

・ 5号溝

B区中央で検出した。幅約4m、深さ0.6mを計り、ほぼ北東に走る。断面U字形を呈し、4号溝に類するものと思われるが、この調査では確認まで至らなかった。

・ 1号石組遺構

7区と8区の境部分で検出した。幅はトレンチ東側で4m、西側で2mを計る。北側の面はほぼ直線に0.3m～0.5mくらいの割石を並べ、1～2段積みにしている。長さが3m余りある。南側の石組



(芦高第5図) 出土遺物実測図 (1/3, 13, 1/2)

面は、西端から0.8mの所で南側に約50°程度曲げて、大きさ0.3m～0.8mの野面石を1段に並べている。両方とも石組の裏裏石は少なかった。また北側石組の中間に暗渠口が見られた。根石を0.2mくらい開けて並べ、その上に石を掛け渡した簡単なものであった。南側石組とほぼ平行に東側に伸びる。石組の内側から磁器片、下駄、大型の凹石が出土した。

・ 2号石組遺構

8区の北西隅と9区の南東隅で検出した。幅約2m、長さ約11m、北北東に走る。石列は雑然しているが、恐らく一列に並んでいたものが壊れたものと思われる。石列の側には不等間隔の杭列があった。ここでは石列と直行する格好で暗渠を敷設している。

(3) 遺 物

弥生土器と中・近世の陶磁器等が79点出土した。そのうち弥生土器47点、輸入陶磁器5点、国産磁器8点、陶器14点、土師質土器3点、瓦、凹石、石核、下駄などであった。

1～9は弥生土器である。1・2は「く」字形に屈曲する口縁を持ち、内端部を上方につまみ上げたいわゆる跳ね上げ口縁甕である。1は口縁下に三角凸帯を有する。3は甕口縁である。小さい三角凸帯を有する。4は甕棺の口縁部である。口縁部が内外に突出し、口縁上面が外傾する。橋口甕棺分類のK-II b～cに相当するとと思われる。5は甕の底部である。内面は全体が煤け、外面は底部直上まで縱方向の刷毛目を施す。須玖II式の段階である。6は後期の底部である。平底で底部の立上りが直線的なラインを描き、底部の直上に小さい凹みが見られる。7は大型の甕の底部である。底径12cmと大きく、底部にリング状の凹みを持つ。8・9は丹焼土器である。8は壺の底部である。上げ底ぎみに窪むが中央部に撻みが見られる。器壁は外湾ぎみに緩く立上る。9は袋状口縁甕の頸部である。内側に絞りが数状見られ、外側は縱方向の暗紋が微かにうかがえる。頸部の外径はおよそ7.5cmを計る。

10～12は陶磁器である。10は見込みを蛇の目釉剥ぎした、青磁IIIの底部である。四角の高台は外側は垂直に伸び、内側は内斜する。高台脇から高台内にかけて露胎となす。胎上は浅黄橙色で、緻密な焼きが硬い。釉は灰白色もしくは浅黄色を呈する。見込みの釉剥ぎ、高台ぎわの削り出しからろくろの回転方向は反時計回りを想定できる。11は天目茶碗の腹部である。胎土はザンギリした浅黄橙色を呈する。胎土には若干黒粒土を含む。釉は極暗赤褐色に近い褐色の斑点を持つ鉄釉を見込みから高台脇までかけている。また高台脇には釉だまりが出来ている。削りは、時計回りである。12は染付袋物の底部である。胴部にコバルトブルーの唐草を配し、裾には二重線を画す。底はベタ底で、反時計回りの回転で平らに削り注めている。内部の底には、反時計回りの體輪回転が想定される。

14は黒曜石の石核である。67.5gを計る。

(4) 小 結

この調査では、平成5年度の調査に比べると原の辻人の生活の痕跡が乏しかった。出土遺物は弥生時代中期から近世までの土器・陶磁器・木片が、パンコンテナ3箱分出土した。

2区のV字溝のほかは遺構らしいものは無く、3～6区に見られた不整形の窪みは浅く、遺物も中

世の陶磁器片が若干出土したくらいで性格も判然としない。広範囲に調査すれば詳細にできると思われるが、現段階では木の根の跡を想定した。

7～9区で見られた石組遺構は、大部分が野面石を使用していたが、根石には「せり矢」と呼ばれるクサビを打ち込んだ跡が見られたことから新しいものであろう。昭和14、15年頃にこの付近の区画整理が行われているので、それより以前の畔道的遺構であろう。

2区のV字溝は、町道国分深江線の南側で平成5年度の緊急調査で確認された、6号溝（1区-T5-33区）に酷似した断面を呈していた。方向がやや北に振れるが、現時点では6号溝の延長と考える。また10号溝（V区-U9-28区）もV字型を呈しており、これらの溝が連続しているか否かは環濠なのか溝などの問題が生じる。近々町道国分深江線の改修工事計画があり、着手時には当然調査対象となる。将来的に調査が実施されれば6号溝との関連が解明できるだろう。

註

- (1) 「芦辺高原地区」『原の辻遺跡』自然科学分析報告書 鎌古環境研究所 1996
- (2) 山下英明『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集 長崎県教育委員会 1995
- (3) 註(2)と同じ

図 版



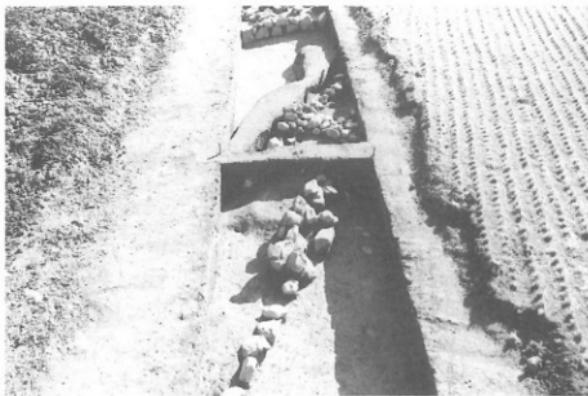
調査区近景



1号溝土層



1号溝完掘状況



2号石組造構



1号石組造構



暗渠檢出狀況
(1号石組內)

4. 原の辻遺跡(平成7年度芦辺高原地区の調査)

4. 原の辻遺跡(平成7年度芦辺高原地区)の調査

(1) 調査概要

調査地区は、奄美郡芦辺町深江鶴亀触字高原に所在する。原の辻遺跡の主体を占める台地の北側先端に位置し、町道区分深江線に沿った標高5~6mほどの水田面である。平成3年度の範囲確認調査によって遺跡の拡がりがとらえられていたために、関係機関との協議の結果、当地区の緊急調査が実施されることになった。今回の調査は、平成7年度の圃場整備事業によって排水路工事にかかる部分について、発掘調査を平成7年6月2日~8月11日に実施したものである。調査区は、I区~V区に分け、I区(82m²)については芦辺町教育委員会が主体となり、II区~V区(330m²)については長崎県教育委員会が主体となって、併せて412m²の発掘調査を行った。調査の結果、弥生時代~古墳時代初期にかけての水路関係の溝や濠跡、沼状の落ち込みなどが検出された。

(2) 遺構

調査区は、県道勝本石田線側を基点として、町道に沿って東側にI~V区に分けて設定した。I区からII区にかけては、後世の削平が行われて地山に耕作土と床土層がのっている。I区では、南北方



(芦高第1図) 平成7年度芦辺高原地区調査区図 (1/2,000)

向の自然流路が検出された（1号溝）。1号溝は、幅1.7m、深さ50cmを測る。土器507片、砥石1点、磨石4点の遺物が出土し、時期的には弥生時代中期から古墳時代の布留式までを含む。II区の東端には南北方向の幅狭の溝が検出された（2号溝）。2号溝は、幅80cm、深さ40cmを測る。溝の西側には50cm～90cmほどの狭い通路状の空間があり、さらに西側は削平を受けているが40cmほどの段がつく。土器280片、磨石5点が出土し、弥生時代中期～後期末までの遺物を包含する。2号溝は水田関係の水路であろうか。III区では、東西17mにわたって深さ約50cmの厚さに泥炭質上層（5層）が堆積しており、弥生時代中期～古墳時代初頭までの遺物が出土した（沼状落ち込み）。沼状落ち込みからは、土器706片、磨石13点、石鎌1点、方柱状抉入石斧1点、マイクロコア1点、石核1点が出土した。IV区では、南北方向に2条の溝が検出された。西側から3号溝、4号溝とする。3号溝は、幅1.2m、深さ35cmを測り、弥生時代後期後半の土器が8片出土している。4号溝は、幅1.9m、深さ50cmを測り、布留式と思われる甕などが69片出土している。両者は水路関係の溝であろう。なおIII・IV区の4層までは、中世までの遺物を含んでいる。V区では、南北方向に幅2.7m、深さ1mの溝が検出された（5号溝）。断面形は底が丸い台形状をなすが、他の溝に比べて幅広であるため甕の可能性をもっている。中からは弥生土器小片が14片出土したに過ぎない。

（3）遺物

当地区の調査では、弥生時代～古墳時代初頭を主体とするコンテナ20箱分の遺物が出土した。ここでは、遺構出土品とその他の遺物についてとりあげたい。

①弥生時代～古墳時代の土器（芦高第3・4図）

●1号溝出土土器（1～12）

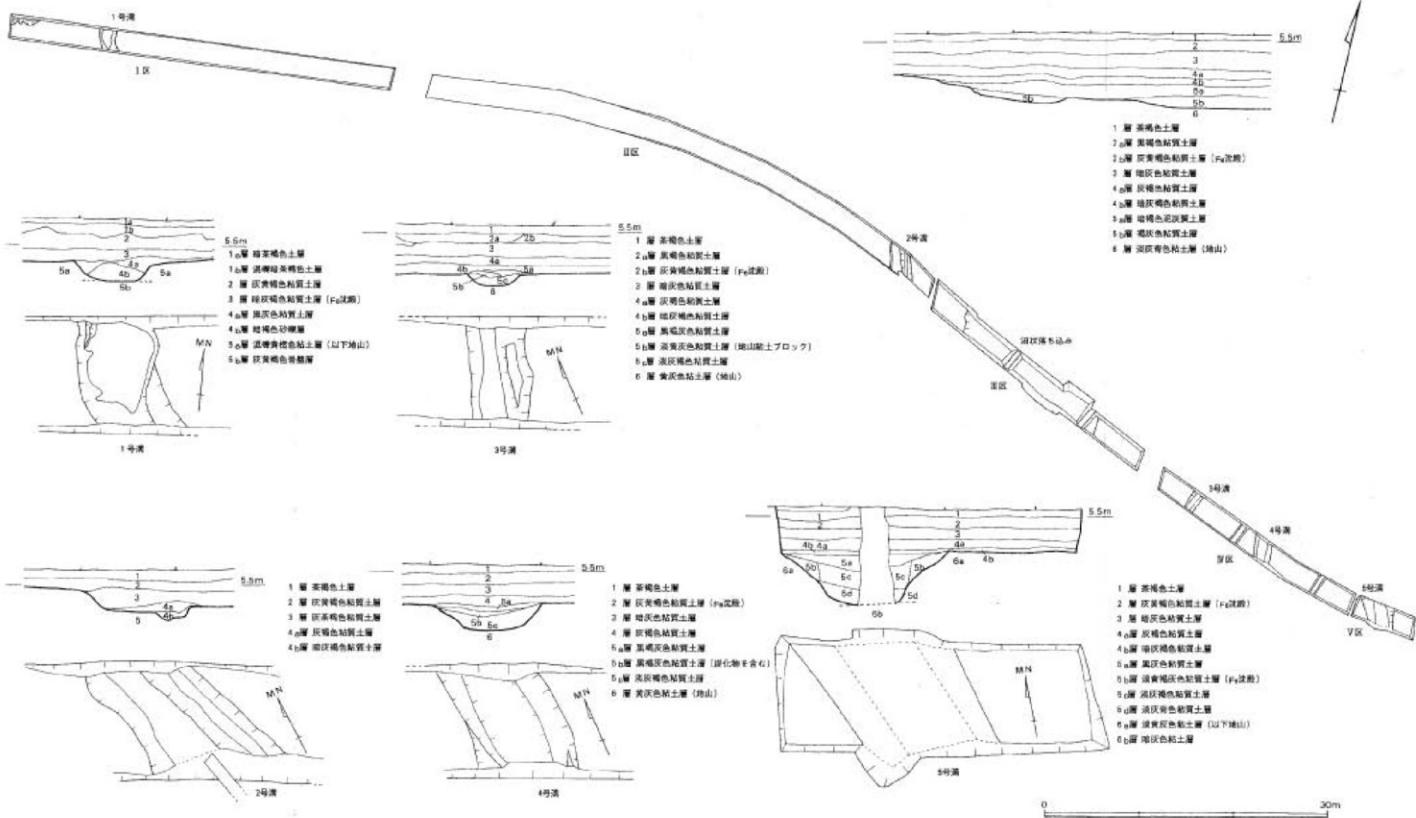
1・2は弥生時代中期の須歎I式の甕である。胎土に金雲母を含んでいる。3は弥生後期の甕小片で、胎土に金雲母を含んでいる。4～6は布留式甕小片で、胎土に金雲母を含んでいる。7・8は壺で、7は弥生後期の広口壺、8は山陰系の二重口縁壺である。胎土に金雲母を含む。9は、3箇所の円孔をもつ高杯脚部で、弥生終末から古墳時代初頭にかけての資料であろう。10・11は壺底部で、10は須歎I式、11は須歎II式の壺であろう。11は胎土に金雲母を含む。12は壺底部で、弥生中期の資料であろう。

●2号溝出土土器（13～18）

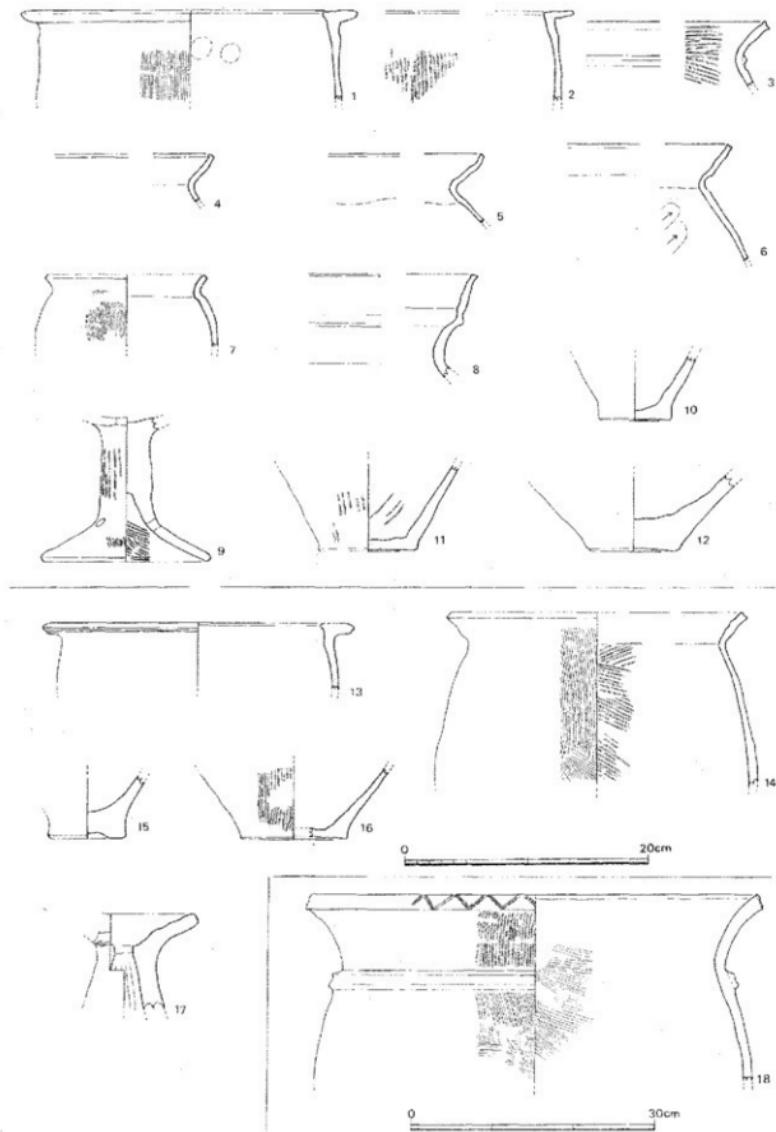
13は弥生中期甕、14は弥生後期末頃の甕である。胎土に金雲母を含んでいる。15は須歎I式壺底、16は須歎II式の壺底であろう。16は胎土に金雲母を含んでいる。17は器台で、後期後半～古墳時代初期頃の資料であろう。胎土に僅かに金雲母を含む。18は西新式の甕唇破片で、口唇部には櫛状施文具で山形の刻みを付けている。胎土に金雲母を含む。

●沼状落ち込み出土の土器（19～31）

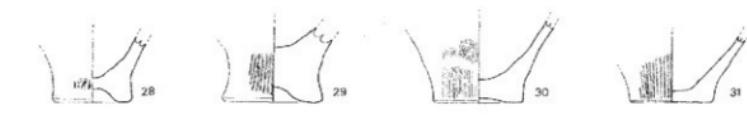
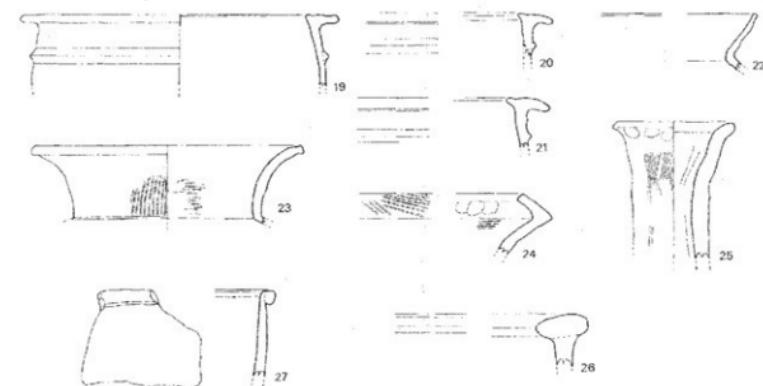
19～21は中期甕で、19が須歎I式、20・21が須歎II式の資料である。19・20は胎土に金雲母を含んでいる。22は布留式甕小片で、胎土に金雲母を含んでいる。23・24は弥生後期の壺で、23は単口縁の広口壺、24は複合口縁壺である。23は胎土に金雲母を含む。25は器台で、筒状をなし弥生中期の資料



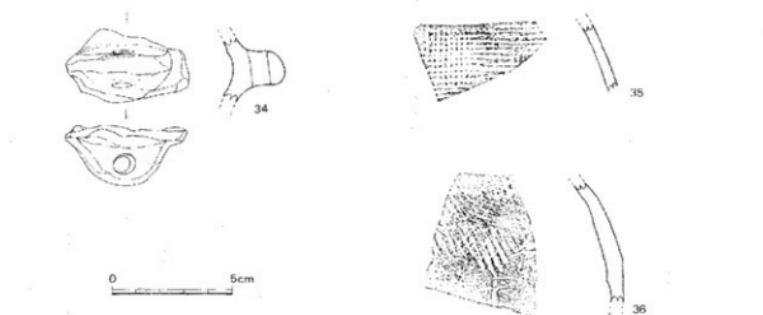
(芦高第2图) 造構配置図 (1/400) および造構実測図 (1/80)



(芦高第3図) 1号溝(1~11), 2号溝(12~18)出土土器(1/4・1/6)



0 20cm



0 5cm

(芦高第4図) 沼状落ち込み (19~31), その他出土土器 (1/4・1/2)

であろうか。胎土に金雲母を含む。26は甕棺の口縁部小片である。金海式段階の資料であろう。27は朝鮮系無文上器甕片である。外面は平滑に仕上げられ、内面には指整形される。紺状口縁の左端に指オサエの痕跡が認められる。胎土に金雲母を含んでいる。28~31は甕底部片である。28・29は城ノ越式~須玖I式、30が須玖I式、31が須玖I式~須玖II式の資料である。29~31は胎土に金雲母を含んでいる。

●その他の土器 (33~36)

32は甕棺の口縁部小片である。口縁は外側には突出が少なく、内側へ大きく張り出すところから橋口達也氏の編年のK II b式~K II c式の甕棺に相当すると思われる。胎土に金雲母を含んでいる。I区の排土から採集。33は山陰系の鼓形器台である。台部内面はケズリが施されている。灰白色の色調で、胎土に石英を多く含み、僅かに金雲母・角閃石など含んでいる。焼成は良好で、しっかりしたつくりである。III区4層出土。34~36は朝鮮半島からもたらされた土器である。34は、瓦實土器壺の耳で、淡灰色を呈し、内面は指整形されている。胎土に石英・雲母を含む。III区4層出土。35は楽浪系



(芦高第5図) 出土石器① (2/3)

の瓦質土器小片である。外側は細かい繩彫文の叩きが施され、内側には平行条線状の当具痕が認められる。淡灰色を呈し、薄手のつくりである。I区2層出土。36は陶質土器の腹部小片である。外面は繩彫文の叩きを部分的にナデ消している。III区4層出土。

以上の土器をみると、特に注目されるのは遺構出土の弥生時代中期～古墳時代初頭の土器に金雲母を含むものが75～83%あることで、この遺跡では土器そのものが交易品として持ち込まれていたことが推察される。また、成人用の墓棺片が3点出土していて、この地点南側に位置する高元地区の台地部分に墓棺等の墓地が存在することを示唆しているようである。

②石 器（芦高第6～10回）

今回の調査において、241点の石器が出土している。黒曜石製の石器類は、細石核1点、石核5点、剝片46点の計49点である。工具類は、始刃石斧2点、撥形の磨製石斧1点、方柱状抉入石斧1点、砥石30点がみられる。収穫具は、石鎌が7点あるが、石庖丁は出土していない。調理具は、磨石・凹石・敲石が132点あり、石臼が2点みられる。武器は、石劍が1点出土している。石器の未製品は、石鎌未製品が4点あり、粘板者と頁岩削片がそれぞれ1点みられる。漁労あるいは船に関するものとして、切目石鍬1点、碇石1点がある。以上の石器構成において、調理具の磨石・凹石・敲石類が最も多く54.8%を占めて、またそのセットとして石臼がみられることである。この場所あるいは付近で、これらの石器を多用する作業を行っていたことが推測される。

●細石核（1）

1は黒曜石製の細石核で、船底形の形状をなす。側縁部は調整加工されるが、一部自然面を残す。打面部は一側縁から細かい調整を加えている。いわゆる福井型細石核である。III区の沼状落ち込み出土。

●石核（2・3）

2・3は黒曜石製の石核である。2は小形で灰黒色の黒曜石を素材とし、2面に剥離面を形成しているが、他は自然面が残っている。細石核のプランクの可能性をもつ。III区の沼状落ち込み出土。3は漆黒色の円錐を素材として、片面が不定方向に剥離されているが、裏面は自然面のままである。II区2層出土。

●石劍（4）

4は頁岩製の石劍片で、上・下部とともに欠失する中程の破片である。III区2層出土。

●石鎌・石鎌未製品（5～9）

5～7は、頁岩製の石鎌である。5・6は先端あるいは中程の、7は基部付近の破片である。5は上端に小さな孔の痕跡が認められ、あるいは石庖丁を後に転用したものかもしれない。5・6はIII区沼状落ち込み、7はIII区4層出土。8・9は頁岩製の石鎌未製品である。8は粗削、9は側縁を調整加工している。両者ともに研磨まで至らずに廃棄されたものであろうか。III区4層出土。

●磨製石斧類（10～13）

10・11は、始刃石斧である。10は、基部を欠失し、刃部も欠損しているが、ぶ厚いつくりで手取り



(芦高第5图)出土石器②(1/3)

も重く1,180gを測る。玄武岩製であろう。11は、基部と刃部ともに欠失する蛤刃石斧で、10に比べると厚みに乏しい。頁岩製を素材としている。12は楔形の片刃石斧で、刃部は潰れている。素材は蛇紋岩と思われ、繩文系の石斧と考えられる。重量80gを測る。10~12は、III区4層出土。13は、方柱状抉入石斧の刃部付近の破片である。粘板岩製で、一方の側面も欠損している。III区沼状落ち込み出土。

●砥石 (14~19)

14~19は、砥石である。14と15は小形品で、据えつけて使用するものでなく、手持ちで刃を研ぐのに用いられるものであろう。14は粘板岩製、15は砂岩製である。両者ともに、III区4層出土。16~19は、砂岩製の中砥・荒砥である。16がI区3層出土の他は、III区4層から出土している。

●磨石・凹石・敲石類 (20~35)

20は、側縁に粗い刃部が施されていて、もともとは磨石・凹石であったものを転用している。硬質の砂岩であろうか。330gを測る。21~26は磨石を主体とするもので、21が両面使う他は片面を磨面として使用している。さらに、24・26・27は片面に、28は両面に凹面が認められる。24・26は、側面・端部を敲石として用いている。29~33は、主に凹石として使用されたもので、いずれも側面や端部は敲石として用いられている。31は、長めの楕円形の形状をもつ。34は、丸い棒状の磨石で、片面だけが使用され、磨棒状の形態をなすものであろうか。35は、石杵状の形態をもつ磨石である。下面中央部は少しくぼんでいる。以上の製品は、22・30・31が安山岩円錐を素材として用いている他は硬質の玄武岩を使用しているようである。27・32・34は1号溝、22・25・26・28・33は2号溝、23は沼状落ち込み、21・24・29・30はI区3層、31はIII区4層から出土している。重量は、21が180g、22が430g、23が1,065g、24が1,050g、25が694g、26が1,050g、27が1,100g、28が1,020g、29が435g、30が750g、31が900g、32が840g、33が430g、34が1,100g、35が1,630gを測る。

●石臼 (36・37)

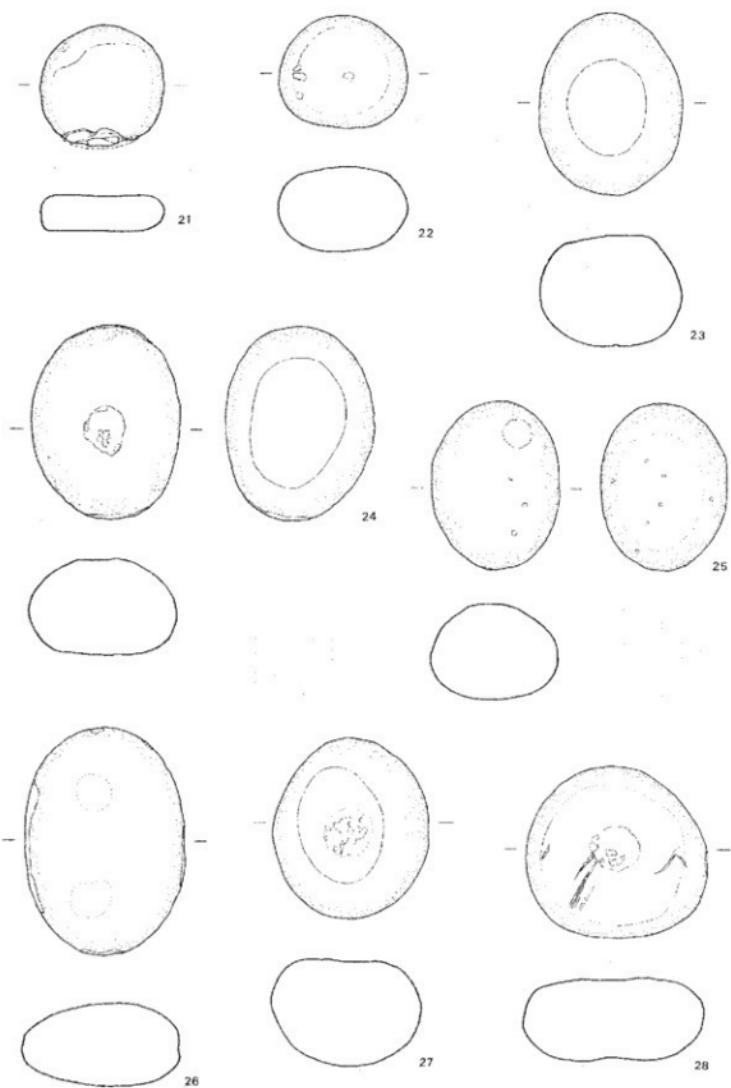
36・37は玄武岩を用いた石臼である。36は片面に、37は両面に凹面を持っている。重量は、ほぼ完品の36が6.82kg、半分ほどを欠失する37が5kgを測る。36はI区3層、37はII区3層出土。

●石鍤・碇石 (38・39)

38は、小形の切目石鍤である。主軸に緊縛のための溝が彫られている。安山岩製で、重さ11gを測る。39は大形の石鍤で、碇石といわれているものである。玄武岩の板状石を用いて、両側縁に簡略な打ち欠きを施しただけの品である。重量7.26kgを測る。1号溝出土。



(芦高第7回) 出土石器③ (1/3)

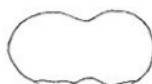


0 10cm

(芦高第8図) 出土石器④ (1 / 3)



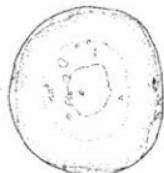
29



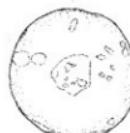
30



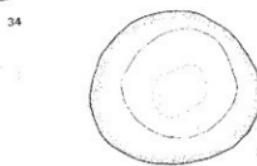
31



32

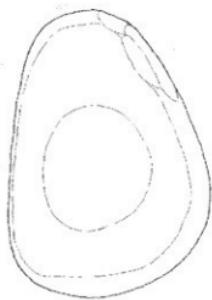


33

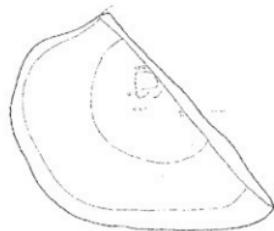


35

(芦高第9図)出土石器⑤(1/3)



36



37



38
0 5cm



39

0 20cm

(芦高第10図) 出土石器⑤ (1/4・1/2)

(4) 小 結

今回の調査では、弥生時代中期～古墳時代初頭にかけての時期の濠1条、水路3条、自然流路1条と沼状の落ち込みが確認された。当地点は、現水田面の低地に立地しているために居住関係の遺構は検出されず、溝や沼などが発見されたと思われ、細い水路は水田に関係するものであろう。濠と推測される5号溝は南北方向を向き、平成5年度調査の6号溝とつながる可能性が考えられる。出土した遺物は、生活にかかわる品物で台地上から流れ込んだものが多いが、北部九州系の壇棺片が3点出土していて、台地北端に存在するといわれている高亢地区の弥生時代の墳墓域に関係する資料と考えられる。出土した弥生土器や古式土器では、金雲母を胎土に含むものが75～83%を占めていることが指摘される。島内の岩石構成からみると金雲母が粘土に混入することはほとんどないと考えられるので、島外から持ちこまれたことが推測される。土器も交易対象の一品目であったのだろう。米・食糧ばかりでなく、「土器賣い」も行っていたことがうかがわれる。出土した石器では、切目石錐1点や礫石1点など漁労・船舡関係の道具があつて興味深いが、石器構成において最も多いのは磨石・凹石・敲石類と石臼の調理具である。調理具は、56.9%を占めていて、付近でこれらの石器を多用する作業が盛んに行われていたことが考えられる。低地という立地を考慮にいれると、原の辻遺跡ではまだ発見されていないが付近にドングリピットが存在した可能性を示唆しているようにも思える。今後の調査に期待したい。

註(1) 橋口達也「考察Ⅱ『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅩⅠ』福岡県教育委員会 1979(2) 岛和明・山下英明編『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第121集 長崎県教育委員会 1995

追記

なお、I区3層から鉄鉋石が出土している。長さ8cm、幅5cmの亜角砾で、重量1.1kgを測る。弥生時代の遺構や遺物包含層から出土したものではないが、追記しておく。

図 版



調査地区遠景
(北から)



調査風景



1号溝造物出土状況
(1区)



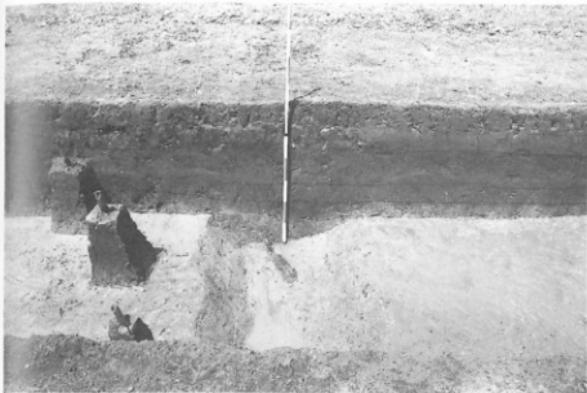
2号満遺物出土状況
(II区)



沼状落ち込み遺物
出土状況 (III区)



同上



3号沟(IV区)



4号沟(IV区)



5号沟(V区)

5. 安国寺前 A 遺跡の調査

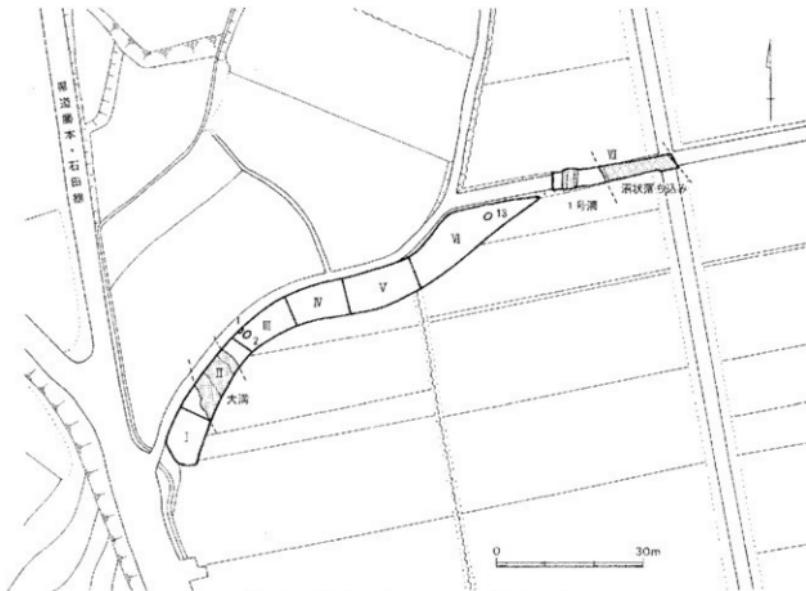
5. 安国寺前A遺跡の調査

(1) 調査概要

本遺跡は、宅蚊郡芦辺町深江鶴龜触字園線に所在する。県指定史跡安国寺の南方に位置し、幡鉢川北側の標高7~8mほどの水田面に立地する。平成4年度の範囲確認調査で中世の遺構と遺物包含層が確認されており、今回の調査は平成7年度の圃場整備事業によって本遺跡が農道と排水路建設工事にかかるために、発掘調査を平成7年11月7日~2月8日まで実施したものである。調査対象地は農道と水田面で、当初I~VI区の調査区に分けて調査を行ったが、隣接地において道路工事中に遺物と遺構が発見されたので、この箇所についてもVII区として併せて合計774m²の発掘調査を行った。そのうち、I・II区(155m²)は芦辺町教育委員会が、III~VII区(619m²)は県教育委員会が調査を担当した。調査の結果、弥生時代と古墳時代の遺構と遺物、古代~中世の遺物などが発見された。

(2) 遺構

調査区は、農道に沿って設けられたために湾曲している。遺構の実測や測量の基準線は、真北を用いた任意座標を基礎としたが、ここでは上層を観察するために残したベルトを境界としてI~VI区と新たに追加したVII区のI~VII区の調査区で記述を行う。



(安A第1図) 安国寺前A調査区図 (1/1,000)

弥生時代～古墳時代の遺構は、II区に旧河道の大溝、III区に1号・2号土壙、VI区に13号土壙、VII区に1号溝と沼状落ち込み、II区からVI区にかけてピット群が検出された。古代～中世の遺構は、水田を中心とした水路と掘削される溝状遺構がIV区とV区で検出された。ここでは、弥生時代～古墳時代関係の主要な遺構について述べたい。

●大溝（安A第3図）

II区中央に検出された大溝で、北から南側への流路をもつ旧河道と考えられる。北壁でみると、幅約12m、深さ1.4mを測る。溝底土は、5層が風化質の粘質土層、6層が砂・砂疊層で川底は岩盤になっている。5～6層からは、弥生中期初頭～中期後半の土器（3,427点）に共伴して104点の石器類が出土した。

●沼状落ち込み（安A第3図）

VII区東側に検出された遺構である。北壁で幅15m、深さ1mを測る浅い窪地状の落ち込みである。4層は黒泥質系の粘質土で、5層は黒褐色の砂質土層である。4層は、古墳時代前期布留式の良好な一括遺物を含み、5層からは、弥生中期の遺物がまとまって出土した。旧河道が移って沼状の低湿地になったものと考えられる。弥生中期の土器に関連する遺物である石器類が98点出土している。

●VII区1号溝（安A第3図）

VII区西側に検出された狭い溝である。北壁で幅約2.5m、深さ80cmを測る。溝上は、沼状落ち込みの4層に類似しており、土師器を中心とした土器が158点出土しているところから、古墳時代の水路関係の溝と推測される。

●III区1号土壙（安A第3図）

長楕円形の形状をもつ土壙で、長さ1.65m、幅75cm、深さ20cmを測る。主軸は磁北から45°東に振れている。内から弥生土器が58点出土していて、弥生中期後半の甕と炭化物が上部に浮いた状況で出土した。

●III区2号土壙（安A第3図）

平面形が長さ2.1m、幅1.7mのいびつな円形をなす、深さ65cmの浅い竪穴状の土壙である。内から弥生中期後半の土器は472点、石器類は凹石1点・砥石1点・石鏃1点・黒曜石剝片7点・粘質岩剝片1点の13点出土した。性格的には、生活遺物等を廃棄した土壙であろうか。

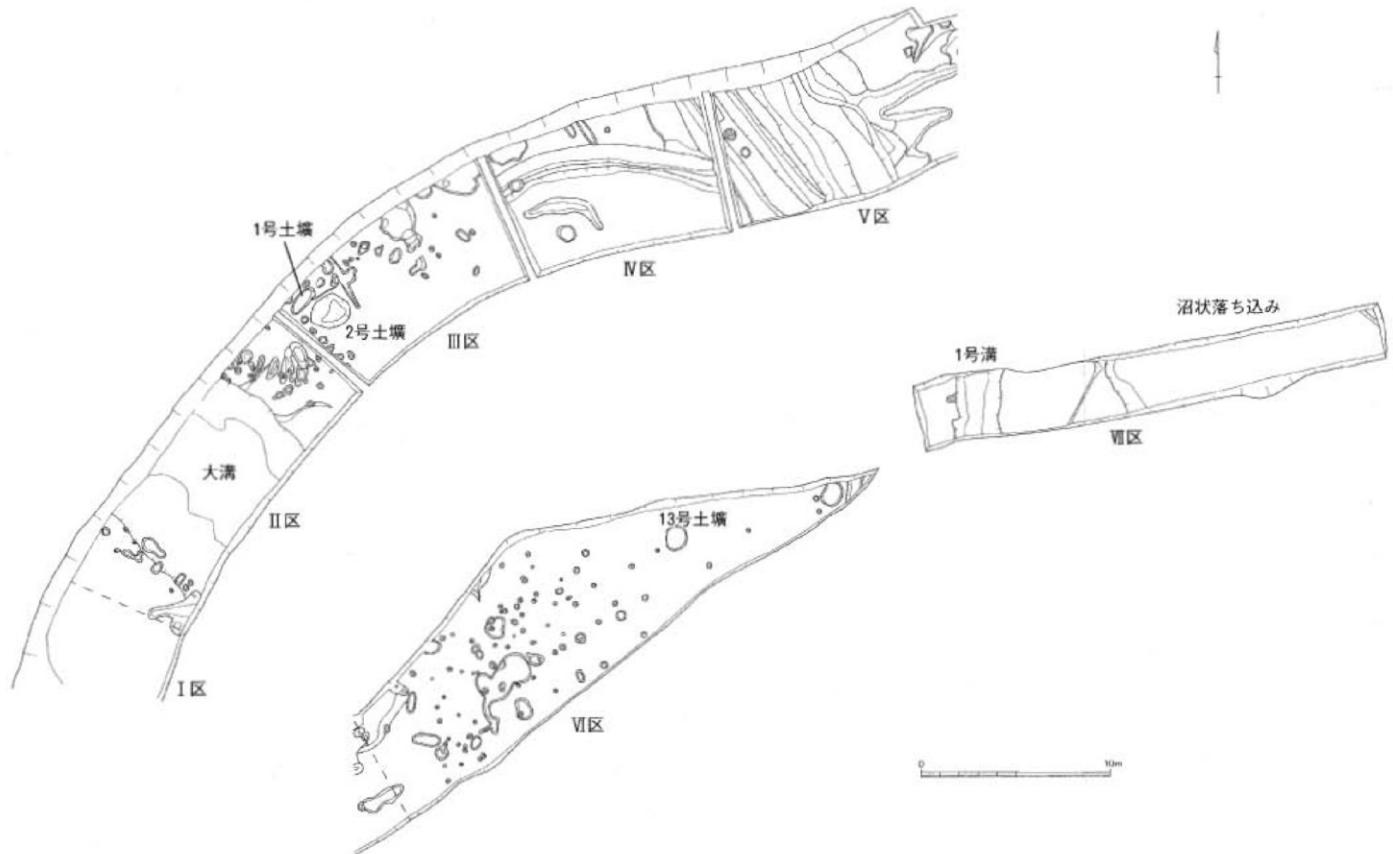
●VI区13号土壙（安A第3図）

南北方向に主軸をもつ楕円形の浅い土壙である。長さ1.33m、幅1.07m、深さ10cmを測る。内から弥生土器2点と蛤刃石斧片1点と粘質岩剝片241点が出土している。磨製石器製作にかかる剝片・チップが多數出土しているところから性格的には、石器製作工房関係の廃棄土壙と考えられる。

(3) 遺 物

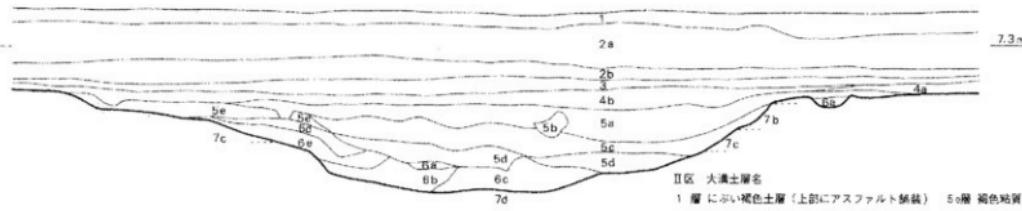
今回の調査では、コンテナ40箱分（約17,000点）ほどの遺物が出土している。土器・陶磁器がもっとも多く約15,900点、石器類が900点余出土し、その他に金属器や瓦などが若干出土している。

①弥生時代～古墳時代の土器



(安 A 第 3 図) 安國寺前 A 造跡造構配置図(1/200)

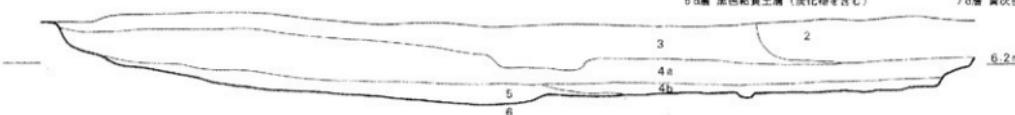
Ⅰ区 大溝北壁



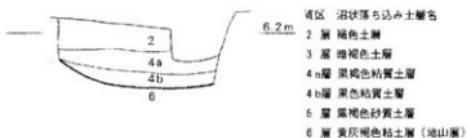
Ⅱ区 大溝土層名

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 1 層 にふい褐色土層（上部にアスファルト舗装） | 5a層 褐色粘質土層 |
| 2 a層 混極灰褐色土層 | 6a層 にふい褐色砂層 |
| 2 b層 にふい褐色土層 | 6b層 にふい褐色砂礫層 |
| 3 層 咖灰褐色土層（Fe沈殿） | 6c層 黒褐色砂礫層 |
| 4 a層 混灰褐色土層（Fe沈殿） | 6d層 咖色土層 |
| 4 b層 咖色土層（硬く固まる） | 6e層 にふい褐色砂質土層 |
| 5 a層 黒褐色土層 | 7a層 黃褐色粘土層（以下地山層） |
| 5 b層 混極灰褐色土層 | 7b層 黃褐色粒混在明灰褐色粘土層 |
| 5 c層 混褐色土層（黄褐色粒を含み、わりと堅まる） | 7c層 混褐色明褐色粘土層 |
| 5 d層 黑褐色粘土層（炭化物を含む） | 7d層 黄灰色岩盤層 |

Ⅲ区 沼状落ち込み北壁



Ⅳ区 沼状落ち込み東壁



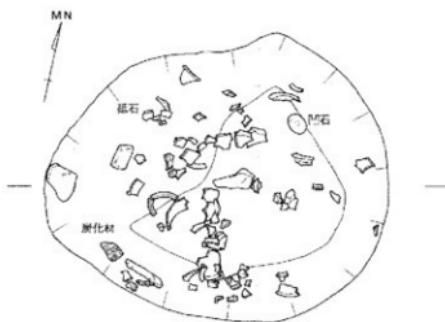
Ⅴ区 1号溝北壁



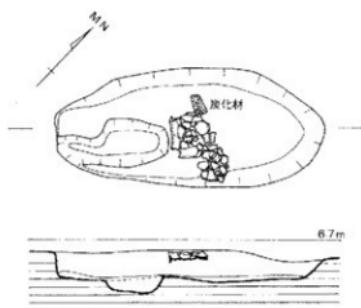
Ⅵ区 1号溝土層名

- | |
|------------------|
| 2 層 咖色土層 |
| 3 層 混褐色土層 |
| 4 a層 咖褐色粘土層 |
| 4 b層 黑褐色粘質土層 |
| 6 層 黃褐色砂質土層（地山層） |

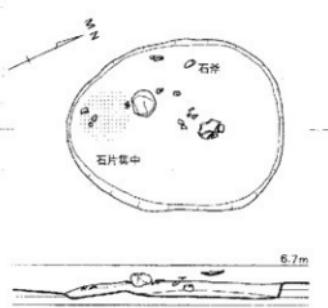
(安A第2図) 安国寺前A遺跡土層図 (1/80)



Ⅱ区 2号土壤



Ⅱ区 1号土壤



Ⅱ区 13号土壤

0 1.5m

(安A第4図) 安国寺前A遺跡土壌実測図 (1/30)

●大溝出土の土器（安A第5・6図）

1～18は、弥生前期～中期の壺口辺部片である。1は、前期末～中期初頭の如意形口縁壺で6層出土。胎土に金雲母を含んでいる。2は、断面三角形口縁の城ノ越式壺で6層出土。3～10、12～16・18は須玖I式壺、11・17は須玖II式壺であろう。7～10・13・18は5層出土。他は6層出土。1～6・9・10、13～15、17・18は胎土に金雲母を含み、搬入品の可能性が高い。

19～22は、弥生中期広口壺の鋤先形口縁部片である。19・20が城ノ越式、21・22が須玖I式であろう。19は5層、21・22は6層、20は6層下部出土。いずれも金雲母を含まない。

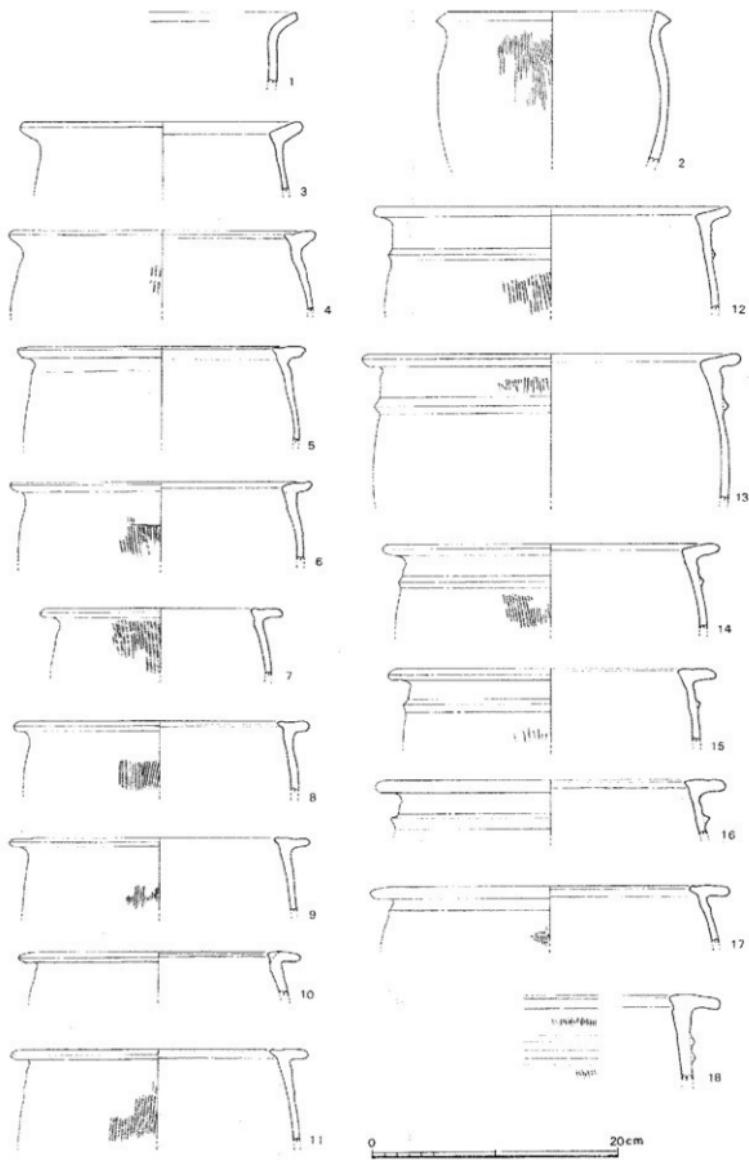
23は、鉢あるいは小形壺であろう。6層出土。24は、弥生中期丹塗鉢で、5層出土。25～27は、壺棺破片で、25は城ノ越式段階、26・27は須玖I式段階に対応するものであろう。27は5層、他は6層出土。28～40は、壺底部片である。28～32は前期末～中期初頭、33～37は須玖I式、38～40は須玖I～II式段階に相当するものであろう。29・40は5層、28・31～33・38は6層、34～37は6層下部から出土している。28・30・33～35・37・38・39は、胎土に金雲母を含んでいる。41～44は、壺底部片である。41は円盤状の底で、古い様相をもつ。前期末であろうか。他は、中期初頭～中期前半段階のものであろう。41は5層、他は6層出土。いずれも金雲母を含まない。45は、貝殻施文の壺胴部片である。多条の重弧文と沈線文が施さる。灰黄色の胎土で、金雲母を含まないが福岡平野以東の搬入品の可能性をもつ。以上の大溝出土の土器は、弥生前中期から須玖II式までを含んでいるが、須玖I式が主体をなす。また金雲母を含んだ土器が、壺を中心に22点あり、49%を占めることが注目される。

●沼状落ち込み5層出土の土器（安A第7図）

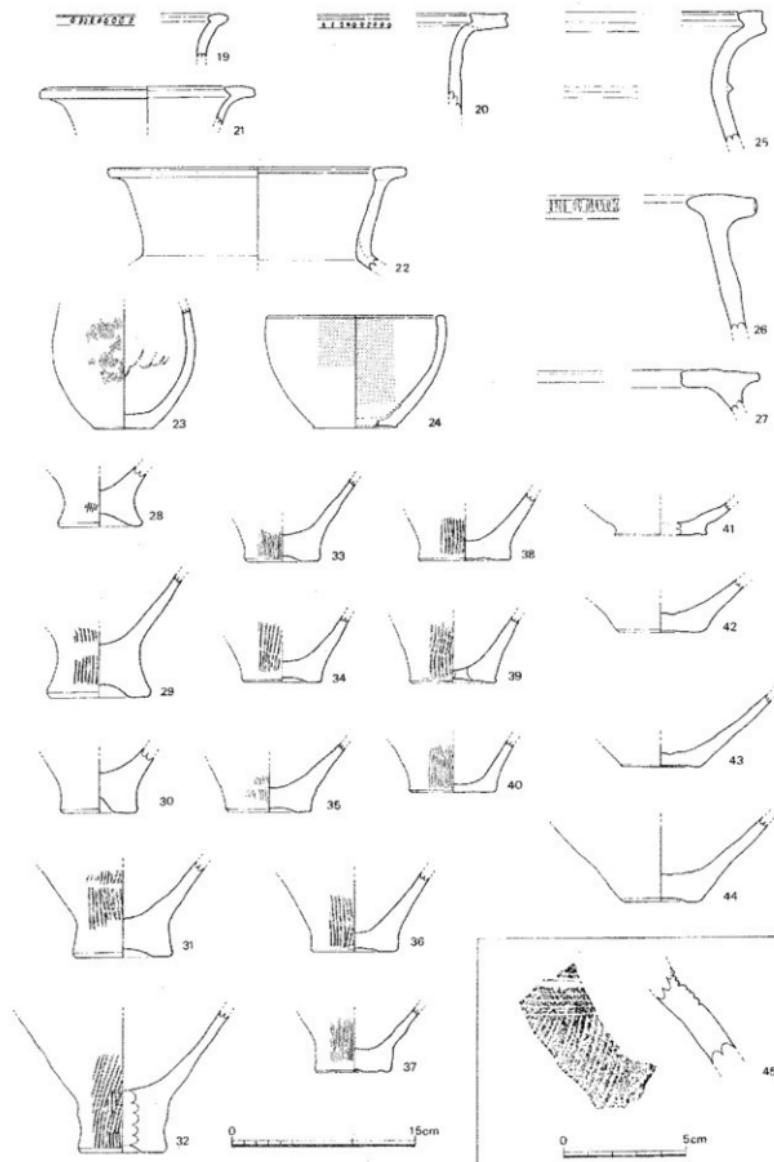
1～11は、弥生中期の壺口辺部片で、1～7・10が須玖I式、8・9・11が須玖II式であろう。2～5、7～9、11は胎土に金雲母を含む。12～14は、12が単口縁、13・14が鋤先形口縁の広口壺である。須玖I式の段階であろう。12にはごく僅かに金雲母を含んでいる。15は蓋で、須玖I式の段階のものか。16は、高杯である。17～21は、壺底部である。17は前期末～城ノ越式、18・19・21は須玖I式、20は須玖I～II式の段階であろう。19～21は、胎土に金雲母を含んでいる。22は、壺底部片である。以上の沼状落ち込み5層出土土器は、前中期から須玖II式までを含んでいるが、主体は須玖I式にあるようだ。金雲母を含むものが壺を中心に12点あり、任意に図化したものの半数以上を占める。

●上塘出土の土器（安A第8図）

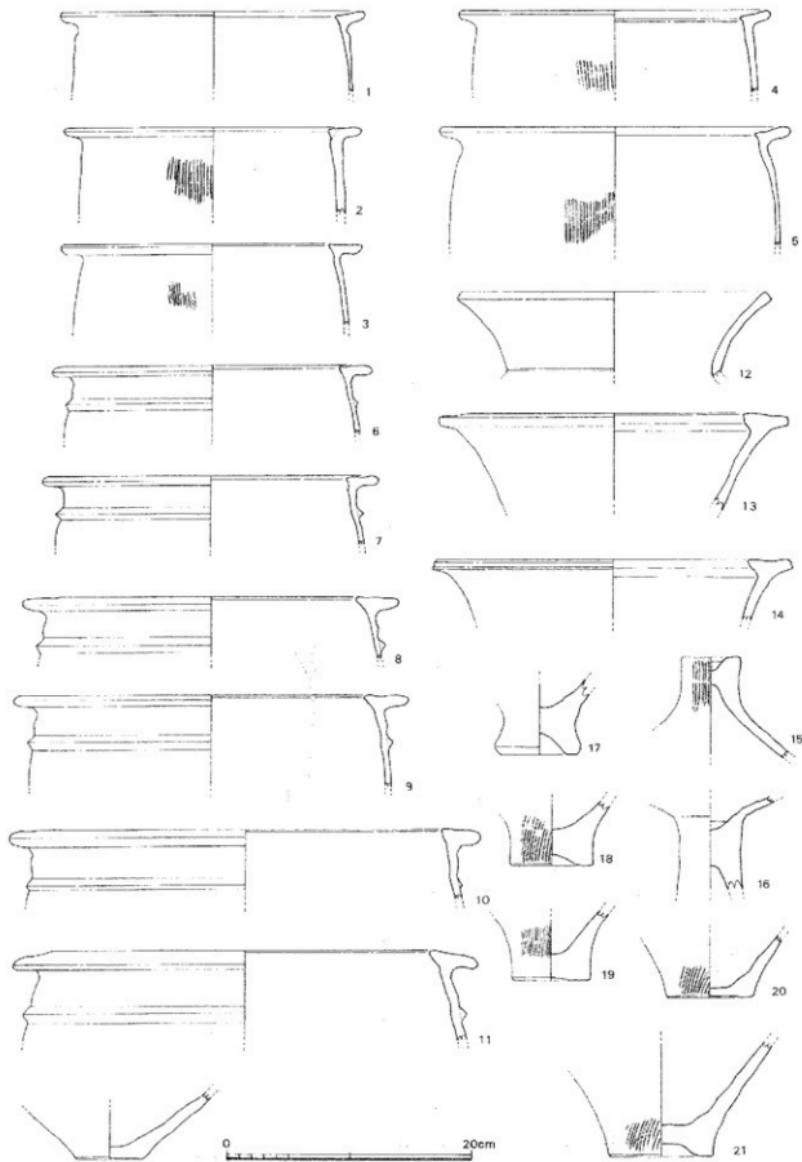
1は、III区1号土壙出土の須玖II式の壺である。2～15は、III区2号土壙出土の土器である。2～10は壺で、2～8は鋤先形口縁の須玖II式壺で、8は大形壺片である。9は、「く」字に屈曲する壺で、中期であれば別系統の資料であろう。10は、福岡平野以東系のはね上げ口縁の壺で、胎土に金雲母を含んでいる。11は鋤先口縁、12は丹塗の広口壺である。13は、鋤先形口縁の高杯である。風化によって丹塗が施されていたかは明瞭でない。14・15は、壺底部である。15は、ごく僅かに金雲母を含む。以上の2号土壙出土土器は、須玖II式段階の良好な資料である。壺の口縁部片38点についてみれば、鋤先形口縁34点、「く」字形屈曲口縁1点、はね上げ口縁3点（同一個体）となり、福岡平野以東系の土器は少數である。また金雲母を含む土器が数少ないことが、大溝および沼状落ち込み5層出土土器



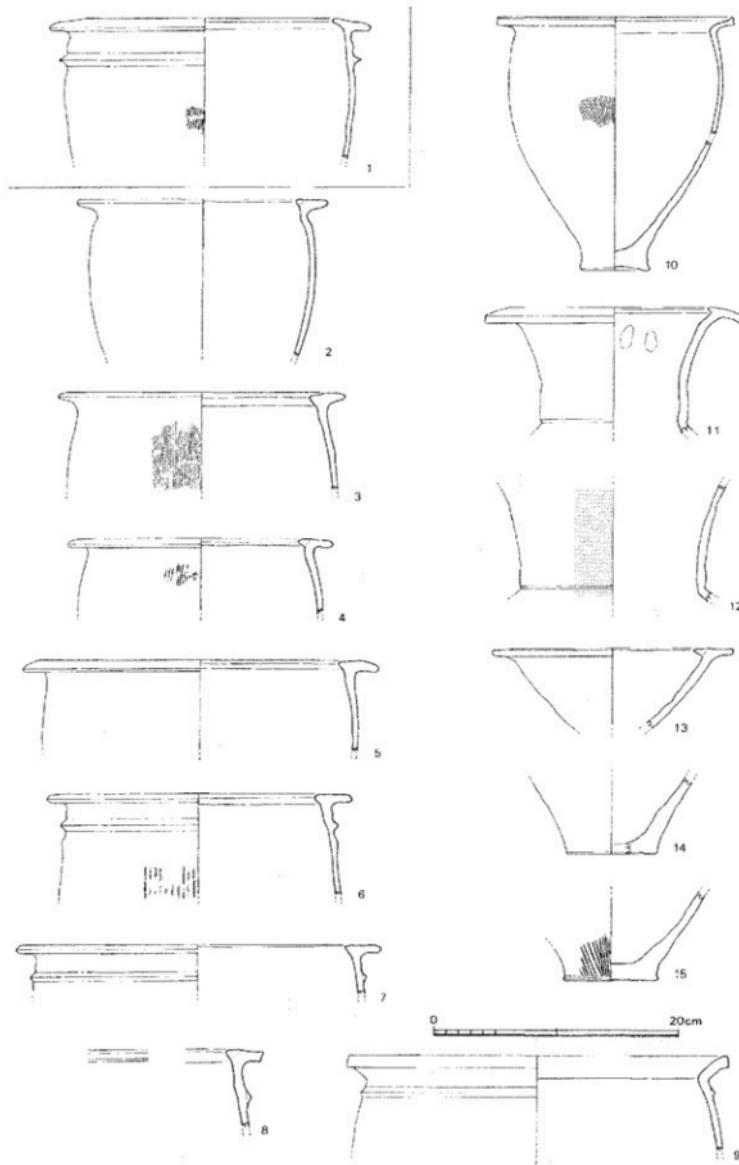
(安A第5図) 大溝出土土器① (1/4)



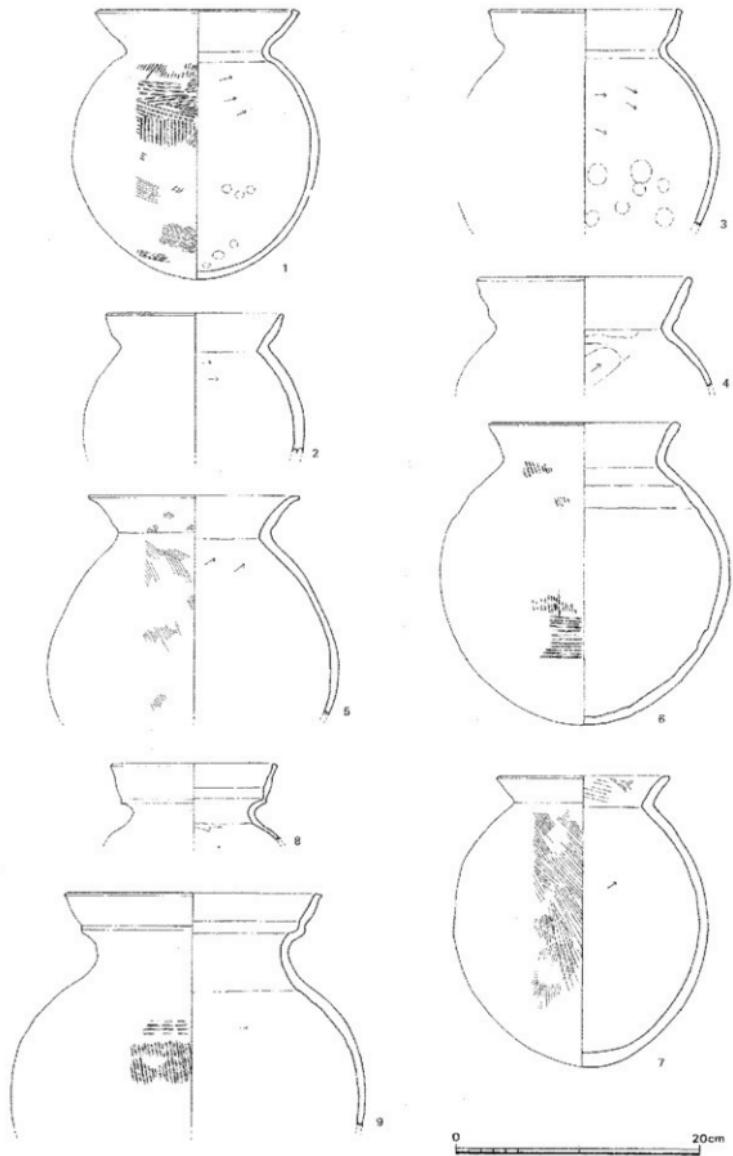
(安A第6図) 大溝出土土器② (1/4・1/2)



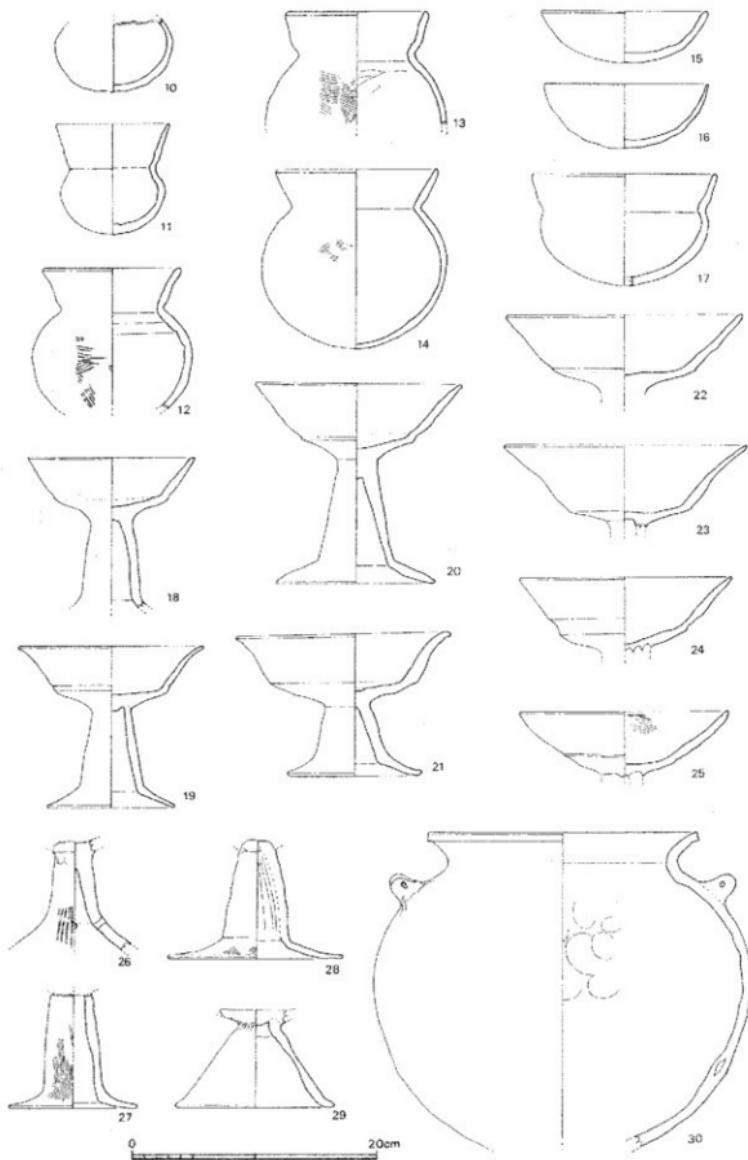
(安A第7図) 沼状落ち込み5層出土土器 (1/4)



(安A第8圖) 土壤出土土器 (1/4)



(安A第9図) 沼状落ち込み4層出土土器① (1/4)



(安A第10図) 沼状落ち込み4層出土土器② (1/4)

と対称的な様相を示している。

●沼状落ち込み4層出土の土器（安A第9・10図）

1～4は壺で、1～3は口縁が内湾ぎみに開き、4は直線的に開く。1は、口縁端部をつまみぎみにおきめている。1・3の内面体下半部には指オサエの痕が認められる。1・3は布留式系の特徴を残している。5～7は、口縁部が外反する広口壺である。やや粗い作りである。8・9は口縫系の二重口縁壺である。8は薄手のしっかりしたつくりで、古い様相をもつてゐる。9は、やや粗い作りでシャープさが欠けていて、8より新しい様相をもつて思われる。10～14は、小形壺である。10・11は、小形丸底壺といわれているものである。11・12・14は口縫部が直線的に開くが、13は口縫部が頸部から内湾して直線的に開く。いずれもあまり丁寧なつくりではない。15～17は鉢である。15・16は皿状の浅鉢で、17は口縫部が頸部でくびれて直線的に開く鉢である。18～29は、屈曲部で段を有し上半部が直線的に開く杯部の高杯であるが、25のように屈曲部の段があり明瞭でないものもある。脚部は、筒部が直線的で裾部が急激に折れるもの（19・20）、筒部がエンタシス状のふくらみをもち裾部が急激に折れるもの（18・21・27・28）、杯部つけねからスカート状に開くもの（29）と、筒部から裾部はゆるやかに開き円孔を有するもの（26）がある。26は、古い様相をもつ。30は、耳をもつ陶質土器である。外面は平滑にナデ仕上げられ、内面には丸い叩きの當て具痕が着いている。以上の沼状落ち込み4層の土器は、柳田康雄氏の編年⁽¹⁾によれば、土師器IIc式段階に相当し、4世紀中頃の年代が与えられる。

●朝鮮系無文土器（安A第11図）

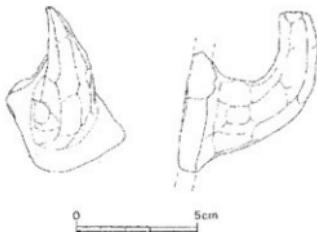
無文土器壺の牛角状把手部分の破片である。手すくねであるがわりと丁寧につくられている。黒褐色を呈し、胎土に石英砂など含んでいる。焼成は良好である。VI区南側付近での採集品である。

②古代・中世の上器・陶磁器（安A第12図）

●国產土器・陶器（1～6）

1・2は須恵器で、1は杯蓋、2は小形高台付杯である。1は9世紀前半代、8世紀前半～中頃の資料であろう。1はII区4層出土。2はV区4層下部出土。3は、縄彌陶器皿小片である。高台は割り出しと思われ、胎土は淡灰色を呈し、淡い緑色の釉が高台疊付まで掛かっている。IV区4層出土。4は、古瀬戸瓶口縫部片である。灰緑色の灰釉が掛かっている。V区4層下部出土。5は、備前掘鉢口辺部片で、荻野繁春氏編年⁽²⁾のIX期（15世紀中～後葉）に該当する。IV区3層出土。6は、糸切り底の土師質杯である。口径15.5cm、器高3.4cm、底径10.8cmを測る。山本信夫氏の編年観⁽³⁾によれば、I期（12世紀中頃）の年代が与えられる。VII区4層上部出土。

●中国製陶磁器（7～12）



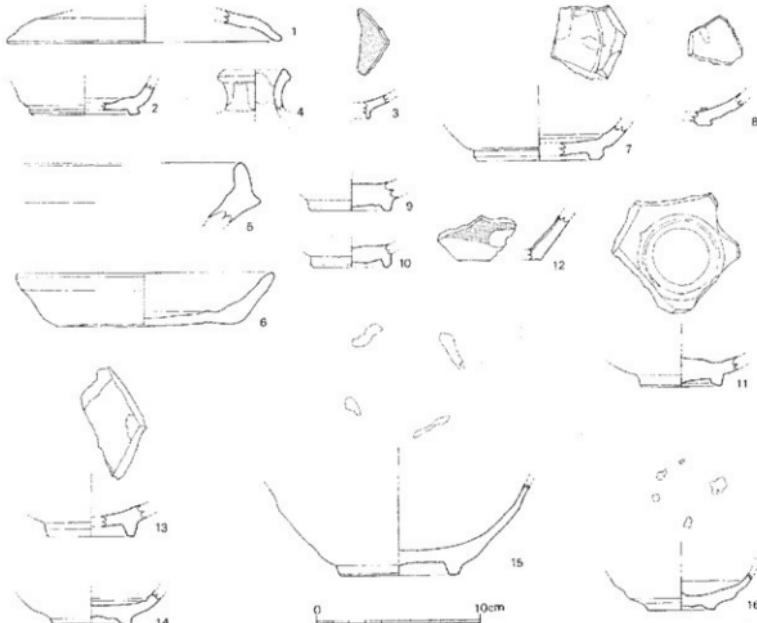
（安A第11図）無文土器（1/2）

7・8は越州窯系青磁碗で、7が森田勉氏・横田賢次郎氏や山本信夫氏分類⁽⁴⁾の碗I-1 b類、8がII-2 a類であろう。見込に目跡が認められる。7はV区5層上部出土。8は地区不明2層出土。9・10は竜泉窯系青磁碗底部である。両者ともにIV区3層出土。11は白磁皿で、見込を蛇ノ目釉刺ぎしている。16世紀代の端反皿であろうか。V区4層上部出土。12は天目茶碗の体部片である。淡灰色のややザクザクした生地に極暗褐色釉が掛かっている。付近の表面採集資料である。

●朝鮮製陶器（13～16）

13は初期高麗青磁碗底部片である。にぶい橙色のやや粗い生地に疊付を除いて黄緑色釉が掛かる。見込に1箇所目跡が認められる。14は、李朝の青磁風の淡灰緑色釉が掛かる皿である。見込に沈線状の段がつく。III区4層下部出土。15は李朝の雜釉陶器碗で、灰緑色の灰釉が高台脇まで掛かる。見込に4箇所目跡が認められる。II区4層出土。16は李朝の雜釉陶器皿である。透明釉が全体に掛かり、高台と見込に目跡が認められる。III区4層下部出土。

以上の古代・中世の土器・陶磁器は、8世紀～16世紀に及ぶが、2点の越磁と綠釉陶器の出土が注目されよう。後述する銅跨帶の出土と併せて、重要な意味をもつ資料と考えられる。



(安A第12図) 古代・中世の土器・陶磁器 (1/3)

③石器（安A第13～16図）

今回の調査では902点の石器類が出土した。磨製石器を製作する際にできる粘盤岩や頁岩の剥片・削片が536点（59.6%）、黒曜石剥片が255点（28.3%）、磨石・凹石・敲石24点、磁石21点、石鏃11点、小形石斧類8点、蛤刃石斧3点、磨製石劍4点、石庖丁1点、黒曜石製石鐵5点、黒曜石製石核1点、サヌカイト製石鏃1点、サヌカイト剥片3点、石鏃（5）・石劍（2）・小形石斧類（17）・蛤刃石斧（1）と未製品25点や不明素材4点がある。粘盤岩・頁岩の剥片と未製品・素材が多く出土していて石器製作が当地区で行われていたことが分かる。

●石鏃（1～6）

1は半基式、2～6は凹基式の石鏃で、兼形鏃といわれる5を除くと粗雑なつくりである。1～5は黒曜石製、6はサヌカイト製である。5は縄文早期の所産であろうか。重量は、1が1.15g、2が0.85g、3が1.45g、4が1.3g、5が1.1g、6が3.1gである。出土地点は、1がV区2層、2がII区4層、3がIII区3層、4がIII区2層、5がIII区3号土壙、6が大溝6層出土。

●石核（7）

7は、ランダムな剥片剥離が行われている黒曜石製の石核である。19gを割る。大溝出土。

●石劍（8～11）

8・9は鋒部、10・11は基部付近の破片である。素材は、10が頁岩の他は粘盤岩である。8は沼状落ち込み5層、9はIV区4層、10は大溝6層～6層下部、11はVI区4層出土。

●小形片刃石斧類（12～16）

12は、小形のノミ状の石斧。13～16は小形の片刃石斧。いずれも粘盤岩製で、15は未製品と思われる。12はIII区付近採集品。13はV区、14はV区2層、15は大溝6層、16は沼状落ち込み5層出土。

●蛤刃石斧（17～19）

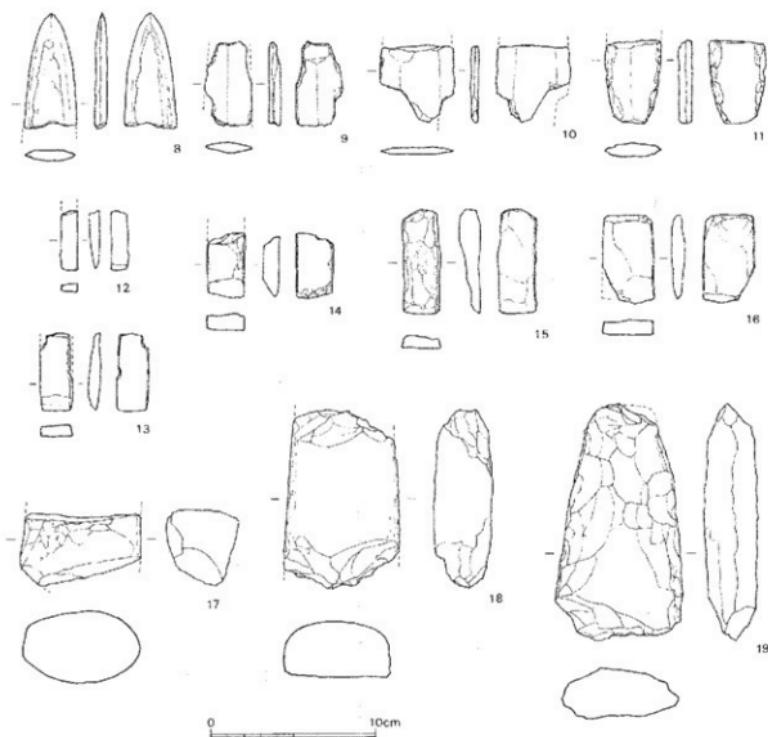
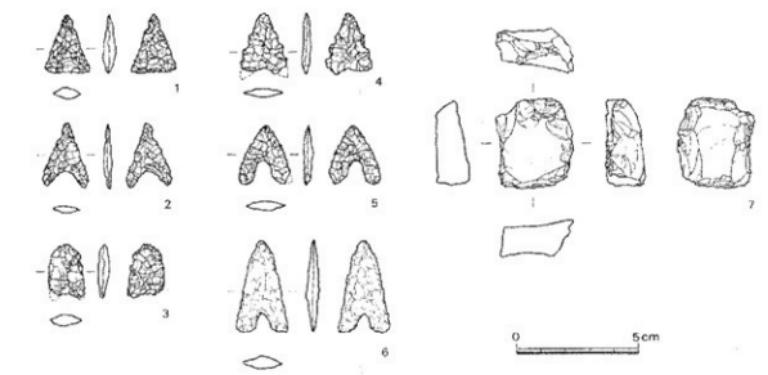
17は刃部付近の破片であるが、大半を欠損している。玄武岩製。VI区13号土壙出土。18は中程の破片で、頁岩製である。沼状落ち込み4層出土。19は石斧未製品である。頁岩製で、沼状落ち込み4層出土。

●石鏃（20～24）

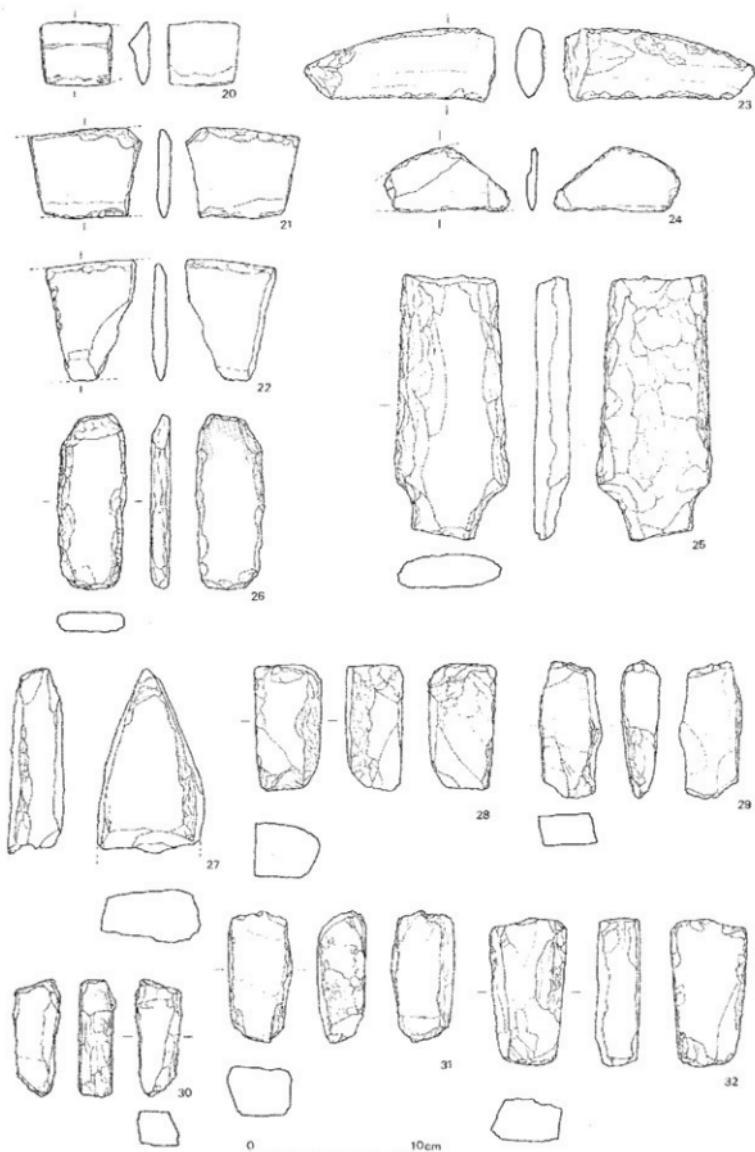
20は両端を欠損するが、下方にやや湾曲する刃部をもち用途的には石庖丁に近いものであろう。安山岩製か。大溝6層出土。21～24は大半を欠損した石鏃で、いずれも頁岩製である。21は未製品と考えられる。22は大溝6層～6層下部出土。21と24が沼状落ち込み4層、23は沼状落ち込み5層出土。

●未製品・素材（25～32）

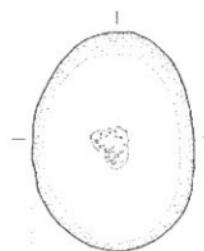
25は石劍未製品と考えられ、側面を調整して茎部もつくりだしているが、研磨されていない。上半部を欠損するところから、製作途中で放棄された品であろうか。頁岩製で、VI区11号土壙出土。26は頁岩製の扁平な板状石で、側面をラフに調整して基部をさらに茎状につくりだしているが、研磨されていない。しかし、先端には使用によると思われる摩滅痕が認められるところから、製作失敗品を土掘具などに転用したものであろうか。沼状落ち込み5層出土。27・28は頁岩製の方柱状抉入石斧の未



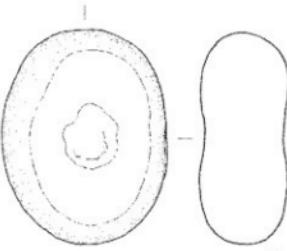
(安A第13回)出土石器①(1/2・1/3)



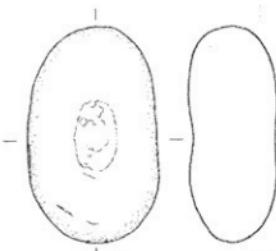
(安A第14図)出土石器②(1/3)



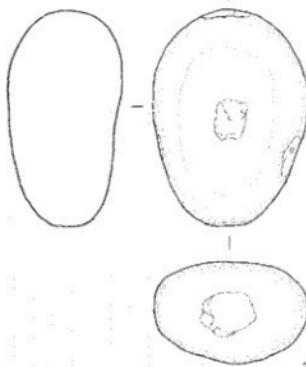
33



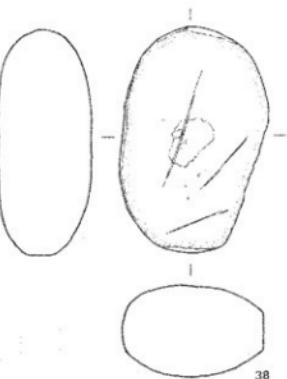
34



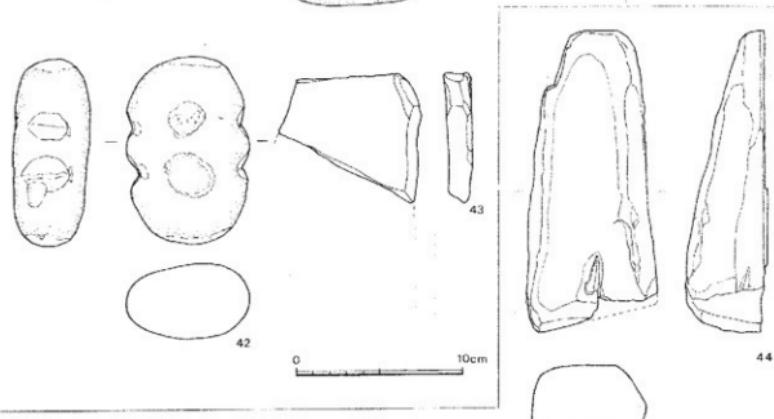
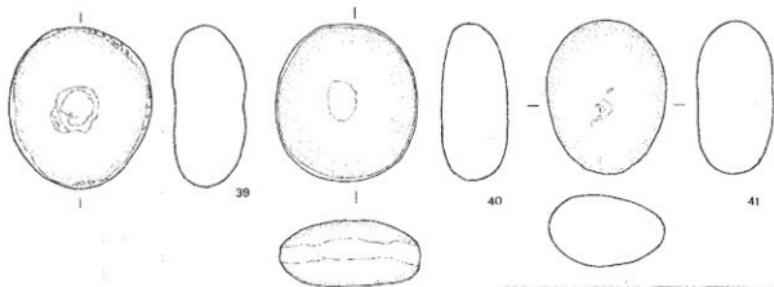
36



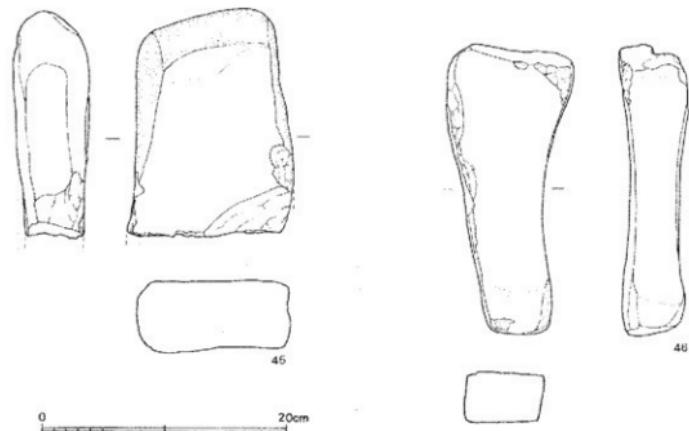
38



(安 A 第15図) 出土石器(3) (1 / 3)



（安A第16図）出土石器④



（安A第16図）出土石器④（1/3・1/4）

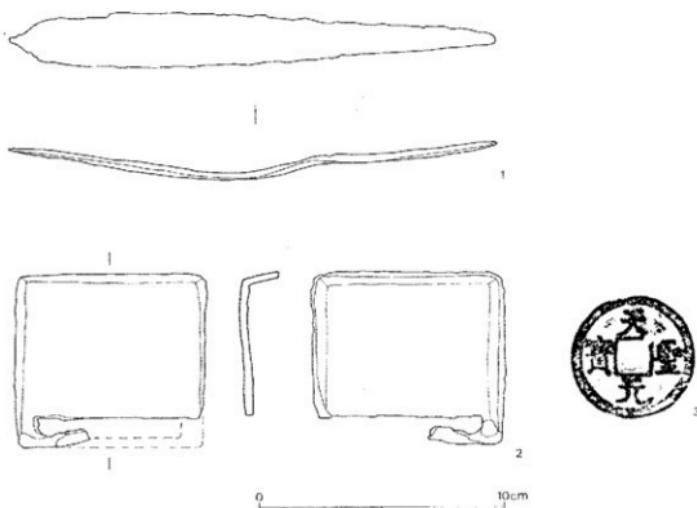
製品と思われ、27は大溝6層出土、28は沼状落ち込み5層出土。29～32は小形片刃石斧類の未製品および素材で、いずれも粘盤岩製である。29はV区4層、30はV区2層、31・32は沼状落ち込み5層出土上。

●磨石・凹石・敲石 (33～42)

摺ったり敲いたりするいくつかの機能をもった礫器である。中央の凹部については、痕跡的なものが多いが、39は明瞭に窺んでいる。敲きについては、先端を用いるもの(36・42)、先端と側面の一部を用いるもの(35・37・38・42)、側面の全周を用いるもの(39・40)ある。42は中央の凹部を2箇所ずつもち、側面に2箇所ずつ切目を入れるなど特殊な形態をもっている。最終的に石錐として使用された可能性をもっている。素材は、36が石英の他は、硬質の玄武岩を用いている。重量は、33が1.05kg、34が1.27kg、35が0.98kg、36が0.32kg、37が1.25kg、38が1.10kg、39が0.58kg、40が0.55kg、41が0.45kgである。出土地点は、33がV区3号溝、34がIII区2号土壤、35・39・42が大溝6層、36・37が沼状落ち込み4層、38・41が沼状落ち込み5層、40が沼状落ち込み出土。

●砥石 (43～46)

いずれも砂岩製の砥石で、46以外は欠損品である。43はV区、44・46が沼状落ち込み4層、45がIII区2号土壤出土。



(安A第17図) 金属器 (1/1)

④金属製品（安A第17図）

1は青銅製の脣である。柳葉形の薄片で、歪んでいる。重さ2.25gを測る。IV区2層出土。2は銅鈎帶の方形に近い横長の巡方で、一部を欠損するが、長さ3.9cm、幅3.5cm、厚さ0.8cm、重量12.1gを測る。佐藤興治氏の分類⁵⁾によれば法量的にA IIに相当し、官人位階の7位に比定される。III区4層下部出土。3は中国渡来鏡の「天聖元寶」である。真書で、初鋤は北宋の1023年である。重量2.5gを測る。IV区3層出土。

（4）小 結

今回調査の成果を簡潔に箇条書きでまとめると、以下のとおりである。

- ①弥生時代前期末～中期後半期の居住域が確認され、南側の川原畠地区の居住域との密接な関係が推定でき、東側にある閑縫遺跡が当地区の墓地として考えられるようになった。
- ②弥生期の当遺跡においては、石器製作に伴う未製品・素材と大量のチップが発見されたことにより、石剣・石鎌・石斧類製作の工房があったことが推測される。
- ③沼状落ち込み4層出土上器は、布留式末期の良好な資料である。5層に弥生時代中期のまとまった資料があることから、当地区では弥生時代後期には人の居住がなくなり、古墳時代前期の4世紀中頃に居住が再開されたことが推測される。この様相は、想像をたくましくすれば大集落原の辻道跡の解体と呼応した事象とも読み取れ、解体に伴う集団の「回帰現象」としてとらえることができるかもしれない。
- ④古代～中世関係の遺物は、北側の緩傾斜地からの流れ込みと考えられる。今回発見された銅鈎帶や越磁・綠釉陶器は大変貴重な品で、特に鈎帶の巡方はその法量から奈良期の官人位階7位の身分の者が身に帯びる品であることが判明した。
- ⑤官位7位は国司の守や掾に相当し、いずれにしても下団である宅岐団ではトップクラスの役人である。安国寺付近の緩傾斜地に、その屋敷が存在した可能性が高くなったといえよう。

註

- (1) 柳田康雄『土師器の編年・九州』『古墳時代の研究6』雄山閣出版 1991
- (2) 斎野繁春『財産目録に顔を出さない焼物たち』『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 国立歴史民俗博物館 1990
- (3) 山本信大『統計上の土器』『九州上代文化論集』1990
- (4) 森田勉氏・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中國陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4『九州歴史資料館』1978ほか 山本信夫「土器の分類」「大宰府条坊跡II」太宰府市教育委員会1983ほか
- (5) 佐藤興治「金属器」『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所 1975
銅鈎帶や国司関係資料について、横山順氏、川口洋平氏に教示を受けた。感謝申し上げたい。

図 版



遺跡遠景（南から）



調査風景



III区全景



IV区全景



V区全景



VI区全景



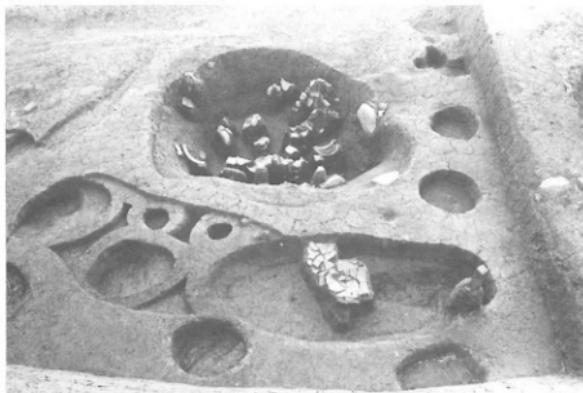
大溝全景（II区）



大溝北壁



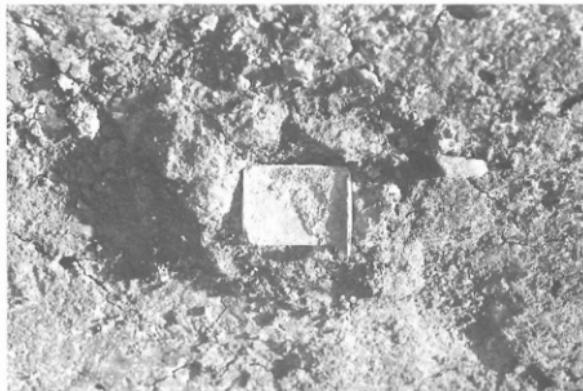
沼状落ち込み
(VII区)



土壤遺物出土状況
(III区)



13号土壤遺物出土状況
(VI区)



鈴帶出土状況
(III区)

6. 安国寺前B遺跡の調査

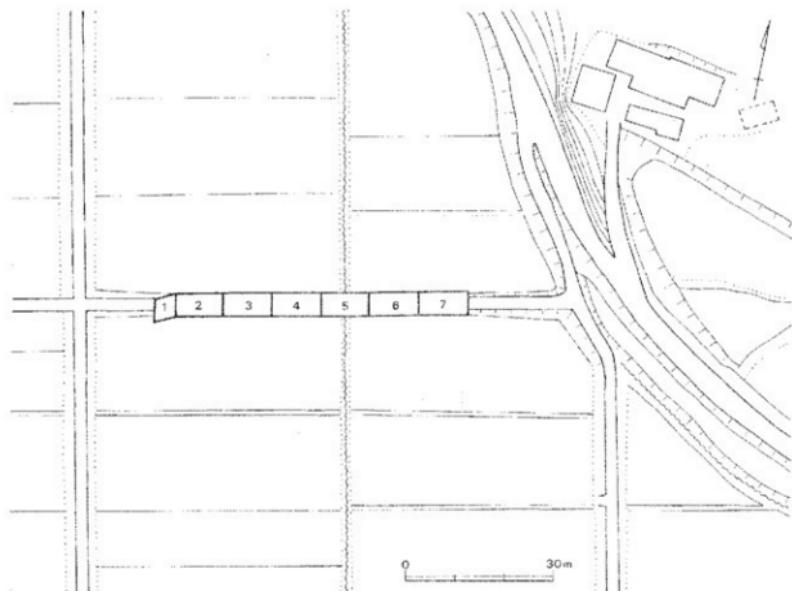
6. 安国寺前B遺跡の調査

(1) 調査概要

本遺跡は、壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字閑縁に所在する。県指定史跡安国寺の南東に位置し、幡鉢川北側の標高7～8mほどの水田面に立地する。平成4年度の範囲確認調査では、中世の水田面および畦と推測される遺構が確認されていた。今回の調査は、平成7年度の圃場整備事業によって本遺跡が農道と排水路建設工事にかかるために発掘調査を平成7年5月18日～平成7年6月23日に実施したものである。調査対象地は農道と水田面で、1～7区の調査区を設定して320m²の発掘調査を行った。そのうち、1～6区(255m²)は県教育委員会が、7区(65m²)は芦辺町教育委員会が調査を担当した。調査の結果、古代～中世を中心とする遺物がコンテナ2箱分出土した。

(2) 土層と遺構

調査地区の基本土層は、1～5層に分けられる。1層は現表土、2～3層は旧水田層である。4層は低湿地の堆積土層であるが、4d層や4g層で酸化鉄の沈殿がみられるところから水田として利用されていたことが考えられ、4b層・4e層・4f層の砂層や砂疊層によって埋没した可能性が推測される。5層が基盤のいわゆる地山層である。出土遺物から、基本的に1層は古代～中世(9世紀～15



(安国寺前B) 安国寺前B地区周辺地形図 (1/1,000)

世紀代), 2~3層は近世~近代の年代が考えられる。

(3) 遺物

今回の調査では680点余の遺物が出土している。そのうち土器・陶磁器が664点出土していて大半を占め、その他に石器6点、鉄器1点、滑石製品2点、土錐1点、瓦3点などが出土している。

①土器・陶磁器

土器・陶磁器は、弥生土器や近世陶磁器も若干出土しているが、ここでは主体を占める古代~中世の遺物についてふれたい。古代・中世の遺物には、中国産の青磁・白磁・陶器、朝鮮産の青磁・白磁・陶器、ベトナム産青磁、国産の土器・須恵器・瓦器・須恵質陶器などが出土している。

●中国製陶磁器 (1~8)

1は越州窯系青磁碗底部片で、森田勉・横田賢次郎氏分類¹¹(以下森田・横田分類)の碗II-2類である。4区4層出土。2は同安窯系青磁碗底部片で、森田・横田分類の碗I-1b類である。1区4層出土。3は竈泉窯系青磁碗底部片で、鍋連弁文を施す森田・横田分類の碗I-5b類である。2区3層下部出土。4は白磁碗底部片で、森田・横田分類の碗V類である。2区4層出土。5は白磁杯底面で、内面に光沢のある透明釉が掛かる。森田勉氏分類¹²のD群の杯であろう。6区4層出土。6は白磁小皿底部片で、見込を蛇ノ目刻ぎしている。森田・横田分類の皿III-1類であろう。2区4層出土。7は小皿底部片で、低い高台が付く。森田・横田分類の皿II類か。4区3層下部出土。8は口禿げの白磁小皿の2/3ほどの破片で、やや青みをもつ灰白色釉が底部まで掛かる。法量は、口径9.4cm、器高2.4cm、底径5.5cmを測る。2区4層出土。

●朝鮮製陶磁器 (9)

9は白磁皿底部片で、見込には沈線状の段が入り、胎上目の目跡がつく。黄白色のややザングリとした生地に、薄い緑色をおびた透明釉が高台脇まで掛かる。6区4層出土。この他に固化していないが、初期高麗青磁の粗雑な碗破片などもみられる。

●ベトナム製陶磁器 (10)

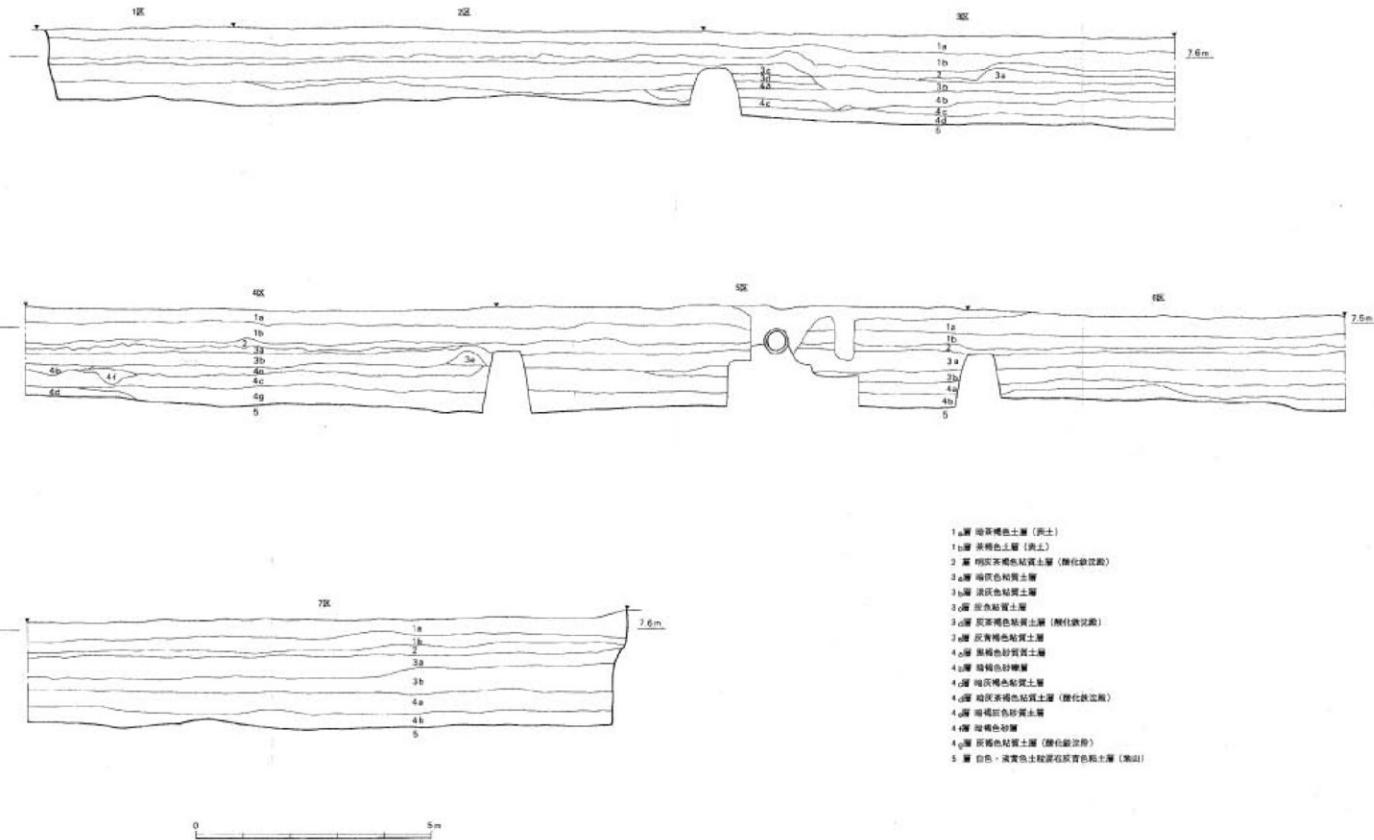
10は青磁碗底部片で、黄緑色の透明釉が高台脇まで掛かる。見込には、放射状に拡がる印花文を施している。胎土は黄白色の硬い生地で、高台内はろくろ右回りの削りを行っている。2区3層下部出土。14世紀~15世紀代の資料であろう。

●国産土器・陶磁器 (11~13)

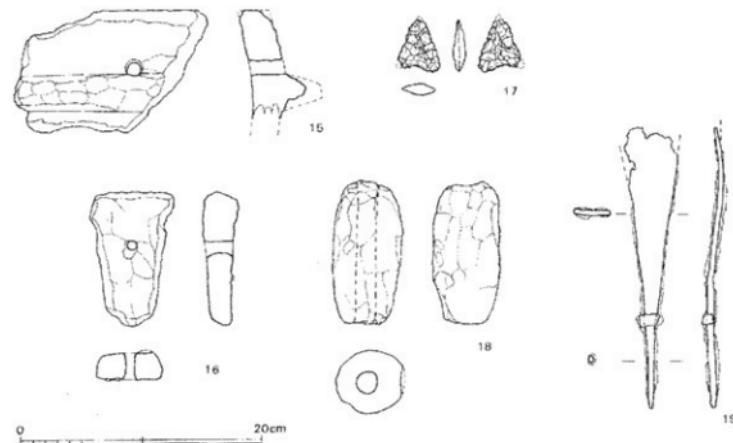
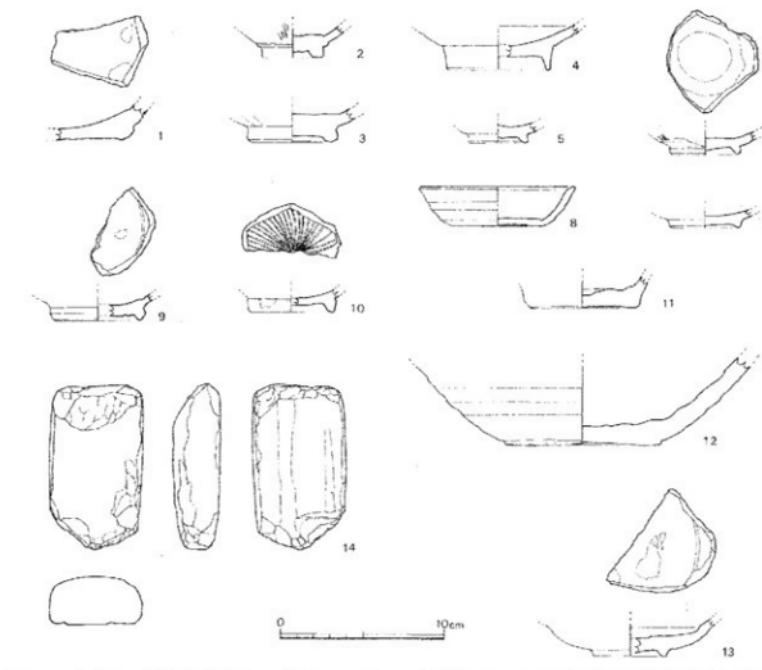
11はろくろ右回りの底部糸切り離しの土器器質小皿で、口縁端部を欠失している。胎土に赤色砂粒・石英砂粒と極わずかに金雲母片を含んでいる。4区4層出土。12は東播磨系の瓦質鉢体下半部片である。底部に糸切り離しと板目痕が着く。内面の器表は使用によって磨滅りスペベしている。胎土には石英砂粒を含む。4区4層下部出土。13は透明な灰釉が内面に掛かる唐津系の折縁皿片で、見込に砂目の目跡が着く。4~5区4層上部出土の唯一近世まで下がる資料で、混入の可能性をもつ。

②その他の遺物

●石器・石製品 (14~17)



(安B第2图) 安国寺前B道路土层断面图 (北壁· 1/10)



(安B第3図) 安国寺前B遺跡出土遺物 (1/3・1/2)

14は、頁岩を用いた砥石である。上下端が打ち欠かれているが、形状からみると弥生時代の石斧の転用品の可能性が高いが、時期的に弥生期のものかそれより下る資料であるのか判断ができない。重量320gを測る。3区4層出土。15は、鍔をもつ滑石製石鍋の口辺部片である。鍔直上に一孔が穿かれている。形態的にみると、森田勉氏分類のB-1類⁽³⁾である。7区4層出土。16は、滑石を加工した不明製品である。上方側面に二箇所抉りがみられ、中央には孔が一つ穿かれている。おそらく滑石製石鍋片を再利用したものであろう。重量41gを測る。3区3層出土。17は、黒曜石製の石鐵である。形態は粗雑なつくりの凹基無茎式で、弥生期の所産であろう。先端と片脚端を欠くが、重量1.4gを測る。4区4層出土。

●土製品 (18)

18は、やや大形の管状土錐である。手すくねでいびつなつくりであるが、極細かい白色粒・赤色粒と角閃石と思われる黒色粒が含まれている。重量60gを測る。2区4層出土。

●鉄製品 (19)

19は、先端を欠失した鉄鐵である。残存形からみれば、有茎平根式の方頭式か圭頭式の鐵になるとと思われる。時期的には、古代～中世期の資料であろうか。7区4層上部出土。

(4) 小 結

本遺跡における今回の調査によって古代～中世の遺物包含層が確認されたが、これらの遺物はおそらく北側の安国寺付近に居住域があつて当地に流れ込んだことが推測される。今回の越州窯系青磁の出土は、本遺跡南西に位置する川原畠地区の平成6年度調査において北東に向かう奈良期の道路跡が確認されたことや、本遺跡西側に近接した安国寺前A遺跡でも平成7年度調査で越州窯系青磁・綠釉陶器・青銅製帶が出土しており、以上のことを勘案すれば、安国寺付近の緩傾斜地に古代の有力者の居館が存在した可能性を想定することができるようになった。

またベトナム系陶磁器は、芦辺町湯岳今坂触観城跡の平成8年度調査において資料的にまとまって出土しており、そこを対鮮貿易の拠点として南方との中継貿易を行っていた松浦党志佐氏との関連が考えられる。

註

- (1) 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978
- (2) 森山勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁器研究会 1982
- (3) 森田勉「滑石製容器一特に石鍋を中心として」『仏教芸術148号』毎日新聞社 1983

図 版



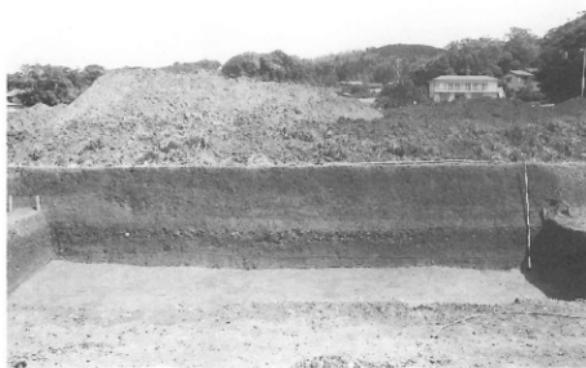
遺跡遠景（北西から）



調査風景



調査風景



VII. まとめ

今回の調査で判明した考古学的成果を、各調査ごとに概観してみたい。原の辻遺跡・大川地区の調査では、まとまった量の古代の遺物が出土し、その中に初期貿易陶磁器や施釉陶器が多く含まれることから、高級役人や豪族などの存在が推測される。遺物は9世紀を主体とするが、島内においてこの時期の遺跡が確認された意義は大きく、同じ遺跡内で出土した木簡などと合わせて官衙の所在についても一石を投じるものといえるだろう。

原の辻遺跡・川原畠地区の調査では、弥生時代前期末から後期初頭にかけての生活跡が確認された。遺構は、複数の土壙が確認されたが、その性格については不明な点が多く、今後の検討が必要である。従来、環濠の外に広がることがないと考えられた生活空間が、北側に広がっていることが確認されたことは、原の辻遺跡の発展や構成を考える上で大きな意味をもつものと考えられる。また、時期は下るが、この生活跡を切ってつくられた八世紀代の道路状遺構も確認された。古代の道路は、最近各地で報告例が相次いでいるが、今回原の辻遺跡で確認されたことで、律令時代の表岐について問題を提起した意味は大きい。

原の辻遺跡・芦辺高原地区の調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての溝や渠路などが確認された。付近は低地であることから、出土した遺物は台地上からの流れ込みである可能性が高い。

安国寺前A遺跡の調査では、弥生時代前期末から中期後半の居住区が確認され、南側の川原畠地区の生活跡との関係、また東側の閑縁遺跡との関係が注目される。石器の未製品などが大量に出土したことから、石製品の工房などがあったことが推測される。また、古代の遺物として銅製鉄帶が出土したが、高位の役人の存在が推測され付近に巣敷などの存在が推測される。

本書に収録した調査を総括すれば、次のようなことがいえる。

- ①弥生時代については、原の辻遺跡の環濠北側に居住区が存在し、その様相が明らかになりつつある。
- ②古代においては台地の北側・南側において遺構や遺物が確認され、官衙等の所在について問題を提起している。また、遺物には東アジアを含めた広範囲な交易を物語るものが多く含まれる。

これらの成果が、今後の調査を通してより深められることを期待したい。

報告書抄録

ふりがな	はるのつじ あんこくじまえA あんこくじまえB							
書名	原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡							
副書名	轄鉢川流域総合整備計画に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告							
巻次	II							
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	山下英明・川口洋平							
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所							
所在地	長崎県壱岐郡芦辺町深江鰐魚触1092-1							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所取地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐郡芦 辺町・石田町		42423	73-10	45分	45分		993.1m ²
安國寺前A遺跡	長崎県壱岐郡芦 辺町 深江宋触		42424	72-85	46分	20秒		1,810m ²
安國寺前B遺跡								
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原の辻遺跡	集落	弥生・古代	土壙・溝	弥生土器・初期貿易陶磁・銅帶				
安國寺前A遺跡	遺物包含地	弥生・古代	溝・道路跡					
安國寺前B遺跡	遺物包含地	弥生・古代						

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集
原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡

1998. 3. 31

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂印刷